

# 京都府遺跡調査報告書

第 4 冊

青 野 西 遺 跡

1 9 8 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し、間もなく5年が過ぎようとしています。その設立の目的は、京都府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行い、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切に考える考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は、京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、本報告の青野西遺跡も由良川改修工事に伴う事前調査であります。調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され、消滅する運命にあります。発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅していいはずがありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され、現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この『京都府遺跡調査報告書』は、遺跡の重要性を理解していただくために、またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し、その活用を図るために刊行するものであります。この報告書の他に、調査結果を掲載した『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では、開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会、綾部市教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け、さらに炎暑の下、熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって、これら多くの関係者に厚く御礼申し上げます。

昭和60年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本報告書は、昭和58年4月から同年9月まで実施した京都府綾部市青野町上フケに所在する青野西遺跡の発掘調査報告書である。昭和57年度の試掘調査（青野遺跡第8次調査）の結果についても、「西地区」（青野西遺跡地区）と「中央地区」（由良川旧河道部分）に関しては、併せて報告している。
2. この調査は、建設省近畿地方建設局の依頼により、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。現地調査は、調査課主任調査員辻本和美と調査員小山雅人が担当した。
3. 本報告書の作成にあたり、出土遺物の撮影は高橋猪之介氏に依頼した。本文執筆及び編集は、小山雅人が行い、編集・校正は、劉和子の協力を得て小山雅人・土橋誠が行った。

## 目 次

はじめに	1
第1章 遺跡と調査経過	3
第1節 位置と環境	3
第2節 調査の方法とその経過	10
第2章 遺 構	17
第1節 竪穴式住居跡	17
第2節 土壇・溝・掘立柱建物跡	31
第3節 自然の流路	34
第3章 遺 物	39
第1節 弥生後期～古墳前期の遺物	39
第2節 奈良・平安時代の遺物	66
第4章 考 察	69
第1節 青野西遺跡の古式土師器	69
第2節 竪穴式住居に関する二、三の問題	79
第5章 結 論	84
第1節 青野西遺跡——総括	84
第2節 古墳出現期の綾部地方	87



## 挿 図 目 次

第 1 図	青野西遺跡の位置	3
第 2 図	綾部市遺跡地図	5
第 3 図	成山 3 号墳出土土器一例	7
第 4 図	旧綾部町周辺遺跡分布図	8
第 5 図	綾中廃寺の軒瓦	9
第 6 図	調査地周辺平面図	11
第 7 図	青野西遺跡遺構配置図	15
第 8 図	1 号住居跡実測図	17
第 9 図	2 号住居跡実測図	18
第 10 図	3 号住居跡実測図	19
第 11 図	4 号住居跡実測図	20
第 12 図	5 号住居跡実測図	21
第 13 図	6 号住居跡実測図	22
第 14 図	7 号住居跡実測図	24
第 15 図	8 号住居跡実測図	25
第 16 図	9 号住居跡・土塚 5 実測図	26
第 17 図	10 号住居跡上層実測図	27
第 18 図	10 号住居跡下層・11 号住居跡実測図	27
第 19 図	12 号住居跡実測図	29
第 20 図	13 号・14 号・15 号住居跡実測図	30
第 21 図	土塚 1 実測図	31
第 22 図	土塚 6 実測図	32
第 23 図	溝 3 実測図	33
第 24 図	自然流路 1 断面実測図	35
第 25 図	自然流路 2 断面実測図	37
第 26 図	古式土師器型式分類一覽(1)	40
第 27 図	古式土師器型式分類一覽(2)	41
第 28 図	土器実測図(1)	53
第 29 図	土器実測図(2)	54
第 30 図	土器実測図(3)	55

第 31 図	土器実測図(4).....	56
第 32 図	土器実測図(5).....	57
第 33 図	土器実測図(6).....	58
第 34 図	土器実測図(7).....	59
第 35 図	土器実測図(8).....	60
第 36 図	土器実測図(9).....	61
第 37 図	土器実測図(10).....	62
第 38 図	土錘実測図.....	64
第 39 図	石鏃実測図.....	64
第 40 図	石斧・砥石実測図.....	65
第 41 図	玉類実測図.....	66
第 42 図	土器実測図(11).....	68
第 43 図	青野西遺跡出土古式土師器編年試案(1).....	75
第 44 図	青野西遺跡出土古式土師器編年試案(2).....	77
第 45 図	青野西遺跡の遺構の変遷.....	85

## 付 表 目 次

第 1 表	土器観察表(1).....	45
第 2 表	土器観察表(2).....	46
第 3 表	土器観察表(3).....	47
第 4 表	土器観察表(4).....	48
第 5 表	土器観察表(5).....	49
第 6 表	土器観察表(6).....	50
第 7 表	土器観察表(7).....	51
第 8 表	土器観察表(8).....	52
第 9 表	土錘観察表.....	63
第 10 表	奈良・平安時代の土器観察表.....	67
第 11 表	土器計数表.....	70
第 12 表	丹後・中丹土器編年対照表.....	74
第 13 表	時期別竪穴式住居跡一覧表.....	80

## 図 版 目 次

- 図版第 1 青野西遺跡周辺航空写真  
図版第 2 青野西遺跡調査地航空写真  
図版第 3 (1)青野西遺跡全景(東から) (2)同(西から)  
図版第 4 (1)1号住居跡 (2)2号住居跡  
図版第 5 (1)3号住居跡 (2)4号住居跡  
図版第 6 (1)5号住居跡 (2)同, 特殊ピット  
図版第 7 (1)6号住居跡 (2)同, 北東柱穴附近  
図版第 8 (1)7号住居跡 (2)同, 特殊ピット  
図版第 9 (1)8号住居跡床面遺物出土状態 (2)8号・7号住居跡・土壇1  
図版第10 (1)9号住居跡 (2)10号・11号住居跡  
図版第11 (1)10号住居跡上層 (2)同, 上層配石  
図版第12 (1)12号住居跡 (2)13号・14号・15号住居跡  
図版第13 (1)溝3南半部 (2)溝3断面  
図版第14 (1)試掘第7トレンチ (2)試掘第9トレンチ  
図版第15 壺形土器  
図版第16 甕形土器  
図版第17 鉢形土器(1)  
図版第18 鉢形土器(2)  
図版第19 高杯形土器  
図版第20 器台形土器(1)  
図版第21 器台形土器(2) その他  
図版第22 布留式土器(1)  
図版第23 布留式土器(2) 青野西遺跡出土主要土器  
図版第24 土錘・須恵器・土師器  
図版第25 石器・砥石・玉類

# 青野西遺跡発掘調査報告

## はじめに

青野遺跡は、由良川中流域にあって、弥生時代から奈良時代の遺物が散布するとともに、10年来発掘調査が行われ、府下有数の集落遺跡として著名なものである。

たまたま、建設省近畿地方建設局が計画した由良川左岸の改修工事によって、この遺跡の北西の一画が堤防の下になることが判明した。そこで、当調査研究センターは、昭和57年度に青野遺跡第8次調査として当該地(約4,300m<sup>2</sup>)の試掘調査を事前に実施した。その結果、次の知見が得られた。<sup>(注1)</sup>

(1) 調査地の中央部(第7～10・14・15トレンチ)は、幅70m・最深部現地地表下3mの旧流路で占められており、これを従来から推定されていた由良川旧河道跡(第4図C)と判断した(本書第2章第3節)。

(2) 調査地の東部は、旧河道右岸から東へ約40mの間(第5・6トレンチ)には遺構・遺物は全くなく、更に東の第1～第4トレンチでは弥生中期の溝や奈良時代の溝を検出している。第4・第5トレンチ間辺りが青野遺跡の西限と考えた。

(3) 一方、調査地の西部(第11～13・15トレンチ)には、竪穴式住居跡が試掘トレンチに5基以上認められ、集落遺跡の存在が新たに知られた。

以上の成果を建設省近畿地方建設局福知山工事事務所に報告し、協議の結果、西部地区の堤防下になる2,800m<sup>2</sup>を発掘調査することになり、文化財保護法第98条第1項の規定に基づき、昭和58年4月4日付けで文化庁長官あて「発掘調査届出書」を提出した。

これに先立って、当調査研究センターは、新発見の集落が旧河道右岸の青野遺跡と立地を異にすることから、綾部市教育委員会と相談の上、新たに「青野西遺跡」と命名した。現地調査においては、周到な準備を行うとともに、調査に伴う組織を次のとおりとして、昭和58年4月25日から9月2日まで発掘調査を実施した。

発掘調査総括責任者	栗 栖 幸 雄	事務局長
発掘調査責任者	堤 圭 三 郎	調査課長
発掘調査担当者	辻 本 和 美	主任調査員
	小 山 雅 人	調査員
発掘調査事務責任者	白 塚 弘	総務課長

現地調査にあたっては、上記の辻本和美・小山雅人が担当したが、調査補助員として、

福井 朗・友次雅子・大西光弘・萩生田憲昭・吹田 浩・楠昌一郎・池場 稔・中村博光  
・大嶋直樹・高橋孝次郎・高間正年・森 一九・日榮正二・堀田太士・朝子道男・松永厚  
典・桑島 淳・恵美寿彦・長谷川法明・安田喜一・堀 雅之の諸氏が、また、現地作業員  
として、大島昭二郎・太田綱雄・大槻幸作・片山勇雄・四方悠治郎・角山利一・西川勇夫  
・朝子きぬ江・村上マチ子・由良はつ枝・塩見金雄・井田隆雄・山下潔巳・森本 薫・藤  
原 透・大槻章夫の諸氏が、それぞれ発掘調査に参加・協力された。気候条件の厳しい盛  
夏の中、調査に従事していただいた以上の方々の御苦勞に対し、深く感謝の意を述べたい。

そのほか、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所をはじめ、京都府中丹教育局・綾部  
市教育委員会・綾部史談会・青野町自治会から全面的な協力と援助を受けた。また、本書  
の執筆にあたっては、長年青野遺跡の調査を担当されてきた綾部市教育委員会の中村孝行  
氏をはじめ、入江正則(大阪文化財センター)、禰宜田佳男(大阪府教育委員会)、橋本清一  
(京都府立山城郷土資料館)、橋本久和(高槻市教育委員会)、樋口吉文(堺市教育委員会)、  
森岡秀人(芦屋市教育委員会)の各氏に貴重な御教示・御助言をいただいたことを記し、感  
謝の意を表する。

## 第1章 遺跡と調査経過

### 第1節 位置と環境

<sup>あおのにし</sup>青野西遺跡は、京都府綾部市青野町上フケに所在し、弥生時代後期から古墳時代前期を盛期とする集落遺跡である。

綾部市は、令制の山陰道丹波国何鹿郡にほぼ一致し、北は舞鶴市と大江町(加佐郡)、西は福知山市と三和町(天田郡)、南は船井郡和知町、そして東は福井県(旧若狭国)に接している<sup>(注2)</sup>。

綾部市は西隣りの福知山市及び天田郡とともに由良川中流域として位置づけられる。この地域は「中丹」とも呼ばれるが、これは由良川下流の大江町と舞鶴市も含めることが多く、そしてこの範囲で方言もほぼ共通している。水系から綾部市を区分すると、(1)由良川本流域に沿う山

家・綾部・中筋・佐賀の南部4地区、(2)犀川流域の豊里・物部・志賀郷の西部3地区、(3)八田川流域の吉美・西八田・東八田の北部3地区、(4)上林川流域の口上林・中上林・奥上林の東部3地区に分けられる(東八田の一部は、舞鶴湾に注ぐ伊佐津川流域である)。

旧綾部町(古くは漢部郷)は、由良川の福知山盆地への入口にあたる扇状地であり、旧河道も扇状に数本認められる(第4図)。南の四ツ尾山から北の由良川へと南高北低の地勢を呈する。青野町はその北東部を占め、南半が住宅地、北半が田畑になっている。

青野西遺跡の周辺は、綾部市でも有数の古代遺跡の密集地であり、南北2km・東西1kmの範囲の山林・田畑・住宅地に、弥生時代から中世にかけての集落・墳墓・古墳・官衙・寺院等の遺跡が重なりあっている。この地域は、現在の綾部市の中心に近く、勢い開発に伴う発掘調査も集中し、市内各地の古墳を別にすれば、綾部市でも考古学的に最もよく知られた地域である。以下、この地域の古代を中心に歴史的環境の概観を試みたい。

旧石器・縄文時代の遺跡は、市内ではまだ調査例がなく、市内各地で石器を主とする散布地がいくつか知られるのみである。

旧石器時代の遺物として、西原町遺跡(第2図01)の円盤状石器、上杉町旗投遺跡(同02)の彫刻刀型石器、栗町<sup>いくたの</sup>久田野遺跡(同03)のナイフ型石器が報告されている。



第1図 青野西遺跡の位置

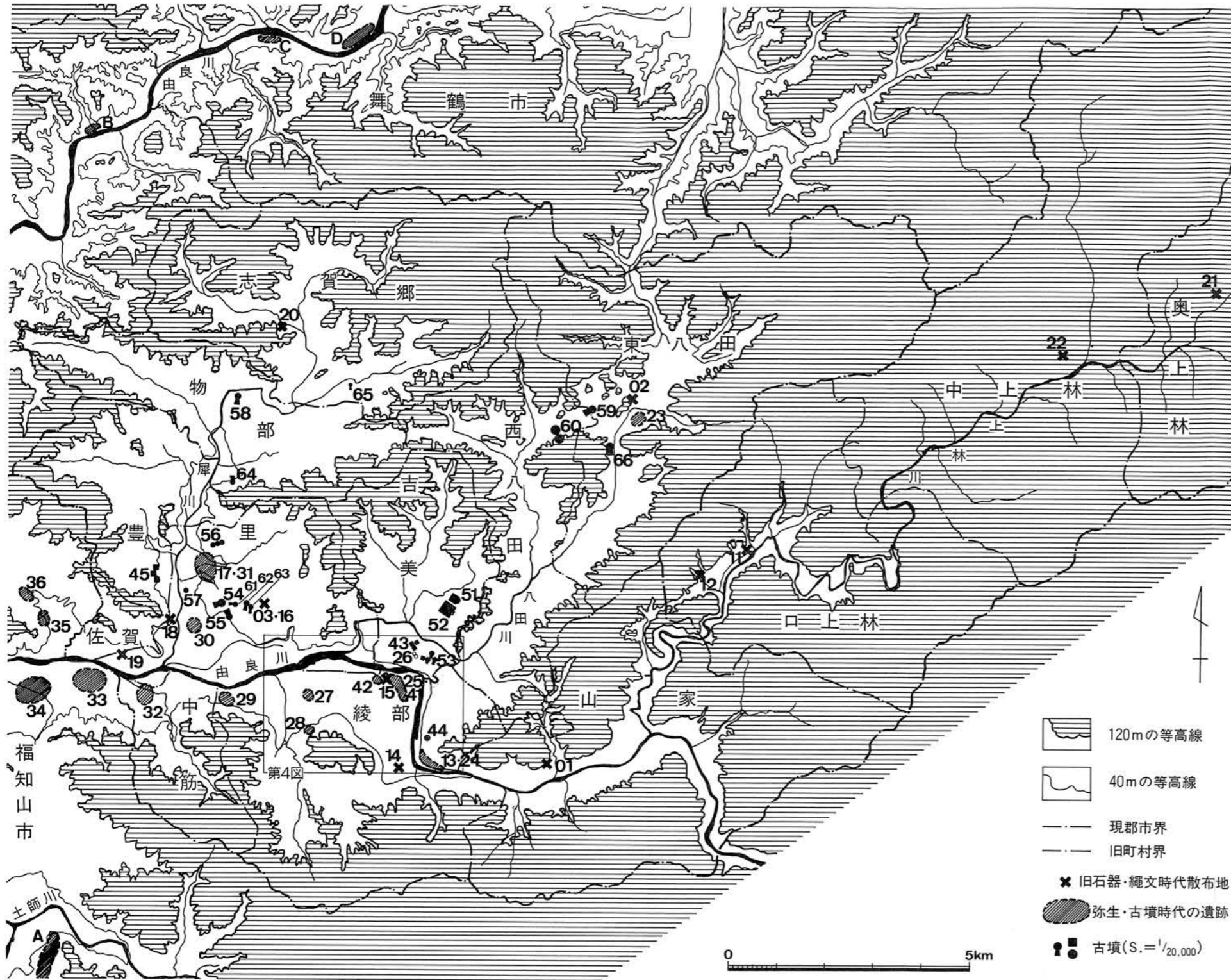
縄文時代の遺物の散布地はやや多く、市内で10か所挙げられる(同11～20)が、ここでは青野遺跡の第1次調査(A地点)で縄文土器片の出土があったことを記すにとどめる。綾部市の周辺では、調査された縄文遺跡として大江町の三河宮そうごみやの下遺跡した(同B)や舞鶴市の桑飼くわがい下遺跡しも(同C)等が挙げられる。

弥生時代の遺跡は12か所、旧何鹿郡で現在福知山市に属するものを加えると16か所にのぼる。このうち、前期の遺物が確認されたのは館遺跡たち(同17)1か所(注3)である。16遺跡のほとんどが散布地であり、発掘調査で遺構・遺物が検出されたのは青野遺跡だけである。現在主として畑地になっている自然堤防上に立地するこの遺跡は、昭和59年度現在8次にわたる調査が行われ、この微高地のほぼ全域が遺跡であることが確認されている。遺構は弥生時代中期～古墳時代前期と7世紀を盛期とするが、縄文時代や中世の遺物も出土している。弥生時代中期の遺構としては、溝や土塚墓に限られ、住居跡は検出されていない。福知山市宮遺跡みや(同A)や舞鶴市志高遺跡したか(同D)の中期の墓制は方形周溝墓を採用しているのに対し、青野では周溝が検出された例はない。土器はいわゆる「播磨系」で、これは福知山市域の中期遺跡と共通しており、由良川中流域の初期農耕文化が、瀬戸内から加古川をさかのぼって到来したことを物語っている。

後期に位置づけられる遺構としては、青野遺跡第1次調査(A地点)の第16号円形住居跡がある。また、青野の北、由良川北岸の丘陵上に立地する久田山古墳群きゅうたやまの10支群のひとつH支群(同26)が調査され、弥生時代後期から終末期の墳墓群であることが確認された。ほとんど墳丘らしきマウンドをもたない4基はいずれも一墳多葬であるが、土器以外の副葬品——鉄器(直刀・刀子・鏃等)や玉類(管玉)を出した主体部は、いずれも各墳丘上で中心的位置を占める大型の土塚であった。福知山市の宝蔵山(注4)1～3号墳ほうぞうやま、豊富谷丘陵遺跡等の墳墓も含め、これら後期の遺跡から出土する土器は、丹後地方の後期土器と共通しており、久田山H支群も丹後の台状墓の系譜を引くものであろう。弥生後期に顕著となる山陰・丹後・北陸に広がる日本海文化圏に中丹地域も属していたのである。

古墳時代初頭(畿内庄内式土器併行期)に関して、この時期の一括資料が青野遺跡でも増加している。第4次調査の35U06地点の住居跡床面の一括資料や、第6次調査のSB 8117(住居跡)等の資料がそれである。本書で報告する青野西遺跡(同42)もこの時期を最盛期とする集落である。この時期、墳墓は前代の台状墓的な色彩を濃く残しながらも、古墳と言える規模と内容を持つものが出現する。小西町の成山古墳群なるやま(同45)は、館遺跡と犀川を挟む対岸の台地上に立地する3基の方墳であり、昭和40年に2号墳・3号墳が調査されている。2号墳は1辺20m・高さ2.5mの方墳と考えられ、主体部は長さ約5mの割竹形木棺であり、棺中央部から飛禽文鏡1面とガラス小玉116個が朱とともに出土した。3号墳は、





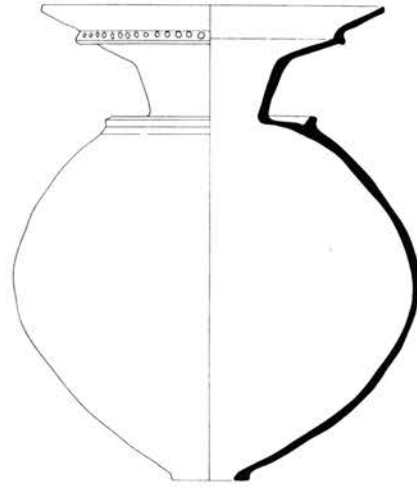
綾部市（旧何鹿郡）の遺跡（6世紀まで）

- |                  |                                    |
|------------------|------------------------------------|
| 01～03 旧石器時代の遺跡   | 41～45 古墳時代前期の遺跡と古墳                 |
| 01 西原町遺跡(西原町)    | 41 青野遺跡(=15)                       |
| 02 旗投遺跡(上杉町)     | 42 青野西遺跡(青野町)                      |
| 03 以久田野遺跡(栗町)    | 43 久田山C支群(3基)(里町)                  |
| 11～20 縄文時代の遺跡    | 44 紫水ヶ丘古墳(味方町)                     |
| 11 張田遺跡(十倉中町)    | 45 成山古墳群(3基)(小西町)                  |
| 12 十倉志茂遺跡(十倉志茂町) |                                    |
| 13 味方遺跡(味方町)     | 51～60 古墳時代中期の古墳                    |
| 14 寺町遺跡(寺町)      | 51 菖蒲塚古墳(多田町)                      |
| 15 青野遺跡(青野町)     | 52 聖塚古墳(多田町)                       |
| 16 以久田野遺跡(=03)   | 53 久田山D・F支群(里町)                    |
| 17 館遺跡(館町)       | 54 殿山1号墳(栗町)                       |
| 18 石原遺跡(石原町)     | 55 沢3号墳(栗町)                        |
| 19 小貝遺跡(小貝町)     | 56 高谷6・7・8号墳(館町)                   |
| 20 [遺跡名未定]       | 57 三宅1号墳(豊里町)<br>(荒神塚)             |
| 21～36 弥生時代の遺跡    | 58 岫山古墳(物部町)                       |
| 21 行道遺跡(睦寄町)     | 59 茶臼山古墳(高槻町)                      |
| 22 片山遺跡(八津合町)    | 60 政次古墳群(七石町)                      |
| 23 上杉遺跡(上杉町)     |                                    |
| 24 味方遺跡(=13)     | 61～66 古墳時代後期の前方後円墳<br>[後期の群集墳等は略す] |
| 25 青野遺跡(=15)     | 61 以久田野78号墳(栗町)                    |
| 26 久田山H支群(里町)    | 62 以久田野16号墳(栗町)                    |
| 27 岡町遺跡(岡町)      | 63 以久田野15号墳(栗町)                    |
| 28 明智平遺跡(岡町)     | 64 須波伎東古墳(物部町)                     |
| 29 岡ノ段遺跡(大島町)    | 65 稻荷山古墳(向田町)                      |
| 30 長砂遺跡(豊里町)     | 66 上杉1号墳(梅迫町)                      |
| 31 館遺跡(=17)      |                                    |
| 32 高津遺跡(高津町)     | A～D 旧何鹿郡外の遺跡                       |
| 33 観音寺遺跡(観音寺*)   | A 宮・ケシケ谷・奥谷西遺跡群<br>(福知山市)          |
| 34 興遺跡(興*)       | B 三河宮の下遺跡(大江町)                     |
| 35 立石遺跡(報恩寺*)    | C 桑飼下遺跡(舞鶴市)                       |
| 36 広野遺跡(報恩寺*)    | D 志高遺跡(舞鶴市)                        |
|                  | (*33～36は現在福知山市に属する。)               |

第2図 綾部市遺跡地図(6世紀まで)



1 辺約20m・高さ1.5mの方墳で、2基の主体部のうち、中心主体部は長さ約4mの組合式木棺、その西に接する第2主体部は土器蓋土塚墓で、両主体部とも副葬品はない。3号墳第2主体部に用いられた土器(第3図)や2号墳の飛禽文鏡の検討から、両墳とも畿内と言う庄内式期頃に編年される。そこで、成山2号墳・3号墳は、前代の久田山H支群が尾根上のごく低い墳丘をもつ墳墓群であったのに対し、台地上に盛土をもって2m前後の墳丘を築いている点から、出現期の古墳として位置づけられよう。



第3図 成山3号墳出土土器一例(1/8)

中丹地域では、成山古墳群、やや遅れて福知山市の宝蔵山4号墳、さらに稲葉山8・9号墳が発掘調査によって明らかになった前期の古墳であるが、畿内的な古墳ではなく、いずれも弥生時代以来の台状墓の伝統を継ぐ副葬品の乏しい小型の方墳である点がこの地域の前期古墳の特色である。ほかに、墳形不明で、組合式箱式石棺に銅鏃や小型勾玉が副葬された味方町の紫水ヶ丘古墳(同44)、立地や形態・規模からこの時期と思われる久田山C支群の3基の方墳(同43)がある。

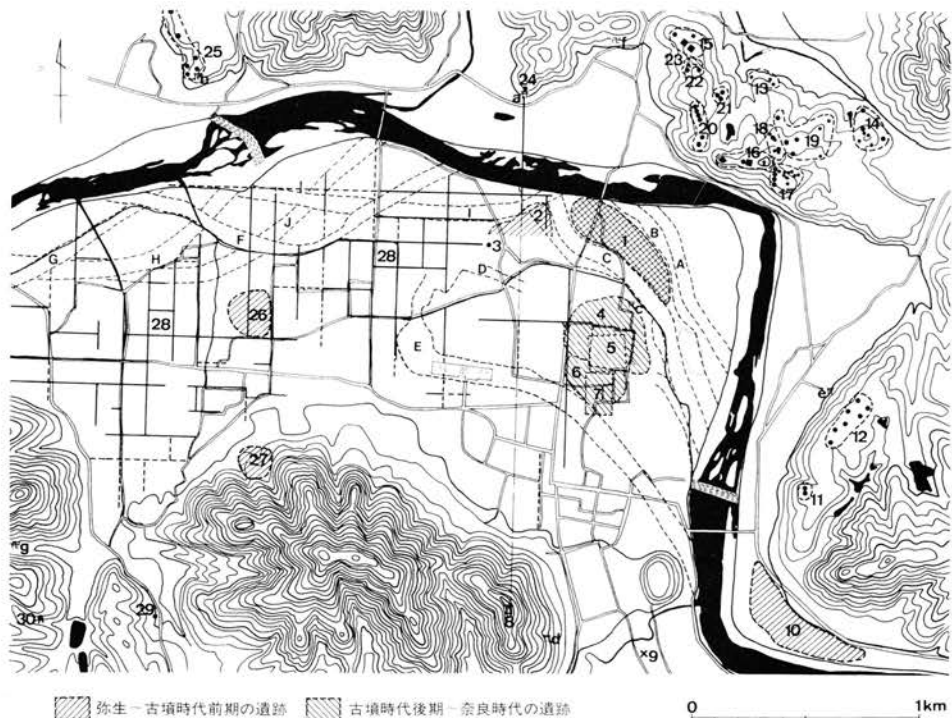
古墳時代中期は、伝統的な方形墳墓の転換期であり、前半と後半に分けられる。中期に入ると突然のように、段築・周濠・埴輪を具備した大型の方墳が出現する。多田町の菖蒲塚(一辺32.3m・高5m強)と聖塚(一辺54.2m・高7m)の両古墳がそれで、平地に2基が堂々たる風格で並ぶ様は、いかにも中期古墳という実感を伴っている。明治24年に聖塚の一部が発掘され、主体部は粘土槲らしく、副葬品として漢式鏡(平縁三神三獣鏡か)1面、碧玉勾玉1個、玻璃玉30余個、直刀・剣等残欠数十片、武器・武具類があったことが報告されている。最近の両墳の周濠部分の調査では、両墳とも南側に造り出しを有することが明らかになり、出土した埴輪の検討では、両墳の前後関係は決定できないが、ともに中期前半(埴輪Ⅲ期)の古墳であることが確認された。比較的踏査の行き届いている中丹地域においても、この二大方墳に匹敵する程の大型の古墳は、この時期には見当たらず、これら両墳の被葬者達は2代にわたって、何鹿郡はおろか、天田郡、さらには加佐郡にも勢力を拡げていたのかも知れない。

中期中頃から後半になると、由良川中流域は東西で対照的な展開を見せる。西の天田郡では、福知山市の八ヶ谷古墳(一辺20~23m)、中坂1・2・3・9号墳、そして前代の聖塚古墳にほぼ匹敵する妙見1号墳(一辺43m)等、埴輪や碧玉製品を持ちながらも方墳の伝

統(つまり何鹿郡の中期前半の様相)を固守しているのに対し、東の何鹿郡では初めて前方後円墳が導入されている。犀川下流域の殿山1号墳(全長47m)、沢3号墳(全長46m)、上流域の<sup>くきやま</sup>岫山古墳(全長47.4m)、八田川上流域の茶臼山古墳(全長54m)等が挙げられる。いずれも全長50m前後の前方後円墳で、多少とも自然丘陵を利用している。墳丘の占有面積は900~1,400m<sup>2</sup>で、平地に立地して3,000m<sup>2</sup>を占める前代の聖塚古墳には、はるかに及ばない。聖塚古墳は、古墳時代全期を通じて中・南丹最大の体積を測る。<sup>(注6)</sup>

古墳時代後期初頭は、ほぼ前代に似た様相であるが、まもなく横穴式石室の導入や後期群集墳の成立など他地域と同様の発展が見られる。第2図には後期の前方後円墳のみを示したが、中丹地域は府下でも有数の古墳密集地域であり、その多くはこの時期の群集墳と考えられている。ここでは、9支群百数十基を数えた丹波最大級の以久田野古墳群を挙げるにとどめるが、この古墳群のほとんどは昭和30年代に農地となり、今残るのは30基足らずである。

古墳時代後期の集落遺跡例はあまりないが、飛鳥時代と呼ばれる頃青野周辺では新時代



第4図 旧綾部町周辺遺跡分布図

1. 青野遺跡, 2. 青野西遺跡, 3. 青野大塚古墳, 4. 青野南遺跡, 5. 青野南遺跡官衙跡, 6. 綾中遺跡, 7. 綾中廃寺, 8. 藤山経塚, 9. 寺町遺跡, 10. 味方遺跡, 11. 平古墳群, 12. 斎神社裏山古墳群, 13~22. 久田山古墳群A~J支群, 23. 久田山遺跡, 24. 里古墳, 25. 宮越古墳群, 26. 岡町遺跡, 27. 明智平遺跡, 28. 綾部条里制跡, 29. 宮の堂古墳, 30. 東光院窯跡, a. 御手槻神社, b. 氏政神社, c. 二宮神社, d. 若宮神社, e. 斎神社, f. 仏南寺, g. 東光院, A~J. 旧河道跡

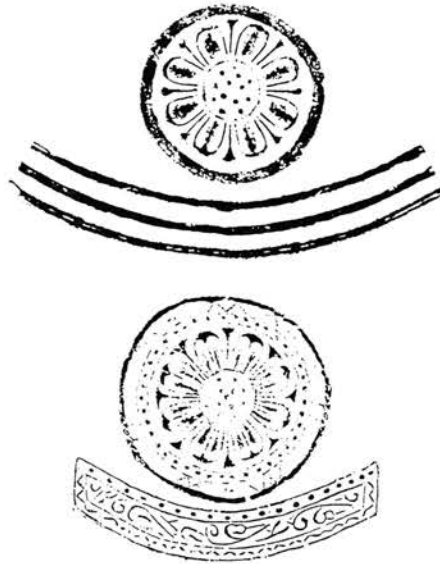
への胎動が始まる。5世紀中頃以来、この地域では遺物すらほとんど出土を見なかったのであるが、6世紀末に至ってまず青野遺跡に堅穴式住居が再び出現し、7世紀に入ると青野南(第4図4)・綾中遺跡(同6)に拡がり、「7世紀住居跡群」を形成し、この地域が一大集落に成長するのである。久田山遺跡(同23)例を加えて、7世紀の堅穴式住居跡は現在62棟が検出されている。そして7世紀前半には、青野南遺跡で最初の大型掘立柱建物が建てられ、以後4期にわたる建て替えが行われており、ここに一豪族の存在を窺うことが出来る。

白鳳時代(7世紀中頃～8世紀初頭)には、青野南遺跡の第2期から第4期の掘立柱建物群が建てられ、その周辺には堅穴式住居跡群が拡がっている。第3期(7世紀後半)には、素弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦(第5図上)を創建瓦とする白鳳寺院が建立される。これが、先に想定した豪族の氏寺と目される綾中廢寺(第4図7)である。続く第4期(7世紀末～8世紀初)には、青野南遺跡中枢部は再整備され、前代を上まわる大規模な掘立柱建物群・柵列が建て直されている。第4期の建物群は、何鹿郡衙跡とも推定されており、官衙と寺院が建ち並ぶ古代綾部の中心地がここにあったと言えよう。

ところが、奈良時代になると、今のところ大型建物は確認されていない。青野南遺跡の北西部の一画で多数の中・小型の柱穴群が検出されているに過ぎない。一方、綾中廢寺では、奈良時代に修理ないし増築が行われたことが、廢寺跡周辺から数多く出土する藤原官式系軒丸瓦と特殊忍冬唐草文軒平瓦の組合せ(第5図下)によって知られる。

平安時代以降は、奈良時代と同様に顕著な遺構が少なく青野・綾中の大集落の様相には不明な点が多い。綾部市内で調査が行われた中世以降の遺跡としては、藤山経塚(第4図8)、白磁碗が出土した青野南遺跡の土塚墓(12世紀)、鉄磬が出土した淵垣町の木寺北遺跡(13世紀)、中世城郭の一典型を明らかにした上林城(16世紀)がある。

青野周辺の古社寺としては、式内社御手槻神社(第4図a)、貞観5(863)年に真言院とされた仏南寺(同f)等がある。



第5図 綾中廢寺の軒瓦(縮尺1/6)

## 第2節 調査の方法とその経過

### 1. 調査地の区画

調査地は、青野町小字上フケ12・13・14・18・22・23・29・30・31・32番地にまたがる2,800m<sup>2</sup>であるが、旧河道にあたる東端部を排土用地に充て、また北辺に沿って幅約10mの工事用道路が敷かれたので、全面発掘を実施したのは、30～32番地を中心とする約1,800m<sup>2</sup>である。

発掘調査にあたって使用した地区割は、昭和52年度以来綾部市教育委員会が青野町・綾中町における発掘調査で用いられているものを踏襲した。この地区割の基準点は、青野町二宮神社内の任意の点(55A00)であり、この点を通る磁北線を区画方位とするものである。これを基準に、2桁の数字を付した方100mの大グリッドに区画し、各大グリッドは更に方4mの小グリッド625区画に分けられている。各大グリッドを区画する経線をAとし、4m毎に西へアルファベットを、そして緯線を00とし4m毎に南へ2桁の数字を付し、この交点及びその北西側に位置するグリッドを表わしている。基準点55A00の国土座標上の位置は、 $X = -77,235.768$ ・ $Y = -66,968.316$ であり、調査区画方位は国土座標軸に対して $N6^{\circ}0'28''W$ の方向を有する<sup>(注7)</sup>。以下の報告では、特に断らない限り、調査基準線の方位を「北」とした。

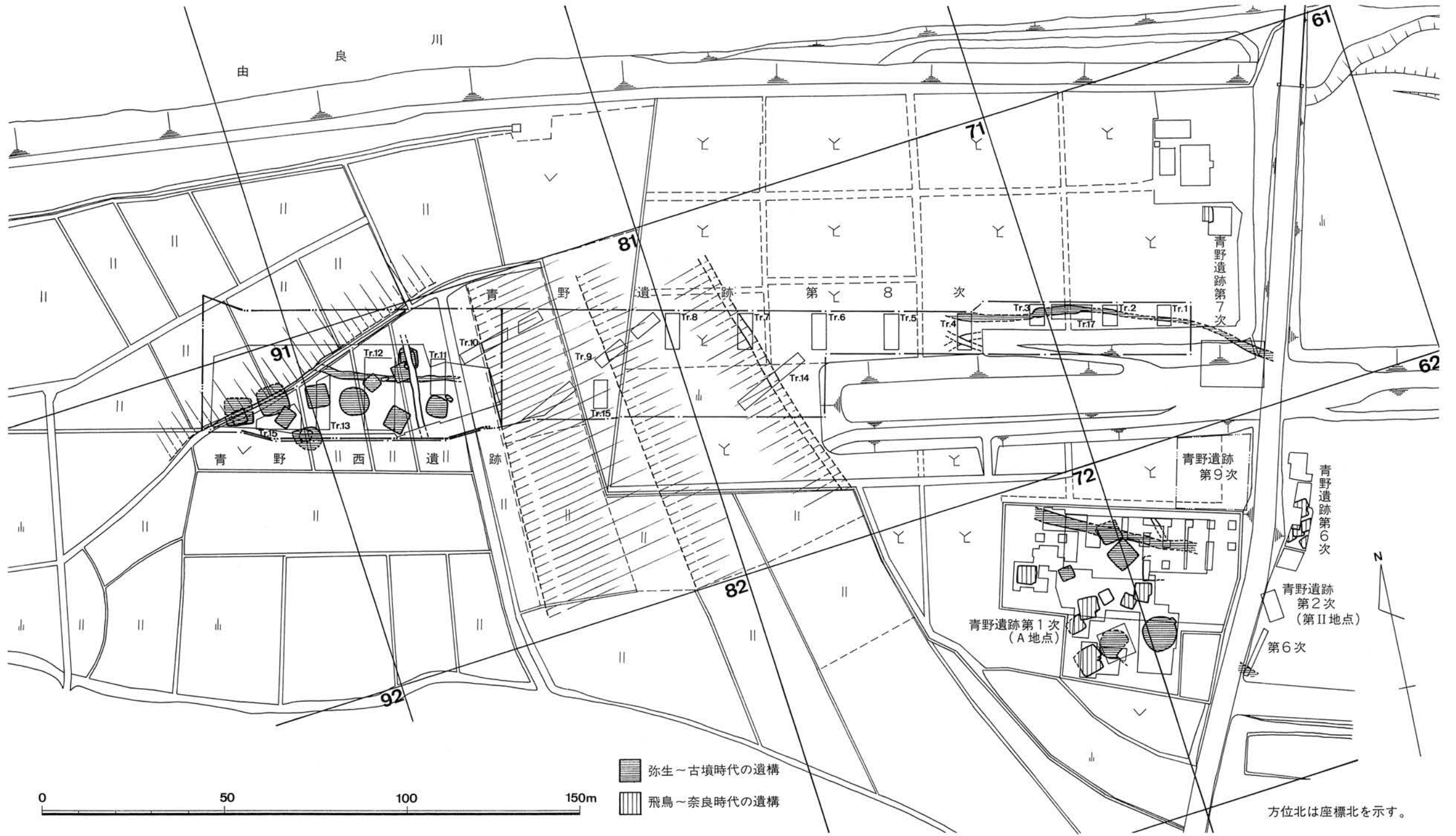
### 2. 遺構の呼称

この遺跡の調査は2年度にまたがるものである。各遺構は分類記号(SB：住居・建物、SD：溝、SK：土塚)の後に検出された年次の西暦下2桁の数字とその年次での通し番号を付した構成になっているが、これも綾部市教育委員会の例にならったものであり、出土遺物にもこれを記している。しかしながら、ほとんどの遺構は今年度に完掘したことであり、SB 8203とSB 8303とSD 8303があるというような煩雑さを避けるために、現地説明会資料以後、各種研究会資料・略報・概報等には、本遺跡の遺構を通し番号にして、「1号住居跡」・「土塚2」という表現にしており、本報告書でもこの呼称に従うことにした。1号から11号住居までは、西から順に、12号～15号住居及び溝・土塚は検出した順序である。なお、正式名称も必要に応じ括弧に入れて並記する。

### 3. 調査の主な方針

(1) 前年度の試掘結果から、水田耕土の直下が遺構検出面であり、一段低い北西部(小字上フケ22・23・29番地)以外は、土層観察用ベルトを残さない。

(2) 遺構の検出にあたっては、従来青野遺跡の調査報告で注意が喚起されていた地山と遺構埋土の不分明さに留意し、特に切り合い関係、遺構埋土中の遺構(ピット・小土塚な



第6図 調査地周辺平面図

ど)の存在に充分注意する。

(3) 各遺構については、方位に関係なく遺構の軸に合わせ、2本のL字を組み合わせた縦横のベルトを設け、断面実測後速かに撤去する。

(4) 遺構の掘り下げは、断面観察に従って土層毎に行い、遺物の出土層位に充分注意する。住居跡床面等の遺物は、記録(撮影・実測)した後に取り上げる。

(5) 遺構の平面図は、1m方眼の割り付けを行い、1/10の縮尺で遺物の細部まで実測する。断面実測図は1/20で作成する。

#### 4. 調査の経過

前年度の試掘調査時の経験から、今回の調査にあたっては、草刈りの後、調査地の周囲に幅20cm程度の排水溝を掘って、調査地の南の水田からの水や降雨による遺構面の冠水に備えた。調査地の大部分については、水田あるいは畑の耕土を15~20cm下げれば遺構面に達することが判っていたので、人力によってこの耕土を除去した。その後、再び調査区画の杭に従い、セオドライトで全面に4m毎に杭を打ち、遺構面の精査と遺構の検出作業を行った。遺構面は、水田の床土であり、相当の酸化が認められ、厚さ1cm前後の橙褐色の層を成しており、遺構を肉眼で確認するためには、これを削平する必要があった。住居跡を検出した面はどこでもこのような層序であり、耕土以外の包含層はない。遺構面は、暗黄褐色を呈し、豹の毛皮のように茶褐色が混じる砂質土で、非常に整面(ガリかけ)し易い。遺構の埋土は、ほとんどの場合、紫がかかった茶褐色を呈し、地山よりやや粘性を持つ砂質土である。こうして、前年度に検出していた5棟の竪穴式住居跡を再確認するとともに、新たに住居跡6棟・土壇6基・溝3条を検出し、現地説明会(8月10日)には11棟の住居跡を報告したのであったが、その後、2か所において4棟の住居跡を検出した。このうち1か所は地山全体が暗色化しており、土器片は出土するが遺構の輪郭が見えない状態であったが、思い切って5cmばかり下げて見て、ようやく3棟が切り合っているのを検出できた(13~15号住居)。もう1か所は、調査地東端の旧河道近く、地山もやや粗い砂質土であったが、埋土もほとんど同質の住居跡である。事実、輪郭線を引いた段階ではまだ遺構であるという確信はなかったが、床面に炉跡を検出し、ようやく住居を確認したような次第であった(12号住居)。

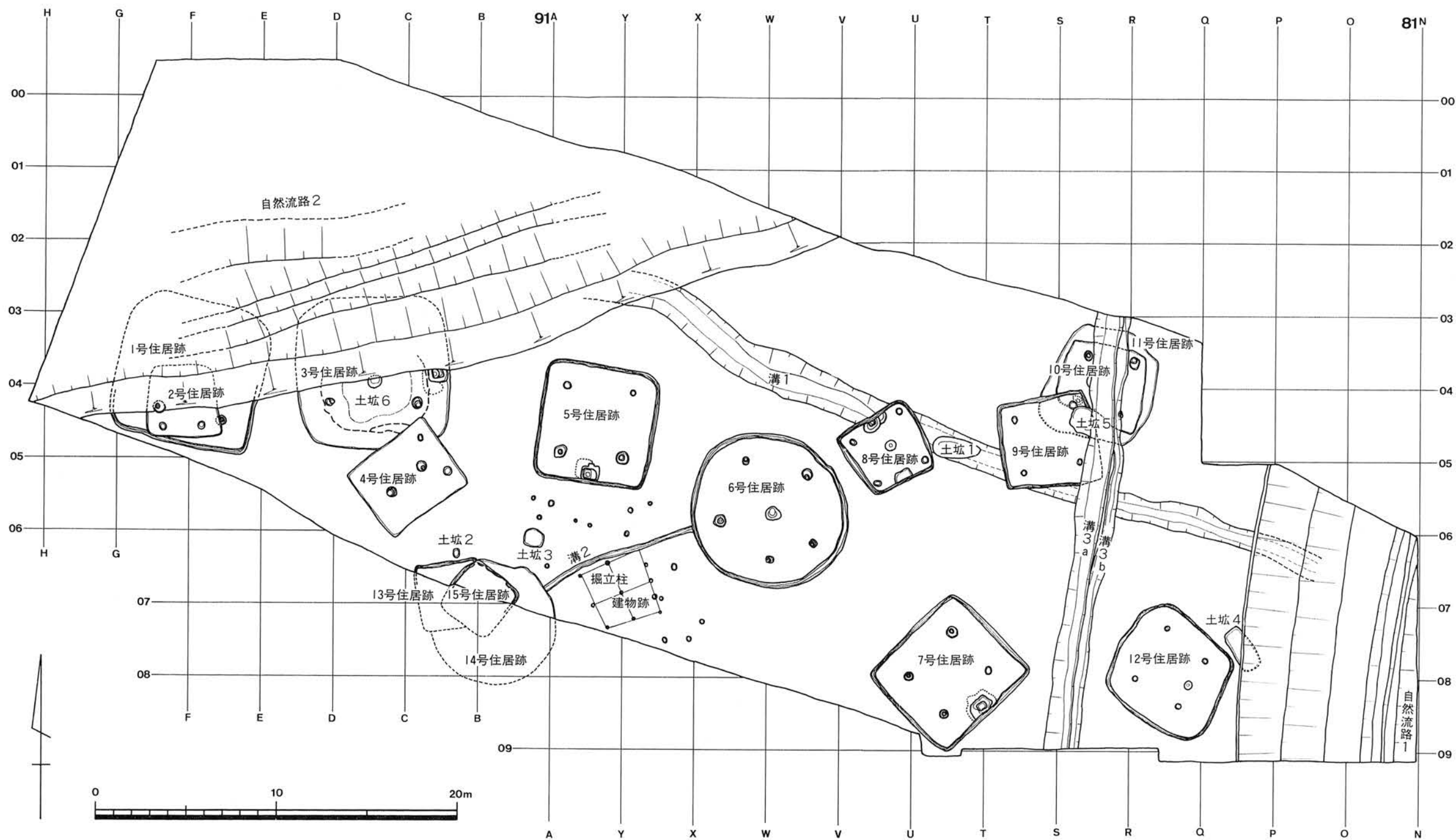
竪穴式住居跡の遺構は、その多くがかなり残りがよく、20cm以上の深さをもつものも少なくない。全形を確認した住居跡が6棟、溝や土壇で一部あるいは大半が切られたものが3棟、旧河道によって半分以上消滅したものが3棟、残る3棟は調査範囲外へ広がっており、一部を調査したにとどまった。中・近世以降の遺構ないし攪乱はごく少なく、図版第2の航空写真に見られるように、かなりすっきりした遺構の保存状態である。

調査地の東端部は、前年度に検出した旧河道1 (NR8201)であり、遠浅の様相を呈している。

調査地の北西部を東北東から西南西へ流れる水路を境にして、北西部は低湿地であった。この部分については、水田耕作土が数層を成しており、途中から重機を導入して掘削を行った。トレンチを数本入れて土層の観察を行ったところ、旧河道であると判断された。

調査終了後、遺構は人力によって丁寧に埋め戻され、青野西遺跡は堤防の下に保存されている。





第7図 青野西遺跡遺構配置図



## 第2章 遺 構

### 第1節 竪穴式住居跡

#### 1. 1号住居跡〔SB 8301〕(第8図・図版第4, 1)

平面形と規模 南辺・東辺の一部と隅2か所のみ検出され、大半は自然流路2によって削り取られている。東西7.6mを測る隅丸方形の竪穴式住居跡である。

壁 壁は残存高(周溝に連続していても床面までの高さの謂)28cmで、傾斜角は80°を測る。

周溝 上端幅12cm・深さ10~20cmで、四周を巡っていたものと考えられる。

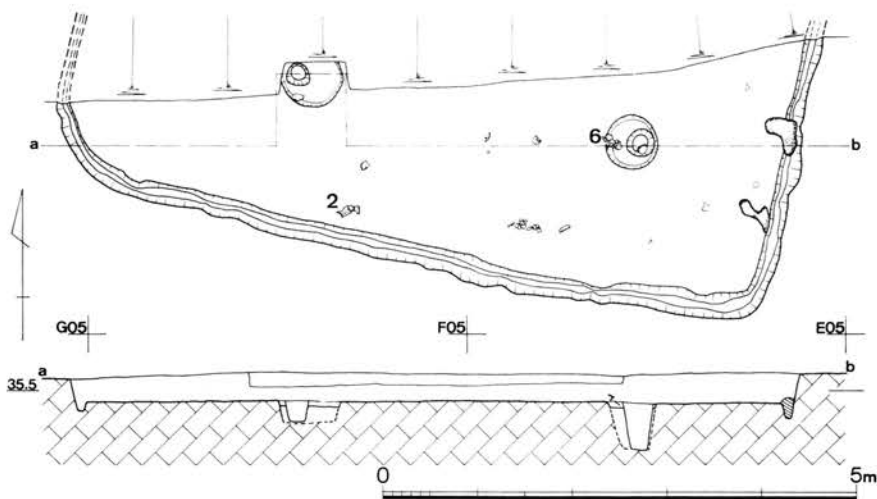
床面 ほぼ水平(L=35.4m)。踏み締められた様子は特に認められない。床面の遺物として、壺(2)と甕(6)がある。また、東壁際床面で周溝にかかって粘土塊が2か所で検出された。

柱穴 南辺に平行して2か所で認められ、各々柱穴とその掘形が検出された。両者の間隔は3.7mを測る。

炉 床面の大半が失われており、不明。

埋土 この住居跡の埋土を掘り込んで作られた2号住居跡の埋土層を別にすれば、埋土の分層は出来ない。埋土下位から壺(1)・甕(5)、上位から3・7・8が出土している(第28図)。

切り合い関係 2号住居よりも古い。



第8図 1号住居跡実測図

2. 2号住居跡〔SB 8302〕(第9

図・図版第4, 2)

平面形と規模 北半部を自然流路2によって削り取られている。東西4.2mの小型の方形竪穴式住居跡である。

壁 残存高8~15cm, 傾斜角は約85°を測る。

周溝 認められなかった。

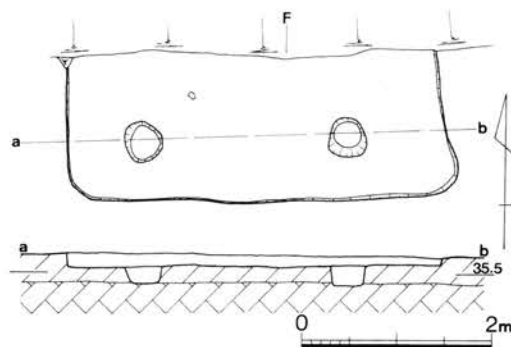
床面 ほぼ水平(L=35.6m)。この住居は1号住居跡の埋土を切り込んで営まれている。床面は、やや締まった感じが認められた。床面遺物として精製の高杯片(11)がある。

柱穴 南辺に沿って2か所で検出された。大きさから見て柱の掘形であり、柱穴自体は識別し得なかった。両者の心々距離は2.2mを測る。

炉 残存していた床面には認められなかった。

埋土 分層は不可能である。甕(10)のほかに少量の土器片が出土している。

切り合い関係 1号住居跡よりも新しい。



第9図 2号住居跡実測図

3. 3号住居跡〔SB 8202〕(第10図・図版第5, 1)

平面形と規模 北半部を自然流路2によって削り取られている。東西8.4mを測る大型の隅丸方形竪穴式住居跡である。

壁 残存高34cm, 傾斜角は約75°を測る。

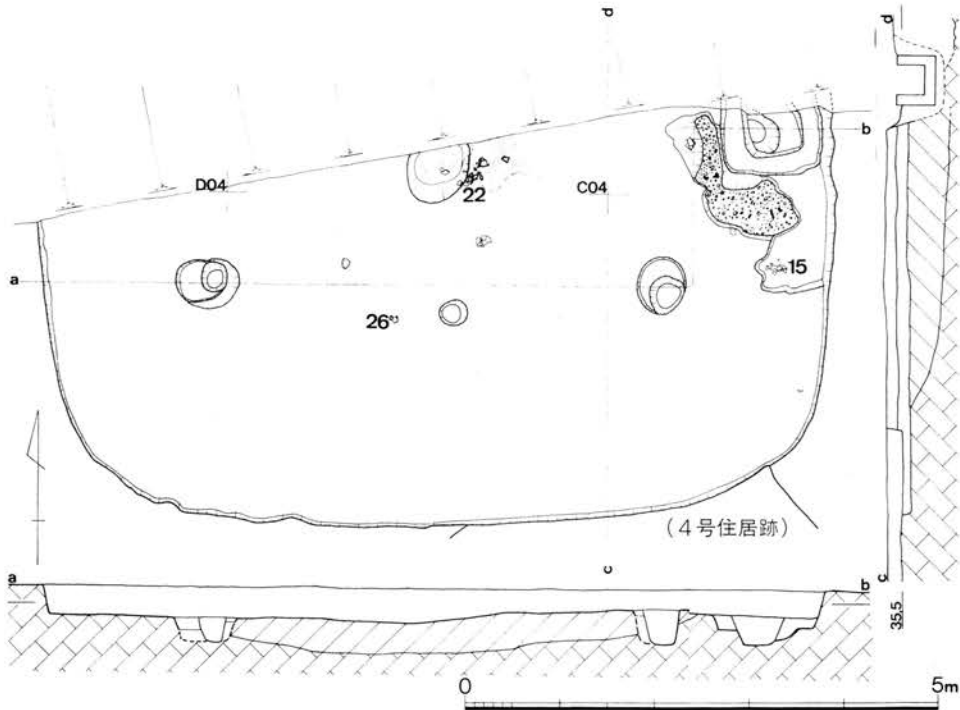
周溝 認められなかった。

床面 ほぼ水平(L=35.4m)である。床面遺物として甕(14・15・22), 鉢(26)が出土している。床面の下層に土壇6がある。

柱穴 南辺に沿って2か所で主柱穴とその掘形が検出された。両者のほぼ中間、やや南辺寄りにも小ピットがある。主柱穴間の距離は4.8mを測る。

炉 床面のほぼ中央と思しい位置に径約70cm・深さ15cmの皿状に掘り凹めた炉跡がある。中に若干の焼土が認められ、その東に炭と灰が散乱していた。

特殊ピット 東辺のほぼ中央と推定される位置に、壁に接して方形の3段に掘り込まれたピットを検出した。北半部が失われているが、最上段は東西110cm, 中段は東西64cmの方形であり、最下段はやや西寄りに径35cmの円形を呈する。最下段のピット底までの高さは、床面から32cmを測る。北側に関しては失われているが、ピットの周囲の西側と南側の床面には礫敷きが見られる。砂礫は径1cm前後の小さいもので、若干の炭も混じ



第10図 3号住居跡実測図

っている(5号・7号・8号各住居跡参照——20～25頁)。

埋土 2層に分層出来た。下層から壺(13)・甕(17～21)・器台(28)が出土した。

切り合い関係 床面下層の土壇6よりも新しく、東南部で重なる4号住居跡より古い。

#### 4. 4号住居跡〔SB 8203〕(第11図・図版第5, 2)

平面形と規模 東西5.3m・南北4.4mを測るやや長方形の竪穴式住居跡である。

壁 残存高は12cmであるが、東南の高床部では9cmを測る。傾斜角は75°を測る。

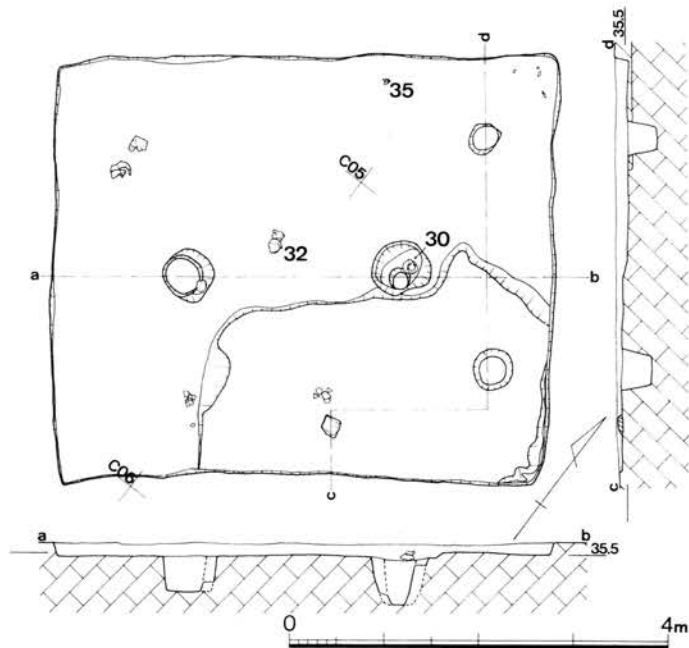
周溝 認められなかった。

床面 ほぼ水平であるが、東南部に南北1.9m・東西3.5mの高床部があり、L=35.53mを測る。ほかの部分ではL=35.47mである。床面遺物として壺(32)・鉢(35)等がある。高床部に上面の平たい18×19cmの石が検出された(9号住居跡参照)。

柱穴 東西の軸線上の2か所で大きな柱穴を検出した。東側のピットでは掘形と柱穴が検出され、掘形部分から壺(30)と高杯(40)が出土した。また東辺に平行して2か所にやや小さ目のピットがある。ところが、これらに対応すると思われた西半部のその位置には、精査したがピットを検出することが出来なかった。大ピット間の距離は2.3mを測り、小ピット間は2.4mを測る。

炉 検出されなかつた。

埋土 分層できない。埋土下位から小型丸底土器(36)が出土している。前年度の試掘調査の際、整面中に出土し、取り上げた高杯(39)と小型丸底土器(37)は、ほとんど床面に接していたと思われる。ほかに埋土中から出土した遺物として、



第11図 4号住居跡実測図

・高杯(38・41・42)・器台(43)がある。

この住居跡の埋土に関して、特にその南半部分において、地山との識別が非常に困難であったことを付記しておく。

切り合い関係 北で重複する3号住居跡よりも新しい。

### 5. 5号住居跡〔SB 8204〕(第12図・図版第6)

平面形と規模 東西6.5m・南北6.5mを測る整美な隅丸方形竪穴式住居跡である。

壁 残存高26cmを測る。傾斜角は約83°である。

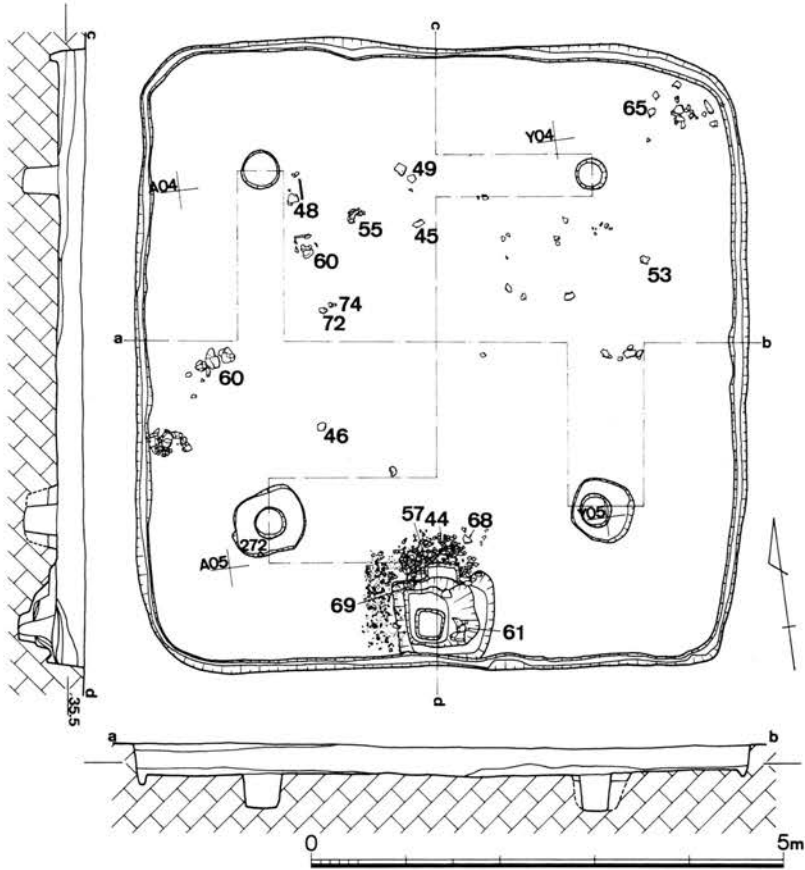
周溝 平均して上面幅8.0cm・底幅6.0cm・深さ5.6cmを測る逆台形の断面を呈し、四周を巡っている。

床面 ほぼ平坦である(L=35.4m)。床面の遺物は、比較的北部と西部に多く、壺(44~49)・甕(53・55・57・60・63)・高杯(68)・器台(74)及び石斧(271)等が挙げられる。

柱穴 4か所で検出した。南の2個は、柱穴とその掘形を検出したが、北の2個については柱穴しか認められなかった。柱間心々距離は4辺いずれも3.5mを測る。東南柱穴の掘形から扁平片刃石斧(272)が出土した。

炉 炉跡は認められなかった。

特殊ピット 南辺中央の壁際に方形の3段に掘られたピットを検出した。最上段は東西110cm・南北80cm、中段は東西70cm・南北60cm、最下段は東西32cm・南北32cmを測り、



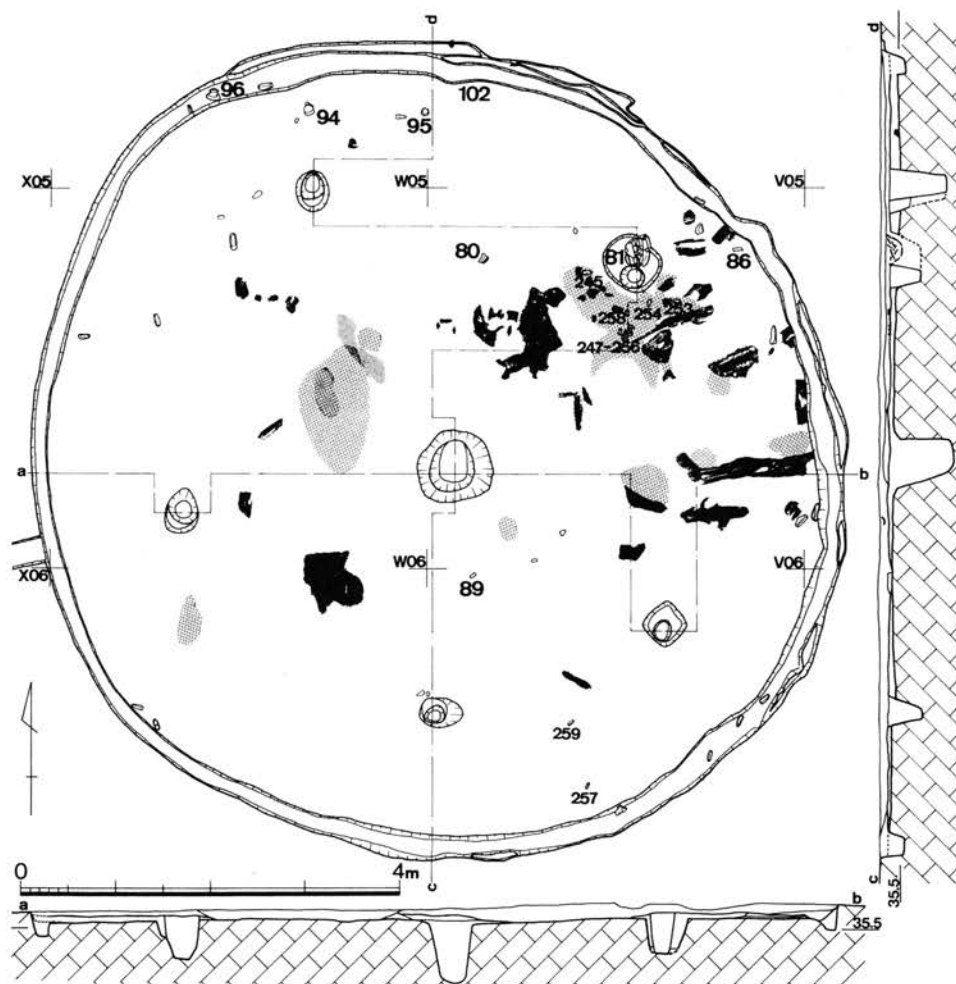
第12図 5号住居跡実測図

床面から最底部までの深さは40cmである。最上段の北辺中央には東西34cm・南北16cmの小さなテラス状の部分がある。このピットの周辺の床面には西側と北側に砂礫敷きが認められるが、上述のテラス状部分は、これを欠いている。礫は北側の方が大粒のが多く、礫の小粒な西側とは対照的である。断面を見ると、2度ばかり掘り直されているが、埋まっているのが常態であったことが窺われる。

特殊ピット内の出土遺物として、ミニチュア・サイズの壺片(47)・甕(61)・高杯(69)が出土している。

埋土 壁近くでは2～3層に分層できるが、中央のかなり広い部分は一度に埋まったようである。下層出土遺物として、甕(51・56・58・59)・高杯(67・70)・器台(76・77)がある。

切り合い関係 なし。



第13図 6号住居跡実測図

6. 6号住居跡〔SB 8206〕(第13図・図版第7)

平面形と規模 円形の竪穴式住居跡で、直径は東西・南北とも8.6mを測るが、北西—南東方向では9.1mあり、真円ではない。

壁 残存高12cmを測り、傾斜角は70°~85°を測る。

周溝 平均上面幅22cm・底面幅16cm・深さ13cmを測り、全周を巡っている。

床面 ほぼ平坦である(L=35.6m)が、北に向かってやや傾斜している(比高差約12cm)。床面遺物として、甕(80・86・89)や器台(102)もあるが、鉢(94~96)と土錘(245~259)が目立つ。この住居跡の床面東部から中央部にかけて、木炭や焼土の散乱が見られ、焼失住居と思われる。木炭は板状のものがほとんどで、最大長1.2~1.3m・幅15~25cmを測るが厚さはほとんどなく数mm以下である。材質は、ほとんどがスギ材で、少量のカシ類が

(注8)  
混じる。

柱穴 5か所で検出した。柱間心々距離は、北辺から時計回りに3.5m・3.7m・2.6m・3.5m・3.7mを測り、五角形を呈する。北東に位置するやや大きいピットは60×56cmを測る掘形の南壁に柱を寄せて立て、掘形の北側には大型の甕(81)を埋めていた。甕は、垂直線に対し約70°横転しており、口縁部が床面に開口していたとは考えにくい。

炉 床面中央部やや北西に偏して床面が赤く焼けている部分がある。掘り込みは何ら認められないが、炉跡と考えられる。

特殊ピット 床面中央に上面直径80cm・底面4.5×5.5cm・深さ64cmの円形ピットがある。3号・5号・7号住居跡のように壁際にはないが、一応特殊ピットとして報告しておく(81頁以下参照)。出土遺物は器台(100)のみである。

埋土 一部を除き、2～3層に分層出来るが、いずれも薄い層である。最下層については、貼り床である可能性が高いが、この層と各ピットの掘形と柱穴との関係は、確認し得た限りにおいて、必ずしも明確ではない。

下層出土遺物に、甕(83・85・87・90)・鉢(97)・高杯(99)・器台(101)がある。

切り合い関係 なし。

## 7. 7号住居跡〔SB 8303〕(第14図・図版第8)

平面形と規模 整美な方形竪穴式住居跡である。かなり西に振っているが、特殊ピットを有する辺を南辺とすると、東西6.8m・南北6.3mを測る。

壁 残存高36cm、傾斜角は80°前後を測る。

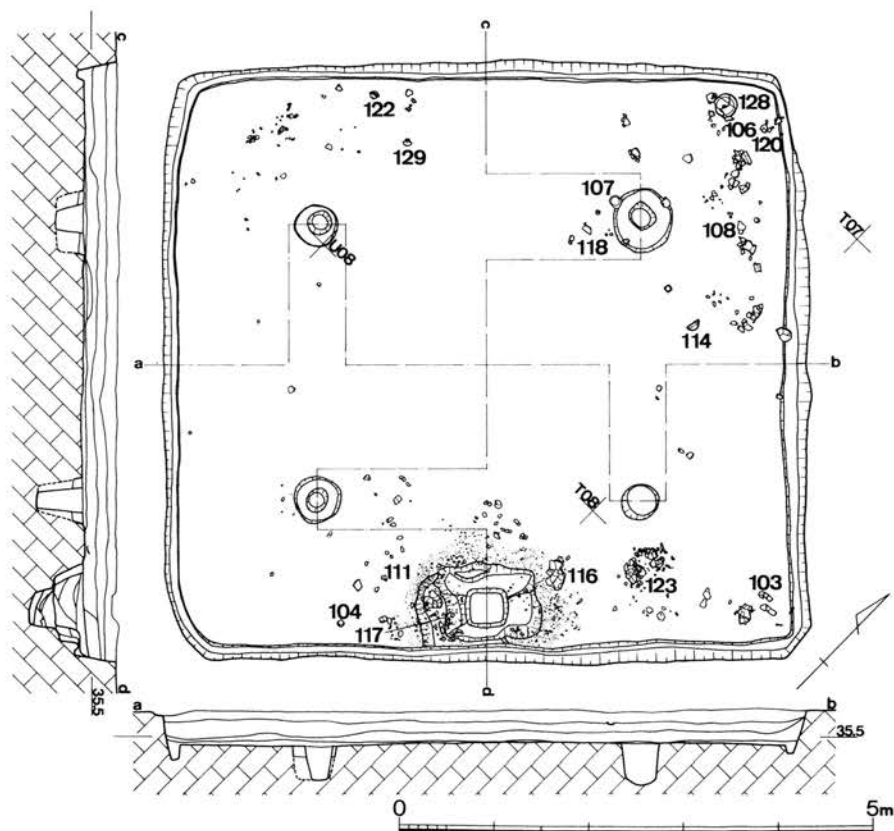
周溝 上面幅12cm・底面幅6cm・深さ10cmで四周を巡るが東辺はやや広がっている。

床面 平坦である(L=35.4m)。床面遺物のほとんどは、壁の4辺と4個の柱穴を結び4辺の間に散乱し、特に北辺から北東隅にかけてと、東南隅に集中する。壺(103・104・106～108)、甕(111・114・116～118)、鉢(119～123)、器台(127)、蓋(129)等が挙げられる。

柱穴 4か所で検出した。床面から35cm前後の深さをもつが、西南のものだけ50cm近くの深さがある。柱間心々距離は、北辺から時計回りに、3.4m・3.0m・3.4m・2.9mを測り、やや東西に長い長方形をなす。竪穴もこれと相似形である。北東ピット中から、小型器台(128)が出土した。

炉 炉跡は認められなかった。

特殊ピット 南辺中央の壁際の方形の2段に掘られたピットを検出した。上段は東西1.3m・南北0.8mを測り、西辺と北辺西にテラス部分があり、数片の土器(111)を検出した。下段は東西46cm・南北40cmの整美な隅丸方形の掘り込みである。ピット周辺の床面



第14図 7号住居跡実測図

には、約30cm幅の砂礫敷部分があるが、5号住居跡の砂礫よりもかなり粒が小さい。ピットの最上層から異形土器(130)が出土している。

埋土 3～4層を確認しているが、遺物は上・中・下の3層に分けて取り上げており、ほぼ層位と一致する。

切り合い関係 なし。

#### 8. 8号住居跡〔SB 8205〕(第15図・図版第9)

平面形と規模 東西4.4m・南北4.2mを測る小型の方形竪穴式住居跡である。

壁 残存高10cm弱を測り、傾斜角は70°～80°である。

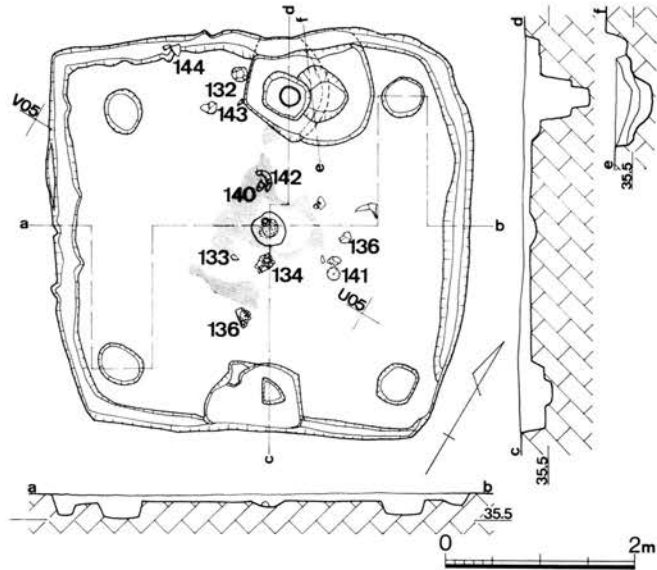
周溝 平均上面幅20cm・底面幅10cmで、四周を巡っているが、南東部分で1か所切れている。周溝の幅は他の住居に比して広い。

床面 ほぼ平坦である(L=35.7m)。壁際を除く床面、特に4柱で囲まれた部分は強く踏み締められている。床面の遺物は、中央部とその北に集中している。第33図131～144のほとんどの土器が床面上の遺物である。



柱穴 4か所で検出したが、かなり壁寄りに位置している。柱間心々距離は、北辺から時計回りに3.0m・3.0m・2.9m・2.7mを測る。

炉 床面中央に直径35cmの円形の皿状の窪みを呈する炉跡がある。焼土塊1個が窪みの中にあり、炭が周辺に広がっている。



第15図 8号住居跡実測図

特殊ピット 壁の北辺に重なって2個、南辺に1個、合計3個の大きなピットが掘られている。

南辺に接するP<sub>1</sub>は、東西100cm・南北64cmを測り、中央やや東に三角形の掘形の2段目のピットがある。北辺では、壁に接して2個の特殊ピットが切り合っており、上層をP<sub>2</sub>、下層をP<sub>3</sub>(第15図e-f)とする。P<sub>2</sub>は東西80cm・南北70cmを測り、中央に2段目の50×40cmのピットがあり、更に円形の3段目のピットがある。床面から底までの深さは70cmである。P<sub>3</sub>はP<sub>2</sub>に切られているが、南北120cmを測る。径60cmの2段目のピットがその中央に掘られている。床面から底まで40cmを測る。

埋土 残りが浅く、一層しか認められなかった。出土遺物は土器の小片のみである。

切り合い関係 溝1より新しい。

### 9. 9号住居跡 [SB 8304] (第16図・図版第10)

平面形と規模 東西5.3m・南北5.0mを測る方形竪穴式住居跡である。南東の一部が溝3と土塚5によって消滅している。

壁 残存高15cm前後を測り、傾斜角は約80°である。

周溝 平均上面幅12cm・底幅9cmで、南東部では確認できないが、四周を巡っていたと思われる。南辺周溝から、壺(146)と小型丸底土器(148)が出土した。

床面 ほぼ水平である(L=35.6m)。遺物は、南西部に比較的多く出土した。壺(145)と甕(147)が床面に接していた。南西隅のピット近くに厚さ8cmの平たい石が検出されている(4号住居跡参照)。

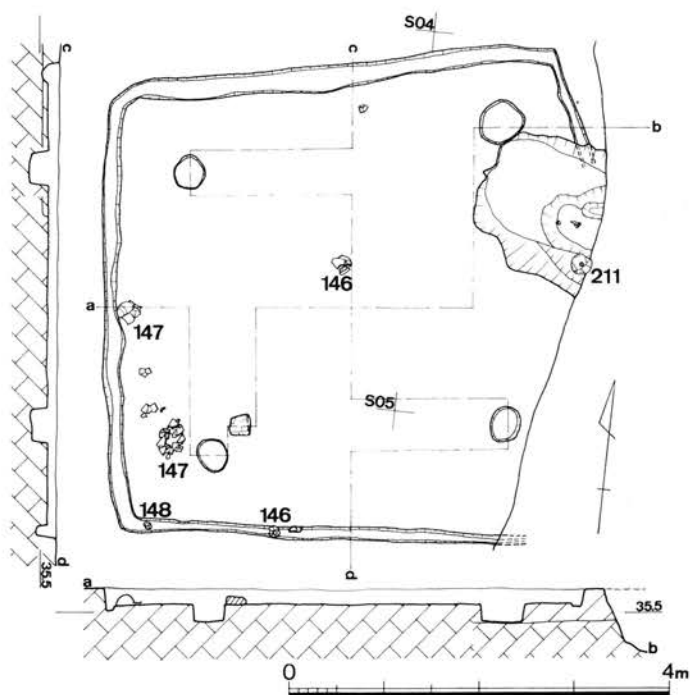
柱穴 4か所で確認した。柱間心々距離は北辺から時計回りに3.4m・3.2m・3.1m・

3.0mを測る。南東の  
ピットから鉢(149)、  
北西ピットから器台  
(150)が出土してい  
る。

炉 炉跡は認めら  
れなかった。

埋土 1層である。  
出土遺物は少量の土  
器細片である。

切り合い関係 ま  
ず東辺の一部が土坑  
5によって切られ、  
次に南東部が溝3  
によって消滅してい  
る。一方、この住居



第16図 9号住居跡・土坑5実測図

跡は10号及び11号住居跡を切って作られている。従って、11号住居>10号住居>9号住居  
>土坑5>溝3(古>新)の関係が得られる。

#### 10. 10号住居跡〔SB 8305〕(第17・18図・図版第10・11)

平面形と規模 東西4.9m・南北4.5mを測る方形の竪穴式住居跡である。西辺が短く、  
ややいびつな平面形を呈する。中央が南北の溝3によって消滅している。

壁と周溝 壁は残存高28cmを測り、傾斜角は約80°である。周溝はない。

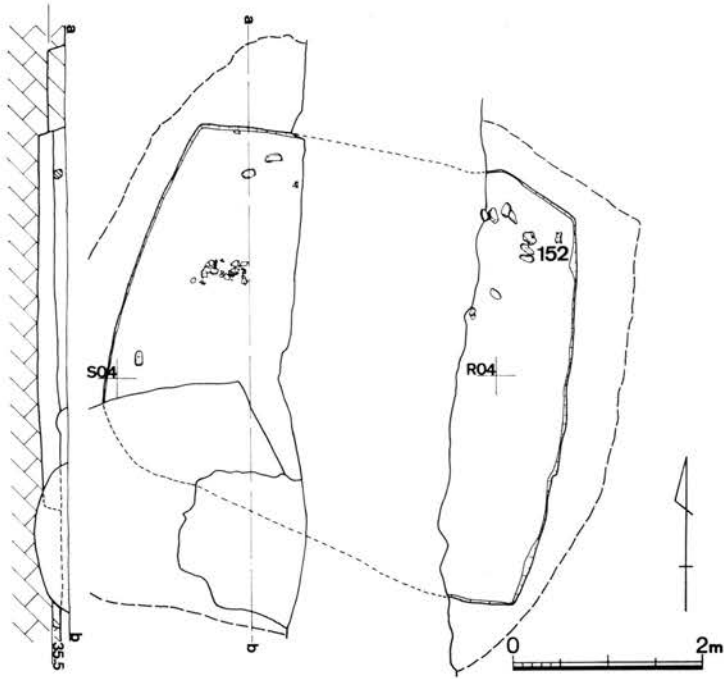
床面 ほぼ平坦である(L=35.4m)。床面遺物は、壺(151~153)、甕(163)、器台(175)  
等しかなく、少ない。

柱穴 4か所で確認している。柱間心々距離は北辺から時計回りに、2.5m・3.1m・2.4  
m・1.5mである。竪穴の平面形に似て、これも台形を呈する。

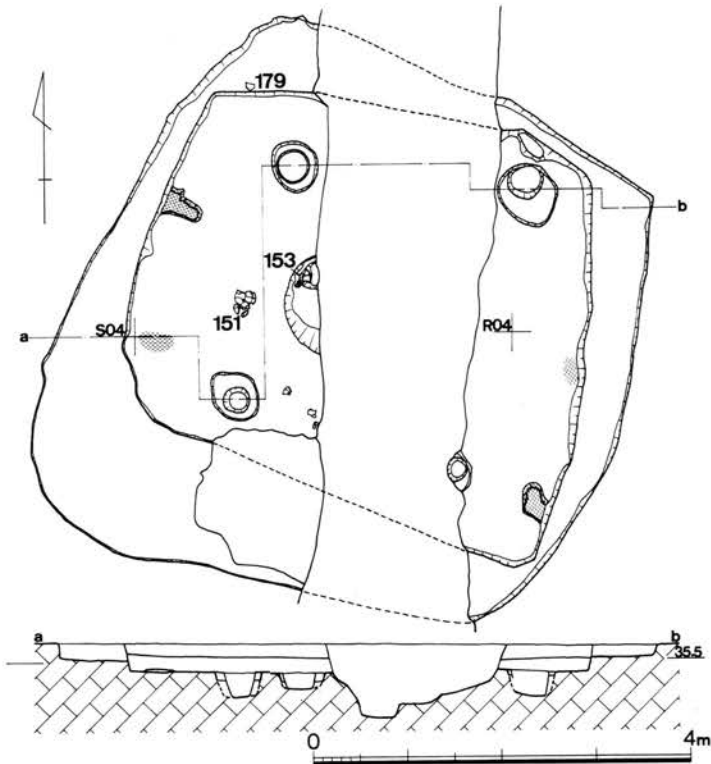
炉／竈 中央部が消滅しているので不明とするしかないが、西辺中央壁際に焼土塊があ  
り、造り付け竈の残欠と見られないこともない。しかし同様の焼土塊は南東隅近くにも見  
られ、性格不詳とせざるを得ない。

特殊ピット 床面中央に径約1m程度の大きな掘り込みがあったことが、溝3の肩部に  
残された部分から知られる。北側に石や土器片が見られるが焼土は認められない。

埋土 2層に分かれる。しかも下層上面は平坦であり、第17図に示したように、人為的



第17图 10号住居跡上層実測图



第18图 10号住居跡下層・11号住居跡実測图

と思われる配石があり、この面から甕(158・159・167)が出土している。2次的な床面かも知れない。この住居跡の遺物の多くは遺構検出面直下(上層)に集中していた。遺物観察表で上層出土としたのがこれらであり、中層出土としたものは、配石を載せた下層上面上の遺物である。

切り合い関係 11号住居跡の埋土を切って作られており、これより新しい。南西部が9号住居跡と土塚5に、そして中央が南北溝3によって切られている。

#### 11. 11号住居跡〔SB 8306〕(第18図・図版第10, 2)

平面形と規模 東西・南北とも6.0mを測る隅丸方形の竪穴式住居跡である。内部のほとんどの部分を、より深い10号住居跡を溝3によって切られ、消滅している。

壁 残存高15cm前後で、傾斜角は約85°を測る。

周溝 検出されなかった。

床面 ほぼ水平である(L=35.6m)。遺物は甕底部(179)が出土しただけである。

柱穴 すべて10号住居跡によって消滅したと考えられる。

炉 床面の大半が失われており、確認できない。

特殊ピット ほかの住居跡でのあり方から見て、壁際に設置されるタイプのものはあるべき位置にその痕跡がなく、存在しなかったと判断される。

埋土 分層できない。埋土中から、東部で壺片(178)、西部で高杯片(181)とミニチュア土器(180)が出土している。

切り合い関係 10号住居跡・土塚5・溝3のいずれよりも古い。

#### 12. 12号住居跡〔SB 8307〕(第19図・図版第12, 1)

平面形と規模 東西6.4m・南北6.1mを測る隅丸方形の竪穴式住居跡である。

壁 残存高約10cmと浅い。傾斜角は約80°である。

周溝 上面幅約12cm・底幅約8cmで四周を巡る。

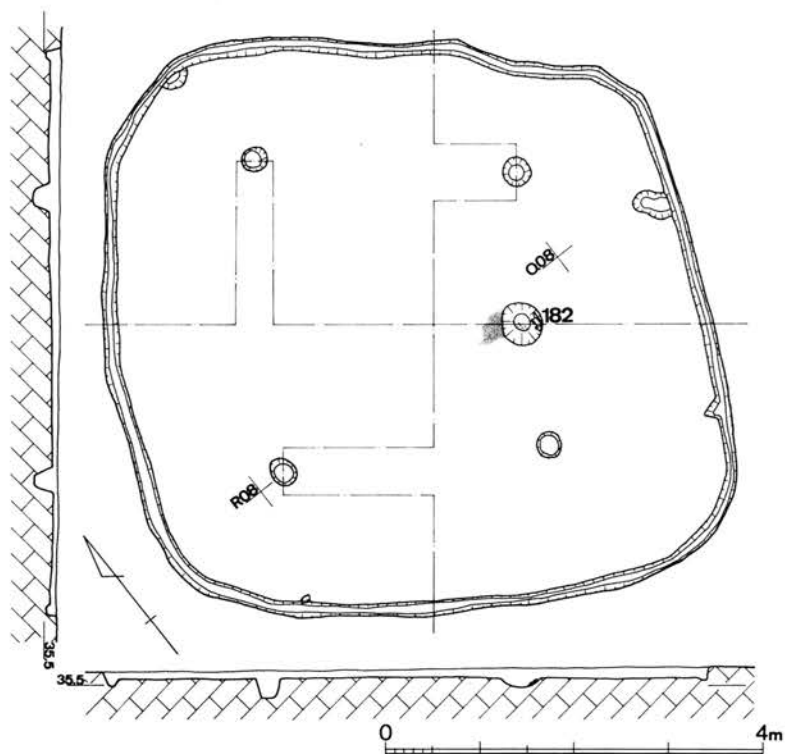
床面 炉跡周辺を除いて、踏み固めは認められない。長頸壺破片(182)が出土した。

柱穴 4か所で確認した。柱間心々距離は北辺から時計回りに2.8m・2.9m・2.8m・3.3mを測る。平面形に似て東辺がやや長い。

炉 床面中央から東に偏し、東辺柱穴を結ぶ線上で、上面径44cm・底径18cmのえぐり込みを検出した。内部と周辺に炭が若干検出された。中から長頸壺片(182)が出土した。これは床面で出土した破片と接合した。

埋土 地山とほとんど識別できない埋土である(溝1に酷似する)。分層は出来なかった。北東隅近くの埋土中位で、ガラス小玉(276)が出土した。

切り合い関係 なし



第19図 12号住居跡実測図

## 13. 13号住居跡〔SB 8308〕(第20図・図版第12, 2)

平面形と規模 調査区域外及びほかの遺構による消滅部分が多く、不明な点が多いが、一辺3.5m程度の小型の竪穴式住居跡らしい。

壁 残存高は約26cm、傾斜角は80°を測る。

周溝 上面幅10cm・底面幅約6cmで、四周を巡ると思われる。甕(183)が出土した。

床面 ほぼ水平である(L=35.4m)。床面上の遺物は、検出し得た部分にはない。

柱穴と炉 ともに検出していない。

埋土 分層できない。甕(184)・蓋(185)が出土した。

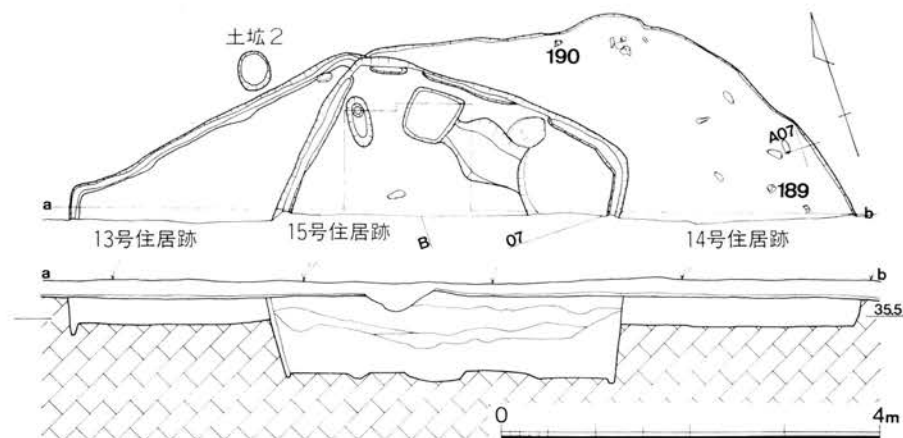
切り合い関係 15号住居より古いが、14号との関係は不明。

## 14. 14号住居跡〔SB 8309〕(第20図・図版第12, 2)

平面形と規模 円形、あるいは多角形と考えられる竪穴式住居跡であるが、大半が調査範囲外に拡がり、規模等詳細は不明である。

壁と周溝 壁の残存高は28cmで、傾斜角は約75°である。周溝はない。

床面 水平である(L=35.5m)。礫が散乱し、遺物として鉢(189・190)が出土した。



第20図 13号・14号・15号住居跡実測図

柱穴と炉 ともに検出していない。

埋土 分層できない。周辺の地山と識別し難い土質である。

#### 15. 15号住居跡〔SB 8310〕(第20図・図版第12, 2)

平面形と規模 北半のみの検出であるが、一辺約3.5m程度の小型の竪穴式住居跡である。

壁 残存高は約80cmで、本遺跡では最も深い。傾斜角は西で75°、東で85°を測る。西壁の断面を見ると、壁に沿って厚さ3cmの砂質土があり、壁板が朽ちた跡に砂が入り込んだ様子が窺われる。

周溝 上面幅約10cm・底幅6cmで四周を巡っていたらしいが、3か所で断絶がある。

床面 ほぼ水平(L=34.9m)であるが、いくつかの掘り込みがあり、複雑な様相を呈する。北東隅には径約1mの浅い土塚があり、北壁際には一辺50cm前後のこれも浅い(8~10cm)土塚があり、両者を幅30~50cmの溝で連結しているように見える。東側の土塚の傍らには30×40×15cm程の大きな礫(河原石)が検出された。また北西隅近くにも浅い掘り込みがある。

柱穴と炉 ともに検出していない。

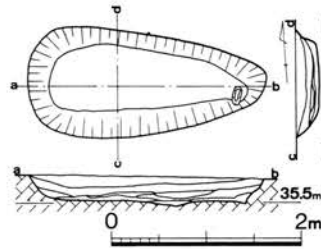
埋土 大きく上・中・下層に分かれる。実測し得た土器を数えると、上層3点・中層11点・下層4点で、中層からの遺物が多い。

付記 この住居跡は、竪穴の深さや床面の様相、それに規模の小さい点など、本遺跡ではかなり異質的である。住居というよりも何か特殊な目的を持った竪穴であったのかも知れない。

## 第2節 土壇・溝・掘立柱建物跡

## 1. 土壇1〔SK8201〕(第21図・図版第9, 2)

81T04グリッドで検出した楕円形の土壇である。東西(軸方向)2.52m・南北最大幅1.16m・深さ0.31mを測る。北西部から中世の土師器皿の破片(302)が出土している。溝1の埋土を切って作られている。



第21図 土壇1 実測図

## 2. 土壇2〔SK8301〕(図版第12, 2)

13号住居跡の北辺の北で検出したピット状の小土壇である。径約30cm・深さ15cmを測る。中から手焙り形土器(210)が1個体出土した。器体上部を欠いているが、正置しており、元は完形で埋納(?)されていたと思われる。

## 3. 土壇3〔SK8302〕(図版第12, 2)

91A06グリッドで検出した隅丸方形の小土壇である。一辺約1m・深さ0.16mを測る。遺物は土器細片以外にないが、焼土・炭・灰が認められ、明らかにここで火を使用した痕跡がある。いずれのとは確認できないが、例えばすぐ北の5号住居跡のように炉跡を持たない住居に伴う煮炊きの設備とも考えられる。

## 4. 土壇4〔SK8303〕(図版第12, 1)

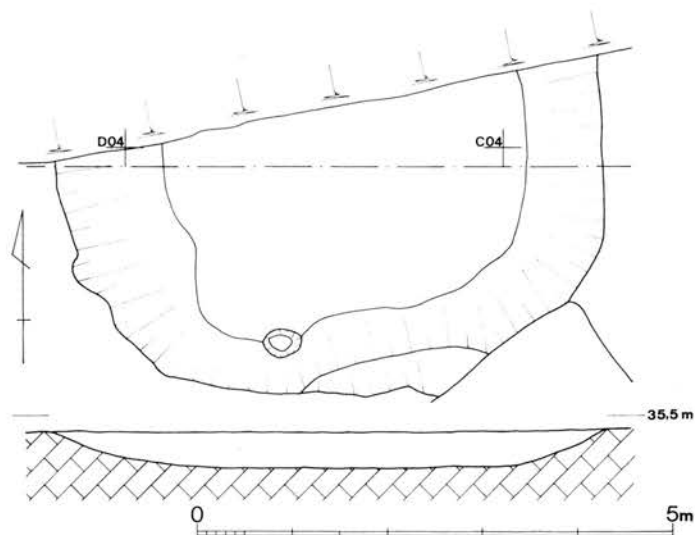
12号住居跡の東で検出した長楕円形の土壇で、長軸2.2m・幅1.2m・深さ約10cmを測る。埋土の様子は、12号住居に似て地山との識別が困難であった。若干の土器細片(弥生土器か)が出土したが、図示出来るものはない。

## 5. 土壇5〔SK8304〕(第16図・図版第10)

9号住居跡の埋土を掘り込んだ土器である。西部は、溝3によって消滅している。幅は1.5mを測る。長軸の残存長は1.4mを測る。土壇底やや南から出土した高杯杯部(211)以外の出土遺物は、土器小片のみで図示できない。

## 6. 土壇6〔SX8301〕(第22図)

3号住居跡の床面下層の大土壇である。東西5.8mを測る。北半部が現在の水路と自然流路2によって消滅しているが、皿状の土壇と思われる。残存南北長は約3mである。3号住居跡の床面が検出面であり、炉もこの土壇の埋土を切って掘られているので、住居跡に伴う遺構ではなく、これに先行するものと考えた。しかし、規模・方位等、3号住居跡のちょうど真ん中に位置しているので、この住居と何らかの関連があった可能性も否定し切れない。埋土の重なりは識別できず、単一層である。中位・下位から夥しい土器片(第9・10図)が出土した。壺・甕・高杯・器台・蓋等があるが、何故か鉢が見当たらない。



第22図 土坑6 実測図

7. 溝1〔SD8204〕

調査地の中央やや北を東西に走るU字溝である。幅1m・深さ50～70cmを測る。最下層に灰白色の泥土が検出され、流水の痕跡が認められた。遺物の出土は、弥生(?)土器の細片1点しか見られなかったが、切り合うすべての遺構よりも古い。埋土の様相は、12号住居跡のそれと酷似し、同時期に埋まったものかも知れない。自然流路1との関係については、この流路の西岸が後世の耕作によって明確にし得ないので、不明とせざるを得ない。

8. 溝2〔SD8301〕

6号住居跡から南西へ走る細い溝である。幅25cm前後・深さ6cm前後を測る。6号住居の周溝と連結していたと考えられ、ここから8.7m行って14号住居跡に突き当たる。しかし、後者の住居との関係は、土層が明確でなく、不明である。

9. 溝3〔SD8302〕(第23図・図版第13)

調査地東部の81R・Sライン間を南北ほぼ直線に走る溝で、調査基準グリッドに対してN7°Eの傾きを示す。一度掘り直しが行われており、下層の溝3aは推定幅160cm・深さ88cmを測る。後に掘り直された溝3bは、やや東にずれているが、幅80cm・深さ64cmを測る。両者ともに最下層に流水の痕跡が認められる。長さは検出し得た限りで、24mを測る。溝底の絶対高を、北から①03ライン・②06ライン・③07ライン・④09ラインで示すと、層下の溝3aは①34.80m・②34.88m・③34.92m・④34.94mとなり、南へ行く程レベルが高くなっている。一方、上層の溝3bは、①35.14m・②35.06m・③35.10m・④35.10mとなり、南へ行く程レベルが逆に低くなっている。出土遺物には、須恵器(284～290)・土

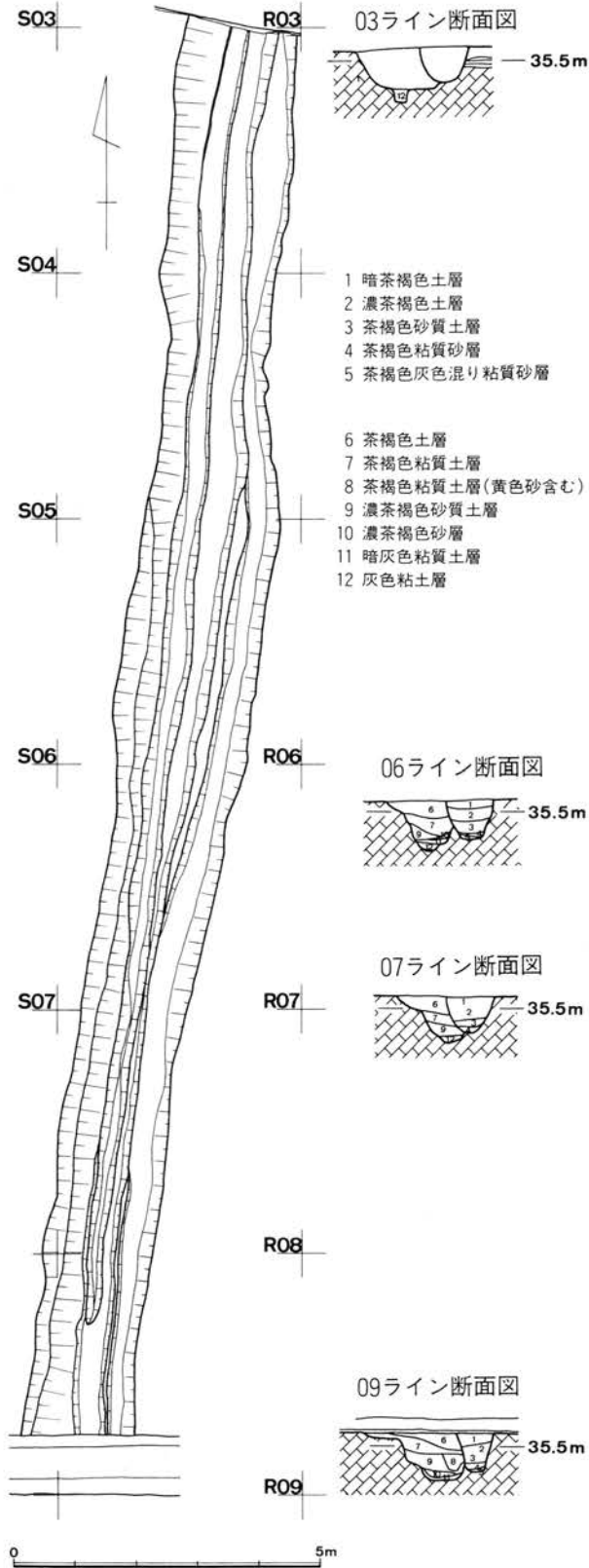


師器 (291~299)・黒色土器 (301)・緑釉土器 (300)があるほかに、若干の古式土師器片が混入している。なお、この溝は、切り合い関係から見ても、出土遺物から見ても、青野西遺跡の最も新しい遺構である。

10. 掘立柱建物跡 [SB

8311]

今回の調査地において、ピット群を検出したのは、5号住居跡の南一帯に限られた。ピットは合計24個を数えるが、建物として復原できるのは1棟だけである(第7図)。建物は、2間×2間で、南北3.4m・東西3.5mを測る。伴う遺物がなく、時期は決定できないが、高床式の倉庫と考えられる。



第23図 溝3 実測図

### 第3節 自然の流路

#### 1. 自然流路1〔NR8201〕(第24図, 図版第14, Cf. 図版第1)

今回の調査に先立つ試掘調査(青野遺跡第8次調査)で検出し, 断面観察を主とする調査を行ったが, 今回の調査区域の東端でこの流路の西岸を部分的に確認した。

この自然流路の東岸(上記試掘調査の7トレンチ)の地山(第24図31層)のレベルは, 35.7~35.8mで, 西岸(青野西遺跡)のそれは, 35.7±0.5mで, 両者相等しい(ここで「地山」と言うのは, 弥生~古墳時代の遺構が切り込まれた第V層である)。2~3層の水田耕土(第I層)の下には, 流路の両岸では地山があるが, 流路部分では最大厚さ50cmの濁黄褐色のシルト層が広がっている(第II層)。この層の下面から, 瓦器や土師器が出土し, 中世以降に埋まった層と考えられる。第III a層は灰褐色のシルト層で, 最大厚さ80cmを測る。西岸では, 青野西遺跡の地山が遠浅状に30数m続いているので, 東岸側の同レベルの第III b層黄灰褐色粘質土・第III c層黄褐色粘土を加えても, 幅は約35mと第2層の半分になる。第IV層は, 特に東側に堆積する青灰色粘土層で, 時折間に同色の砂礫層を含む。第III層と第IV層の下に拡がるのが, 流路の最下層と考えられる砂礫層で, 礫は拳大から径50cmを超える大きなものをも相当数含んでいる(第VIII層)。河床高度は海拔約33.5mである。この砂礫層の上面から2か所(第24図×印)で10数点の須恵器・土師器が出土した。実測可能なものは第41図277~283に示したが, 7世紀から9世紀までの遺物に限られている。

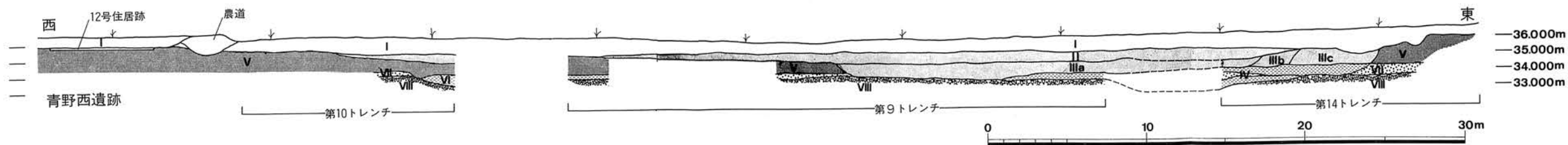
自然流路1の規模は, 埋土の第2層の幅とした場合に約70mで, 一段深くなった部分では35mの幅を有する。最深部の深さは, 現地表面から3.3m, 東西兩岸の地山面から2.8mを測る。この流路の延長は, 上流方向で第4図旧河道Cと一致しており, 由良川旧河道のひとつとしてよいであろう。

#### 2. 自然流路2〔NR8301〕(第25図)

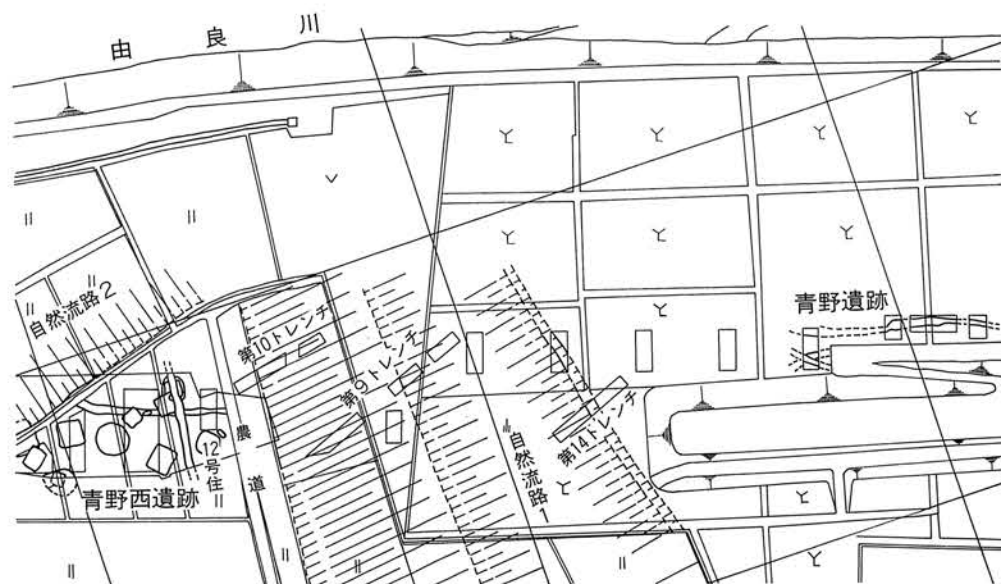
調査地の北西部を東北東から西南西へ流れる水路を境にして, 北西部は地表面も約50cm程低い低湿地であった。厚さ約1mの3層からなる水田耕土の下には, 自然流路1と似たシルト層や粘土の堆積が見られ, 北岸が調査範囲外にあるので, 確認は出来ないが, 調査し得た分に限っても幅10数m以上, 地表から砂礫層(L=32.8m)まで約3mあり, これも由良川旧河道のひとつと見てよいようであり, 第4図の旧河道Iに相当するものと推定しておく。

#### 3. 青野西遺跡の「地山」下層(第24・25図)

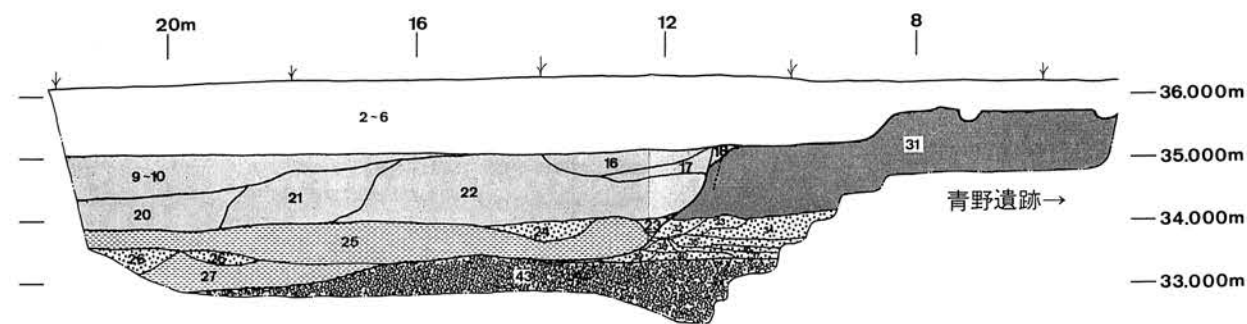
第24図1の自然流路断面実測図において, とともに第V層としたのが, 青野西遺跡及び青



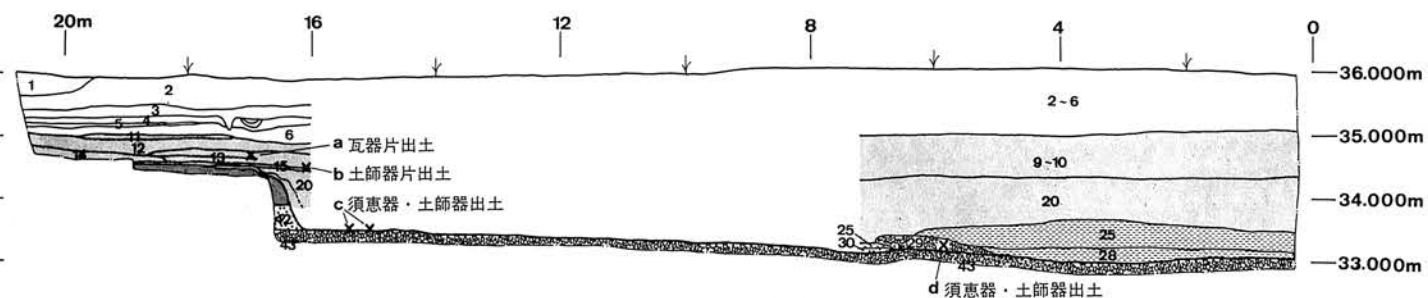
1. 自然流路1断面模式図



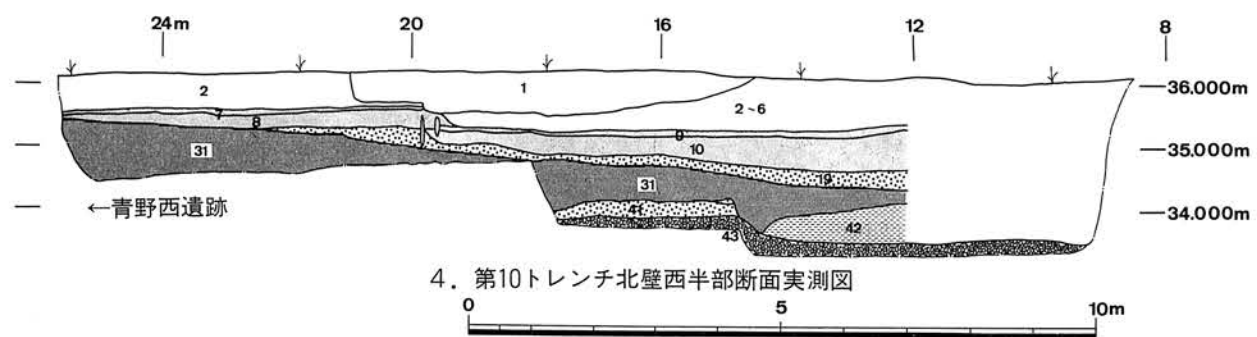
5. 自然流路1関係トレンチ配置図



2. 第14トレンチ北壁西半部断面実測図

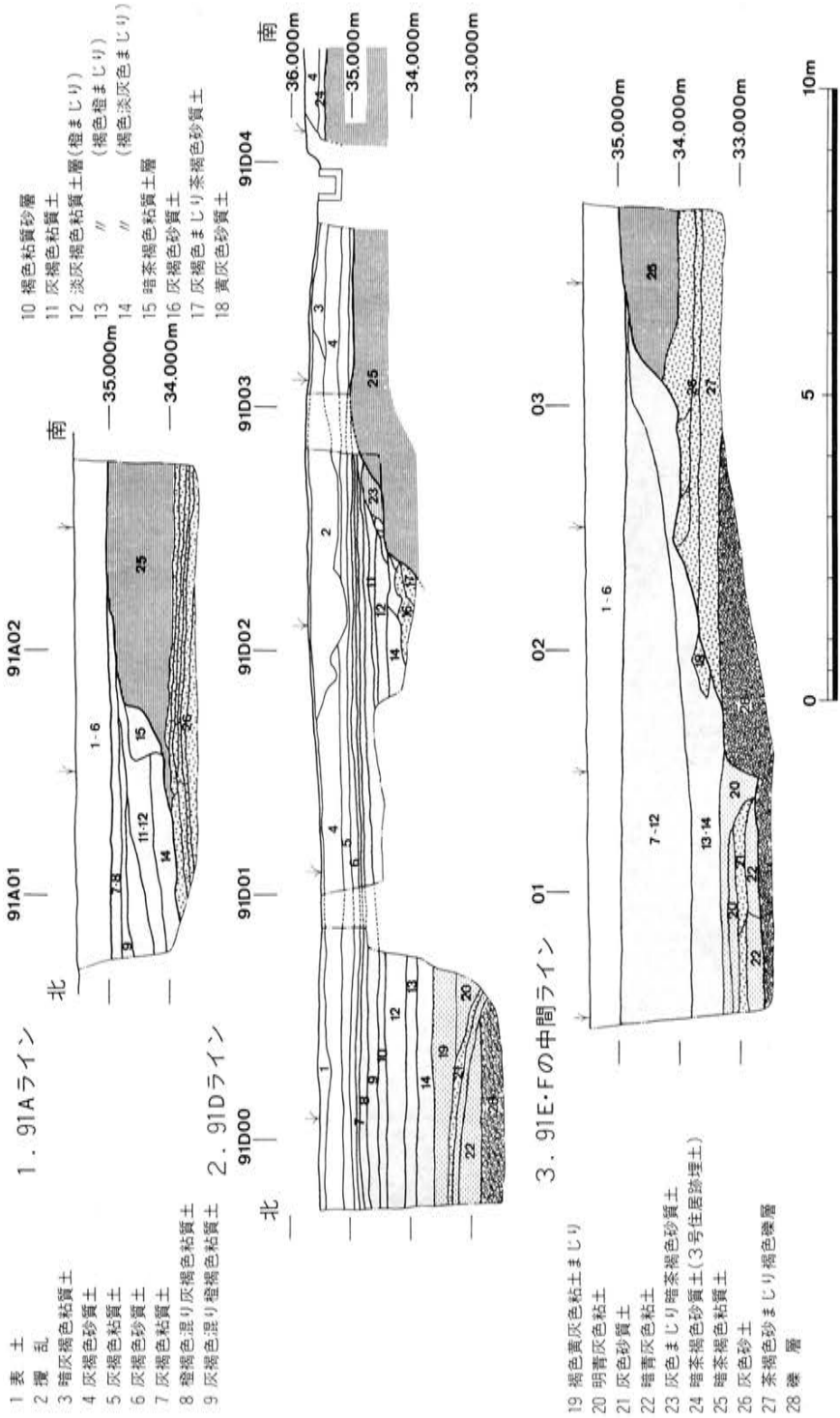


3. 第9トレンチ北壁東半部断面実測図



4. 第10トレンチ北壁西半部断面実測図

- |                 |               |                 |
|-----------------|---------------|-----------------|
| 1 置き土(道路)       | 16 灰色混り黄褐色粘質土 | 31 黄褐色土         |
| 2 灰色粘質土         | 17 灰色混り黄褐色粘土  | 32 灰色混り褐色砂土(細い) |
| 3 黄褐色粘質土        | 18 茶混り黄褐色粘土   | 33 褐色砂土         |
| 4 灰色粘質土         | 19 明茶褐色砂質土    | 34 褐色粘性砂質土      |
| 5 黄色粘土          | 20 濁灰褐色粘性砂質土  | 35 濁茶褐色砂土       |
| 6 灰色粘質土(マンガン含む) | 21 灰色混り灰褐色粘質土 | 36 青灰色混り濁茶褐色砂土  |
| 7 黄色土(床土)       | 22 黄褐色粘質土     | 37 橙褐色砂土        |
| 8 灰褐色粘質土        | 23 灰色混り茶褐色砂土  | 38 青褐色砂土        |
| 9 床土            | 24 黄褐色砂層      | 39 褐色砂土         |
| 10 茶褐色粘質土       | 25 青灰色粘土      | 40 青褐色砂土        |
| 11 暗灰色粘土        | 26 青灰色砂礫土     | 41 黄褐色砂土        |
| 12 灰色粘質土        | 27 淡青灰色粘土     | 42 灰色粘土         |
| 13 明灰色粘質土       | 28 青灰色粘土(礫混り) | 43 黄褐色礫層        |
| 14 灰色粘質土        | 29 黄褐色砂礫層     |                 |
| 15 橙褐色砂質土       | 30 黄褐色砂層      |                 |



第25図 自然流路2 断面実測図

野遺跡の「地山」とされる層である。今回の自然流路1・2の断面観察の際、この「地山」の下層の状態も窺うことが出来たのでここで報告する。

地山は、暗黄褐色ないし茶褐色を呈する砂質土であり、青野西遺跡では海拔35.6mから34.0m前後までの厚さ1.6m前後の層をなしている。その下層には、砂層(第VII層)が40~70cm堆積しているが数層に細分できる。そしてその下層に広がるのが拳大から径50cmを超える大礫を含む砂礫層(第VIII層)である。この砂礫層は、地山の下層の場合はその上面高度はいずれも33.36~33.40mであり、青野遺跡第7次調査地においても、このレベルで砂礫層に出会っている。しかし、この砂礫層が旧河道底(河床)となっている場合は、河流によって削られ、自然流路1においては、最深部で32.8m、自然流路2においては32.6mまで下がっている。これより下層については、砂礫層を最大1mの厚さ(L=32.46m)まで確認したが、地下水の噴出や、壁面の剥落によって今回の調査体制では困難であり、中止した。

試掘第10トレンチの東から15m付近で砂礫層に約40cmの段差が見られた。この段差によって、砂礫層は皿状を呈し、直上には灰色粘土が堆積し、その上層を、青野西遺跡の地山層が覆っている。この皿状の地形は、流路によって形成された観があり、遺跡のベースとなるいわゆる地山層が堆積する以前にすでに存在した旧河道を示唆している。

## 第3章 遺物

### 第1節 弥生後期～古墳前期の遺物

#### 1. 青野西遺跡の出土遺物

今回の調査で出土した遺物の量は、整理箱40箱程度であるが、その9割以上が弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡群に関連する遺物である。遺物のほとんどは土器であり、ほかに土錘・石器・玉類が若干ある。本節ではこの遺跡の最盛期であるこの時期の遺物について報告し、南北溝や自然流路から出土した遺物は、第2節に譲る。

#### 2. 弥生土器と古式土師器の型式分類

出土した土器の観察報告の前に、型式分類を行うが、分類基準について若干述べておきたい。本遺跡から出土した壺・甕・鉢・高杯・器台等の各器種は、主に口縁部の形態によって分類した。完形品が、図面で復原したものを含まれずかに20数点——実測し得た土器250余点の1割弱——と少なく、また遺存状態が全体に悪く、成形や調整の痕跡をとどめない土器が多いのがその主たる理由である。

分類した型式にはアルファベットの大文字を与え、更に細分の必要がある際はアラビア数字を加えて、型式名とした。丹後系後期弥生土器に通ずる在地の型式にAやB、そして畿内の第5様式ないし庄内式系にD、布留式にFを充てたように、型式名に表意文字的な性格を持たせようとしたが、首尾一貫はしていない。多くは混入と思われる弥生後期前半の土器や、外来系ないし搬入品と思しき土器は、数も少ないので、H以下の名称を与えた。

以下、各型式の特徴に移る(第25・27図参照)。

##### (1) 壺形土器

壺A<sub>1</sub> 長頸壺。口縁端部に擬凹線を施す。口縁端部は外反する。体部は膨らんだ倒卵形を呈し、頸部への移行は曲線的である。1点のみ出土(151)。

壺A<sub>2</sub> 長頸壺。口縁端部に擬凹線を施さない。1点のみ出土(212)。

壺B<sub>1</sub> 短頸壺。口縁端部に擬凹線を施す。体部は長胴形と思われる(12・131)。

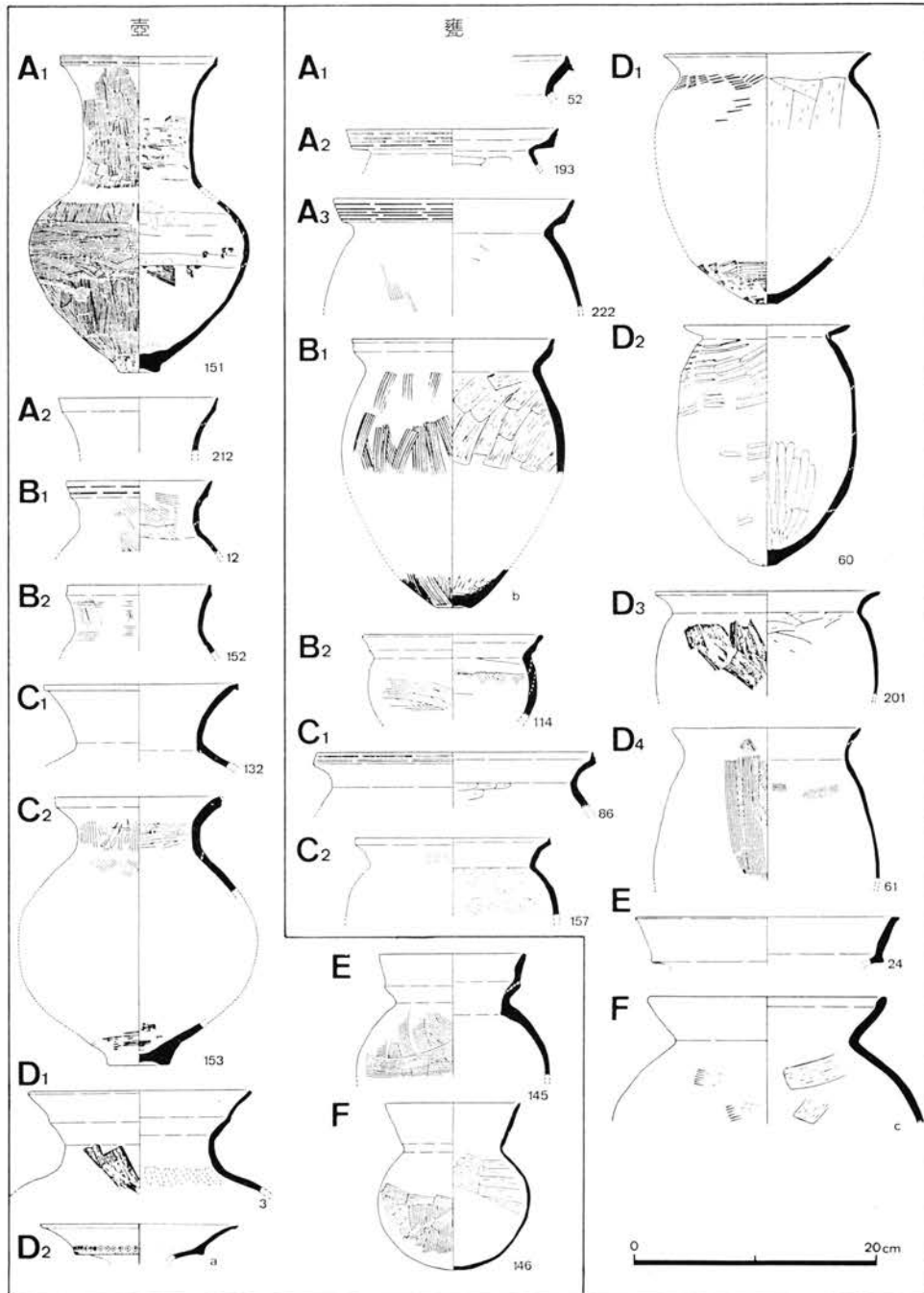
壺B<sub>2</sub> 短頸壺。口縁端部に擬凹線を施さない(152・213・214)。

壺C<sub>1</sub> 広口壺。湾曲して外反する口縁部を有する(103・132)。

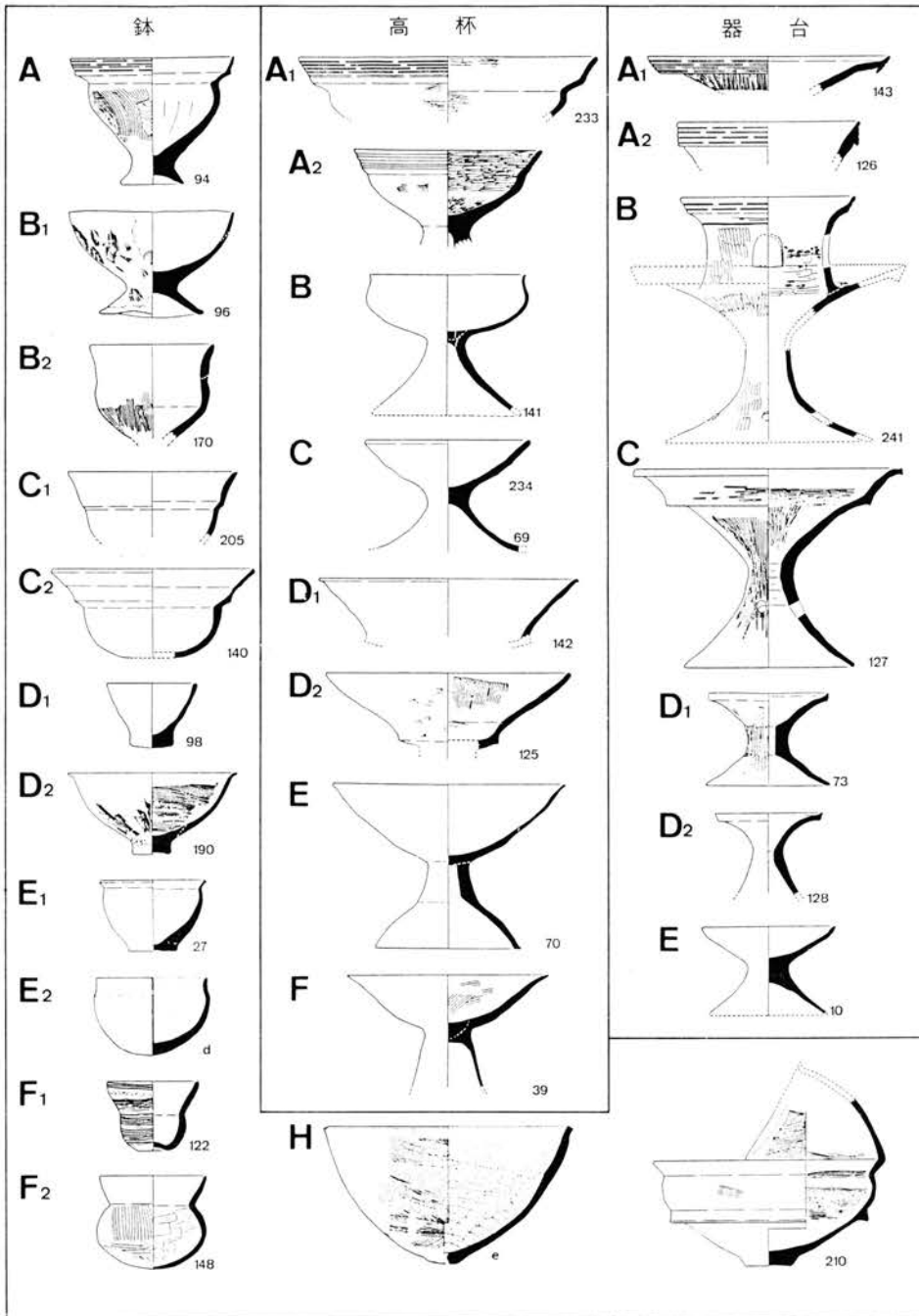
壺C<sub>2</sub> 広口壺。直立した後外反する口縁部を有する(44・45・153)。153の体部は球形と思われ、底部は突出した平底である。

壺D<sub>1</sub> 二重口縁壺。口縁が2段に外反する(1・2・46・79・154)。

壺D<sub>2</sub> 二重口縁壺。口縁・頸部等に竹管文・刻み目・突帯等で加飾した壺。本遺跡で



第26図 古式土師器型式分類一覽(1)  
a~cは青野遺跡資料



第27図 古式土師器型式分類一覽(2)

d ~ f は青野遺跡資料



は、明確な例は出土していない(215参照)。

壺E 二重口縁壺。「5」の字状の口縁を有する山陰系の壺(30・145)。

壺F 直口壺。口縁部は直線的に外方に伸び、体部は球形丸底である(31・146)。

壺G 曲線的に外反する短い口縁端部が玉縁状を呈する大型の壺(32)。

壺H いわゆる長頸壺。やや外方へ直線的に伸びる口頸部をもつ。畿内第5様式前半に特徴的な壺(182)。

## (2) 甕形土器

甕A<sub>1</sub> 口頸部が「く」の字状に外反し、内傾する口端面をやや拡張して、擬凹線文を施す甕。後期前半の丹波・丹後に通有の甕。本遺跡では細片のみ出土(14・52)。

甕A<sub>2</sub> ほぼ垂直ないし外傾する口端面に擬凹線文を施す甕。口縁端部の断面は三角形を呈する(80・81・183・187・193・218等)。

甕A<sub>3</sub> 上方に拡張して擬凹線文を施した端面が発達し、外反していわゆる複合口縁になった甕(16~21・110・219~222等)。

以上の甕 A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub> は、丹後の後期弥生土器を代表する甕である。

甕B<sub>1</sub> 甕A<sub>3</sub>の複合口縁に擬凹線を施さず、横ナデしただけの甕(53・82~85等)。

甕B<sub>2</sub> 複合口縁上半部が更に外反し、下半部とはぼ一直線を呈する甕(113)。

甕C<sub>1</sub> 「く」の字状に外反する口縁部の端部をツマミ上げ、擬凹線文を施す甕(86)。

甕C<sub>2</sub> 「く」の字状に外反する口縁部の端部をツマミ上げた無文の甕(54・87・157)。

甕D<sub>1</sub> 「く」の字状に外反する口縁部の端部に面を有する甕(158・159・184・197)。  
この面をナデた結果、端部下方に小さく肥厚している例が目立つ(56・58・133~136等)。  
通例、口縁は内外面ともナデ調整であるが、内面ハケを施すものがある(22・55・88)。体部外面にタタキ目を残す例として55・136がある。

甕D<sub>2</sub> 「く」の字状に外反する口縁部の端部を丸く、あるいは鋭角的におさめる甕(59・137・138・162・163等)。体部外面にタタキ目を残す例として、60・200がある。

甕D<sub>3</sub> 口縁部が湾曲して外反する甕(115・201等)。

甕D<sub>4</sub> 体部から明確な境界なく、曲線的に頸部に移り、口縁がゆるく外反する甕(23・61・165)。

甕E 「5」の字状に2段に外反する口縁部を有する甕で、山陰系とされる。直線的に伸びる口縁上段と、湾曲する下段との境界は外面で突出した稜線を呈する(62・63・166)。

甕F 「く」の字状に外反する口縁部の端部の端部内面が肥厚するいわゆる布留式甕。本遺跡では細片のみの出土(10・34)。

甕G 2段に外反する口縁部の上段を長く真っ直ぐに伸ばし、多数の擬凹線を施す甕。

月影式にやや類似し、北陸系と思われる。1点のみの出土(90)。

甕H 一度外反した後立ち上がり、やや拡張した上端に平坦面を持つ口縁の甕。近江系、あるいは近江産と思われる。本遺跡では1点のみの出土(91)。

甕I 「く」の字状に外反し、端部を小さく肥厚させる口縁を有し、体部は、細いタタキ目(右上がり)の上をハケで調整した庄内式の甕。1点のみの出土例(64)は、胎土の観察から、河内産の搬入土器である。

### (3) 鉢形土器

鉢A 台付鉢。擬凹線を施した複合口縁を有する(94)。

鉢B<sub>1</sub> 台付鉢。内湾して開く椀形の体部に脚台を付す(95・96)。

鉢B<sub>2</sub> 内湾する体部から外反する口縁部へ曲線的に移るチューリップ型の鉢。類例を見ると、やや高い脚台が付くらしい(170)。

鉢C<sub>1</sub> 2段に屈曲する口縁部を持つ鉢(205)。布留式の小型鉢とは異なり、北陸的でないし、山陰的な形状である。

鉢C<sub>2</sub> 3段に屈曲する口縁部を持つ鉢(140)。

鉢D<sub>1</sub> 小型平底鉢。底部は突出した平底で、体部はやや内湾気味で、直口(98)。

鉢D<sub>2</sub> 突出した小さな平底から内湾する体部が拡がり、口縁端部を小さく外反させた鉢(190)。

鉢E<sub>1</sub> 「く」の字状に外反する口縁部を有する小型平底鉢(27)。

鉢E<sub>2</sub> 「く」の字状に外反する口縁部を有する小型丸底鉢。小型器台Dとセット関係を持つとされるが、本遺跡からは出土していない。第27図には青野遺跡出土例を示した。

鉢F<sub>1</sub> 小型丸底壺に酷似する形態の小型の罎。唯一の出土例122は、底部はくぼみ底で、直線的に外反する口縁部から体部下半まで櫛描き文を施し、口縁部中段には列点文を巡らせる異色的な土器である。類例を知らない。

鉢F<sub>2</sub> いわゆる小型丸底壺。布留式(36・37・148)。

鉢G 「く」の字状に屈曲する口縁部を持つ大型の鉢(123)。

鉢H 有孔鉢を一括する。本遺跡では1点(144)のみ出土している。

手焙り形土器 1点のみ出土した(210)。体部内外面ともハケ調整で、底部は突出平底である。体部中位の突帯以外に加飾はされていない。

### (4) 高杯形土器

高杯A<sub>1</sub> 複合口縁に擬凹線を施す口縁部を持つ高杯(7・206・233)。

高杯A<sub>2</sub> 高杯A<sub>1</sub>の口縁部の屈曲がゆるく、口径も小さい高杯。本遺跡からは出土していない。第27図には青野遺跡出土例を示した。

高杯B 杯部が内湾した後小さく外反する口縁を持つ、曲線的な形態の高杯(67・141)。

高杯C 低脚高杯。内湾する椀状の杯部に、低く大きく広がる脚部を持つ高杯。全形が知られるものは、本遺跡からは出土していない(68・69・236・237等)。

高杯D<sub>1</sub> 直線的に伸びる口縁部と底部とが明瞭な稜線を示す高杯。脚部は不明(142)。

高杯D<sub>2</sub> 杯部底が小さく、一度急角度で立ち上がった後、口縁がゆるやかに外反する高杯(125)。

高杯E 内湾する大きな椀状の杯部を持つ高杯。杯部の底部と口縁部の界線は、わずかに認められる程度(70)。

高杯F 内湾気味の杯部の口縁部がなめらかに外反する高杯。布留式(39・40・211)。

高杯G<sub>1</sub> 杯部が深く、径が小さい高杯(11・99)。

高杯G<sub>2</sub> 杯部が深く、径が小さい高杯で、突帯状の稜線を持つ杯部よりも大きく広がる低い脚を有する(173)。

高杯H 内湾気味の杯部底部から、外湾する口縁部が伸び、端部を内外に肥厚させ、平坦面を持つ、弥生後期前半の高杯(71)。

#### (5) 器台形土器

器台A<sub>1</sub> 大きく広がる受部端部をT字形に拡張し、擬凹線を施す器台(100・143)。

器台A<sub>2</sub> 受部端部を断面三角形に拡張し、擬凹線を施す器台(28・126・174等)。

器台B 器台Aに壺A<sub>1</sub>の口頸部に似た受部を載せたいわゆる装飾器台(191・241)。

器台C 壺Dに似た二重口縁状の受部を持つ器台(127)。

器台D<sub>1</sub> 小型器台。受部と脚部の間に短い柱状部があり、貫通孔を有する(73・74)。

器台D<sub>2</sub> 小型器台。受部と脚部が「く」の字状を呈し、中空である(75・102・128等)。

器台E 中実の小型器台。皿状の受部と直線的な脚部を持つ(8)。

器台G 大型で中空の器台(29・76)。

#### (6) ミニチュア土器

すでに上述の各器種に分類してしまったものもあるが、35・47・98・149・177・180・244等が挙げられる。7号住居跡の特殊ピットから出土した130は、皮袋形土器、あるいは奈良県纏向遺跡に出土例のある注口土器<sup>(注9)</sup>(?)のミニチュアであろう。

### 3. 出土土器観察表

第1～8表に、青野西遺跡出土の弥生土器と古式土師器の観察結果をまとめている。形態については欄を設けていないので、型式分類の項(39頁以下)を参照されたい。「特ピ」は特殊ピットの略。遺物番号に☆を付した遺物は、図版に写真を掲載できたものである。

\* を付した数値は推定値である。

器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土層位	
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体部内面				
					外面	内面						
1号住居跡出土土器 (第28図1~10)												
壺	D <sub>1</sub>	1	15.0	—	} 外面下半ハ ケ以外ナデ	—	ケズリか	淡黄褐色	やや密	下層		
	D <sub>1</sub>	2	18.7	—		ハケ後ナデ	ナデ	暗黄褐色	密	床面		
	底部	3	—	6.2		—	不明	不明	暗褐色	やや密	上層	
甕	A <sub>1</sub>	4	不明	—	ナデ	ナデ	—	赤褐色	やや粗	柱穴		
	D <sub>1</sub>	☆5	13.0	—	ナデ	ナデ	縦ハケ	赤褐色	密	下層		
	D <sub>2</sub>	6	15.0	—	ナデ	ナデ	ナデ	乳褐色	密	床面		
高杯	A <sub>1</sub>	7	26.8	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	橙褐色	密	上層	
器台	E	8	10.9	9.7*	不明	不明	不明	不明	不明	乳赤褐色	やや密	上層
	?	☆9	—	5.6	—	—	脚部ナデ	脚部ナデ	黒灰色	やや密	中層	
2号住居跡出土土器 (第28図11~12)												
甕	F	10	15.6	—	ナデ	ナデ	—	—	淡黄褐色	粗	埋土	
高杯	G <sub>1</sub>	11	—	—	—	—	縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	淡赤褐色	密	床面	
3号住居跡出土土器 (第28図13~29)												
壺	A <sub>1</sub>	12	12.2	—	ハケ	ハケ	横ハケ	ケズリか	橙褐色	やや密	中層	
	?	13	—	—	—	—	肩部に7本沈線	ナデか	橙褐色	密・堅緻	下層	
甕	A <sub>1</sub>	14	—	—	ナデ	ナデ	—	—	橙褐色	密	床面	
	A <sub>2</sub>	15	13.4	—	ナデ	ナデ	ハケ	ケズリか	淡橙褐色	密	床面	
	A <sub>3</sub>	16	16.8	—	ナデ	ナデ	不明	不明	乳赤褐色	やや粗	上層	
	A <sub>3</sub>	17	17.6	—	ナデ	ナデ	横ハケ	頸部ヘラナデ	乳褐色	やや粗	下層	
	A <sub>3</sub>	18	17.8	—	ナデ	ナデ	—	—	淡褐色	やや粗	下層	
	A <sub>3</sub>	19	18.0	—	ナデ	ナデ	不明	不明	淡褐色	やや密	下層	
	A <sub>3</sub>	20	19.1	—	ナデ	ナデ	不明	不明	淡橙褐色	密	下層	
	A <sub>3</sub>	21	21.3	—	ナデ	ナデ	—	—	暗褐色	やや密	下層	
	D <sub>1</sub>	22	15.5	—	ナデ	横ハケ	ハケ	ケズリ後ハケ	淡橙褐色	やや粗	床面	
	D <sub>4</sub>	23	15.5	—	指圧痕	ナデ	縦ヘラミガキ	ハケ	淡橙褐色	粗	特ピ	
	E	24	21.9	—	不明	不明	—	—	淡黄褐色	やや密	中層	
	底部	25	—	2.3	—	—	タタキ痕	不明	淡橙褐色	やや密	下層	
	鉢	A	26	—	4.4	—	—	ハケ	不明	橙褐色	やや密	床面
E <sub>1</sub>		☆27	8.4	4.0	不明	不明	ナデ	不明	橙褐色	やや粗	柱穴	
			高 5.8									
器台	A <sub>2</sub>	28	—	—	—	—	—	—	暗赤褐色	密	下層	
	G	29	—	—	—	—	横ヘラミガキ	不明	淡赤褐色	やや密	中層	
4号住居跡出土土器 (第29図30~43)												
壺	E	☆30	12.8	—	ナデ	ナデ	ナデか	ナデか	明褐色	やや粗	床面	

第1表 土器観察表 (1)

器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土層位
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体部内面			
					外面	内面					
壺	F	31	8.8	—	ナデ	ナデ	ハケ	ケズリか	淡褐色	やや密	上層
	G	☆32	13.8	—	ナデ	ナデ	中位縦・肩横ハケ	横ケズリ	橙褐色	やや粗	床面
甕	B <sub>1</sub>	33	34.9	—	ナデ	ナデ	—	—	橙褐色	粗	上層
	F	34	—	—	ナデ	ナデ	—	—	淡褐色	やや密	埋土
鉢	ミニチュア	☆35	7.7	4.2	指頭痕	指頭痕	磨滅が著しいが、指頭痕が多く残る。	手づくねの指	淡黄褐色	粗	床面
	F <sub>2</sub>	☆36	7.9	丸底高 7.7	ナデ	ナデ	ナデか	指頭痕	淡褐色	やや粗	下層
	F <sub>2</sub>	☆37	8.2	丸底高 6.1	ナデ	ナデ	指頭痕上にハケ	指頭痕の上に一部ケズリ	乳褐色	やや粗	上層
高杯	D <sub>1</sub>	38	18.6	12.2	不明	不明	不明	脚部内ケズリ	赤色混りの黒灰色	粗	上層
	F	☆39	16.4	—	不明	不明	ヘラミガキか	一部ハケ	淡赤褐色	密	下層
	F	40	17.0	—	不明	不明	—	—	淡黄褐色	粗	柱穴
	脚部	41	—	9.7	—	—	不明	不明	淡褐色	粗	床面
	脚部	42	—	12.4	—	—	不明	ケズリ	橙褐色	粗	下層
器台	E	43	—	8.6	—	—	一部にハケ	不明	淡褐色	密	上層
5号住居跡出土土器 (第29図～第30図44～78)											
壺	C <sub>2</sub>	44	17.4	—	ナデ	ナデ	ナデ	横ケズリ	淡褐色	やや粗	床面
	C <sub>2</sub>	☆45	15.4	—	ナデ	ナデ	ミガキ後ハケ	縦ナデ	淡黄褐色	やや粗	床面
	D <sub>1</sub>	46	18.5	—	不明	不明	—	—	淡褐色	やや粗	床面
	D <sub>1</sub>	47	10.4	—	ミガキ	不明	—	—	橙褐色	密	特ピ
	底?	48	—	8.3	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰褐色	密	床面
	底部	49	—	5.6	—	—	タタキ	不明	淡橙褐色	やや粗	床面
	底部	50	—	4.8	—	—	タタキ	ナデ	淡黄褐色	密	下層
	肩部	51	—	—	—	—	細かいタタキ	ハケ	暗茶褐色	やや密	中層
甕	A <sub>1</sub>	52	—	—	ナデ	ナデ	—	—	淡橙褐色	やや密	下層
	B <sub>1</sub>	53	13.8	—	ナデ	ナデ	ナデ	横ヘラケズリ	赤褐色	やや粗	床面
	C <sub>2</sub>	54	21.5	—	ナデ	ナデ	ハケか	頸部ナデ	明黄褐色	やや密	埋土
	D <sub>1</sub>	55	14.9	—	ナデ	横ハケ	タタキ後ナデ	ケズリ	淡橙褐色	やや密	床面
	D <sub>1</sub>	56	15.8	—	ナデ	ナデ	—	頸部ナデ	淡橙褐色	やや粗	下層
	D <sub>1</sub>	57	12.4	—	不明	不明	不明	不明	橙褐色	粗	床面
	D <sub>1</sub>	58	15.8	—	不明	不明	不明	不明	橙褐色	密	下層
	D <sub>2</sub>	59	13.4	—	ナデ	ナデ	頸部横ナデ	横ナデ	暗褐色	やや密	下層
	D <sub>2</sub>	☆60	14.0	2.4	ナデ	ナデ	タタキ後ナデ, 下半ナデ消し	上1/3横ナデ, 下2/3縦ナデ	暗赤褐色 内面は黒色	粗	床面
	D <sub>4</sub>	61	15.6	—	ナデ	ナデ	頸部以下縦ハケ	横ハケか	赤褐色	やや粗	特ピ
E	62	16.6	—	不明	不明	—	—	橙褐色	やや粗	中層	

第2表 土器観察表 (2)

器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土層位
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体部内面			
					外面	内面					
甕	E	63	12.6	—	ナデ	ナデ	—	—	暗褐色	密	床面
	I	☆64	14.5	—	ナデ	ナデ	細タタキ後ハケ	ヘラケズリ	暗茶褐色	密	中層
	底部	65	—	3.2	—	—	不明	不明	淡赤褐色	やや粗	床面
	底部	66	—	1.1	—	—	不明	不明	淡橙褐色	やや密	下層
高杯	B	67	13.2	—	ミガキ	ミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐色	密・堅緻	下層
	C	68	—	—	—	—	不明	不明	淡赤褐色	密	床面
	C	69	—	—	—	—	不明	不明	淡赤褐色	やや密	特ビ
	E	☆70	19.0	11.8	不明	不明	不明	不明	赤褐色	やや密	下層
	H 脚部	71	27.3	—	ナデ	ナデ	杯部ヘラミガキ	杯部ミガキ	淡褐色	密・堅緻	上層
		72	—	—	—	—	脚部ヘラミガキ	不明	淡赤褐色	密	床面
器台	D <sub>1</sub>	☆73	9.8	10.1	ナデ	ナデ	全面ヘラミガキ	受部ナデ 脚部ナデか	外面茶褐色 内面灰褐色	やや密 堅緻	中層
	D <sub>1</sub>	74	—	—	—	—	ヘラミガキ	脚部ハケ	淡黄褐色	密	床面
	D <sub>2</sub>	75	—	10.8	—	—	不明	不明	淡赤褐色	やや密	中層
	G	76	—	13.1	—	—	ヘラミガキ	不明	淡赤褐色	やや密	下層
	C?	77	—	—	—	—	不明	不明	淡赤褐色	密	下層
	C?	78	—	—	—	—	不明	不明	淡赤褐色	やや密	床面
	6号住居跡出土土器 (第31図79~102)										
壺	D <sub>1</sub>	79	12.2	—	ナデ	ナデ	—	—	淡橙褐色	やや密	上層
甕	A <sub>2</sub>	80	12.0	—	ナデ	ナデ	肩部ナデ	ヘラケズリ	淡黄褐色	やや密	床面
	A <sub>2</sub>	☆81	27.2	7.2	ナデ	ナデ	肩部ナデ・中下位 ハケ後ナデ	不明・部分的 にハケ目残る	淡褐色	やや粗	柱穴
	B <sub>1</sub>	82	17.2	—	ナデ	ナデ	—	横ヘラケズリ	淡褐色	やや密	埋土
		83	17.4	—	ナデ	ナデ	ハケ	横ヘラケズリ	淡黄褐色	やや密	下層
	B <sub>1</sub>	84	18.6	—	不明	不明	不明	不明	淡褐色	粗	上層
	B <sub>1</sub>	85	22.9	—	不明	不明	不明	不明	淡橙褐色	やや密	下層
	C <sub>1</sub>	86	22.8	—	ナデ	ナデ	不明	横ヘラケズリ	淡褐色	粗	床面
	C <sub>2</sub>	87	18.1	—	ナデ	ナデ	不明	不明	淡褐色	やや粗	下層
	D <sub>1</sub>	88	16.1	—	ハケ	ハケ	縦ハケ	横ヘラケズリ	淡褐色	やや粗	上層
	E?	89	18.5	—	ハケ	ナデ	—	—	暗赤褐色	やや密	床面
	G	☆90	15.8	—	ナデ	ナデ	—	—	橙褐色	やや粗	下層
	H	☆91	13.0	—	ナデ	ナデ	—	—	黒灰色	やや密	上層
	底部	92	—	5.9	—	—	タタキ	ハケ	暗橙褐色	やや密	下層
底部	93	—	4.5	—	—	タタキ	ハケ	暗灰褐色	密	埋土	
鉢	A	☆94	13.3	5.1	ナデ	ナデ	ハケ 脚部ナデ	ケズリ後ナデ 底面に木葉痕	淡赤褐色	やや密	床面
	B <sub>1</sub>	☆95	9.4	5.3	不明	指頭痕	不明。脚付け根は 横ナデ	不明。脚内面に 指頭痕	淡赤褐色	粗	床面

第3表 土器観察表 (3)

器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土層位
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体部内面			
					外面	内面					
鉢	B <sub>1</sub>	96	13.4	8.6	ナデか	不明	ハケ	不明。鉢底に指押さえ痕。	淡黄褐色 (黒斑多)	やや粗	床面
	B <sub>1</sub>	97	—	8.6	—	—	脚横ナデ	脚ハケとナデ	橙褐色	密	下層
	D <sub>1</sub>	98	7.0	3.4	不明	不明	不明	不明	淡褐色	粗	上層
高杯	G <sub>1</sub>	99	10.9	—	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡赤褐色	やや密	下層
器台	A <sub>1</sub>	100	21.0	—	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ナデ	赤褐色	密	特ピ
	D <sub>1</sub>	101	—	12.9	—	—	不明	不明	赤褐色	密	下層
	D <sub>2</sub>	102	—	11.0	—	—	不明	不明	橙褐色	密	床面
7号住居跡出土土器 (第32図103~130)											
壺	C <sub>1</sub>	103	14.0	—	ナデ	ナデ	—	—	黒褐色	やや密	床面
	底部	104	—	5.0	—	—	不明	ハケ	淡黄褐色	やや密	床面
	底部	105	—	5.3	—	—	不明	ハケ	淡橙褐色	やや密	上層
	底部	106	—	4.4	—	—	ナデ	ケズリ後ナデ	淡灰褐色	やや密	床面
	底部	107	—	7.9	—	—	ハケ	ナデ	淡橙褐色	やや密	床面
	底部	108	—	5.3	—	—	不明	ナデ	淡橙褐色	やや粗	床面
	底部	109	—	5.7	—	—	不明	不明	赤褐色	やや粗	下層
	甕	A <sub>3</sub>	110	17.4	—	不明	ナデ	—	不明	黒褐色	やや粗
B <sub>1</sub>		111	10.4	—	ナデ	ナデ	不明	不明	淡黄褐色	やや密	床面
B <sub>1</sub>		112	15.4	—	ナデ	ナデ	—	ヘラケズリ	淡橙褐色	粗	上層
B <sub>2</sub>		113	14.7	—	ナデ	ナデ	—	—	淡橙褐色	粗	下層
B <sub>2</sub>		114	14.6	—	ナデ	ナデ	ハケ後肩部ナデ	ハケ	淡橙褐色	粗	床面
D <sub>3</sub>		115	15.3	—	不明	不明	横ハケ	不明	茶褐色	粗	中層
D <sub>4</sub>		116	14.6	—	ナデ	ナデ	ハケ, 上半ナデ	ハケ	淡赤褐色	やや密	床面
底部		117	—	3.0	—	—	ハケ, 底部粗雑	底部指頭痕	暗赤褐色	粗	床面
底部		118	—	0.7	—	—	ハケ	底部指頭痕	淡赤褐色	粗	床面
鉢		D <sub>1</sub>	119	—	3.4	—	—	不明・凹み底	不明	淡赤褐色	やや密
	D <sub>1</sub>	120	—	3.0	—	—	不明・凹み底	ハケ・指頭痕	黄褐色	やや粗	床面
	D <sub>1</sub>	121	—	3.0	—	—	ナデ・凹み底	ナデ	明黄褐色	やや密	床面
	F <sub>1</sub>	☆122	7.4	2.3	ナデ後 櫛描き	ナデか	ナデ後櫛描き文	ナデか	明橙褐色	密	床面
	G	☆123	31.4	—	ナデ	ナデ	ハケ, 一部指ナデ	ハケ	淡褐色	やや密	床面
高杯	C	124	12.9	—	不明	不明	不明	不明	淡赤褐色	密	埋土
	D <sub>2</sub>	☆125	19.7	—	ナデ	ナデ	ヘラナデ	ハケ後ナデか	赤褐色	やや粗	下層
器台	A <sub>2</sub>	126	14.5	—	ナデ	ナデ	—	—	茶褐色	密	床面
	C	☆127	21.5	13.7	ミガキ 後ナデ	ミガキ 後ナデ	全面ヘラミガキ 後脚部はナデ。	ケズリ後ミガキ。 脚部ナデ	淡赤褐色	密・堅緻	床面
	D <sub>2</sub>	128	8.7	—	不明	不明	不明	不明	淡赤褐色	密	柱穴

第4表 土器観察表 (4)

器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土層位
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体部内面			
					外面	内面					
蓋		☆129	8.6	4.4	ナデ	ナデ	ヘラミガキ ツマミはナデ	ナデ	明赤褐色	密。ツマミ径3.5	床面
異形土器		☆130	幅	4.2	—	—	手づくねとナデ	ナデ	明赤褐色	やや密	特ピ
8号住居跡出土土器 (第33図131~144)											
壺	B <sub>1</sub>	131	13.2	—	不明	不明	—	—	淡黄褐色	やや粗	埋土
	C <sub>1</sub>	☆132	15.8	—	ナデ	ナデ	ナデか	不明	淡赤褐色	やや粗	床面
甗	D <sub>1</sub>	133	14.8	—	ナデ	ナデ	ナデか	不明	暗褐色	やや粗	床面
	D <sub>1</sub>	134	15.8	—	ナデ	ナデ	ハケか	ヘラケズリ	茶褐色	やや粗	床面
	D <sub>1</sub>	135	17.2	—	ナデ	ナデ	—	—	茶褐色	やや粗	埋土
	D <sub>1</sub>	136	17.0	1.9	ナデ	ナデ	タタキ	縦ヘラケズリ 底部不明	淡褐色	粗	床面
	D <sub>2</sub>	137	13.4	—	不明	不明	—	—	淡褐色	やや粗	埋土
	D <sub>2</sub>	138	17.4	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	褐色	やや粗	特ピ
鉢	B <sub>1</sub>	139	—	3.9	—	—	ナデ	ナデ・指押さえ	淡褐色	やや粗	埋土
	C <sub>2</sub>	140	16.4	—	ナデ	ナデ	不明	不明	橙褐色	粗	床面
高杯	B	☆141	12.4	12.0*	不明	不明	不明	不明	赤褐色	粗・軟質	床面
	D <sub>1</sub>	142	21.0	—	端部ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐色	密・堅緻	床面
器台	A <sub>1</sub>	143	19.6	—	ミガキ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗赤褐色	密・堅緻	床面
鉢	H	☆144	—	丸底	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	赤褐色	粗	床面
9号住居跡出土土器 (第33図145~150)											
壺	E	☆145	13.6	—	ナデ	ナデ	ハケ	ヘラケズリか	橙褐色	密	床面
	F	☆146	11.1	—	ナデ	ナデ	上半ハケ後ナデ下半ハケ	上半ケズリ下半ナデ	淡黄褐色	やや粗	周溝
甗	D <sub>2</sub>	147	14.6	丸底	ハケ	ハケ	ハケ	ヘラケズリ	暗褐色	やや密	床面
			高26.9	—	—	—	底部ナデ	—	—	—	—
鉢	F <sub>2</sub>	☆148	8.6	丸底	ナデ	ナデ	ハケ	ヘラケズリ 底に指頭痕	灰褐色	密	周溝
鉢	?	149	—	3.6	—	—	不明	ハケか	赤褐色	密	柱穴
器台		150	11.5	—	ナデ	ナデ	—	—	赤褐色	やや密	柱穴
10号住居跡出土土器 (第34図151~第35図177)											
壺	A <sub>1</sub>	☆151	12.8	3.6	縦ハケ	横ハケ	縦ハケ後中位の接合部を横ハケ	接合部ナデ・ハケ・指押さえ	淡褐色 外面に黒斑	やや密	床面 柱穴
	B <sub>2</sub>	152	11.9	—	縦ハケ	ナデ	—	—	淡赤褐色	やや粗	床面

第5表 土器観察表 (5)



器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土層位
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体部内面			
					外面	内面					
壺	C <sub>2</sub>	153	14.0	5.4	ナデとハケ	ナデとハケ	肩部格子状ハケ 底近くタタキ	肩部ナデか 底近くハケ	淡赤褐色	やや粗	床面
	D <sub>1</sub>	154	19.8	—	ナデ	ナデ	—	—	淡赤褐色	やや密	中層
	底部	155	—	4.3	—	—	不明	不明	淡赤褐色	やや粗	上層
甕	A <sub>2</sub>	156	19.8	—	ナデ	ナデ	ハケか	横ヘラケズリ	淡褐色	やや粗	下層
	C <sub>2</sub>	157	16.1	—	ナデ	ナデ	不明	横ヘラケズリ	黄褐色	粗	上層
	D <sub>1</sub>	158	15.8	—	ハケ	ナデ	縦ハケ	ハケか	茶褐色	やや密	中層
	D <sub>1</sub>	159	17.0	—	ナデ	ナデ	縦ハケ	不明	橙褐色	やや粗	中層
	D <sub>1</sub>	160	21.1	—	ナデ	ナデ	不明	横ヘラケズリ	淡褐色	やや粗	下層
	D <sub>1</sub>	161	26.1	—	ハケ	不明	ハケ	不明	橙褐色	やや粗	中層
	D <sub>2</sub>	162	16.1	—	ナデ	ナデ	不明	ケズリ後ナデ	淡赤褐色	やや粗	上層
	D <sub>2</sub>	163	25.1	—	不明	不明	ハケ	不明	淡赤褐色	粗	床面
	D <sub>2</sub>	164	20.5	—	不明	不明	ハケ	不明	暗褐色	粗	上層
	D <sub>4</sub>	165	21.3	—	ナデ	ナデ	ハケ	ヘラケズリ	淡赤褐色	やや密	上層
	E	166	16.4	—	不明	不明	不明	不明	明赤褐色	やや密	上層
	底部	167	—	3.6	—	—	ハケ	ナデか	淡橙褐色	やや粗	中層
鉢	B <sub>1</sub>	168	—	5.5	—	—	ハケ	不明	淡橙褐色	やや密	上層
	B <sub>1</sub>	169	—	4.8	不明	不明	不明	不明	明赤褐色	やや密	下層
	B <sub>2</sub>	170	10.0	—	ナデ	ナデ	ハケ	ナデ	黒灰色	密	上層
高杯	B	171	12.5*	—	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐色	密・堅緻	下層
	C	172	11.6	—	不明	不明	不明	不明	淡黄褐色	やや粗	上層
	G <sub>2</sub>	☆173	10.2	12.6	ナデ	ナデ	ミガキ後ナデか脚 ケズリ後ナデ	ミガキ後ナデ 脚部ナデ	明橙褐色	やや密	上層
器台	A <sub>2</sub>	174	17.8	—	ナデ	ナデ	—	ヘラミガキ	淡赤褐色	密	下層
	柱部	175	—	—	—	—	脚部ケズリ	ヘラケズリ	淡赤褐色	やや密	床面
	脚部	176	—	11.8	—	—	脚部ヘラミガキ	脚部ハケ	淡赤褐色	やや密	下層
ミニチュア	177	5.5	1.8	不明	不明	不明	ナデ	淡橙褐色	やや粗	上層	
			高 5.0								
11号住居跡出土土器 (第35図178~181)											
壺		178	—	—	不明	不明	—	—	淡赤褐色	やや密	上層
甕	底部	179	—	5.0	—	—	ハケ	指ナデ	淡赤褐色	やや密	床面
ミニチュア		180	—	3.5	—	—	ナデ・指頭痕	指ナデ	淡橙褐色	やや密	下層
高杯	脚部	181	—	14.2	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡赤褐色	やや密	上層
12号住居跡出土土器 (第35図182)											
壺	H	☆182	14.7	—	ナデ	ナデ	頸部ヘラミガキ	頸部ハケ	淡橙褐色	やや密	床面
13号住居跡出土土器 (第35図183~185)											
甕	A <sub>2</sub>	183	15.4	—	ナデ	ナデ	不明	ナデか	淡橙褐色	やや密	周溝

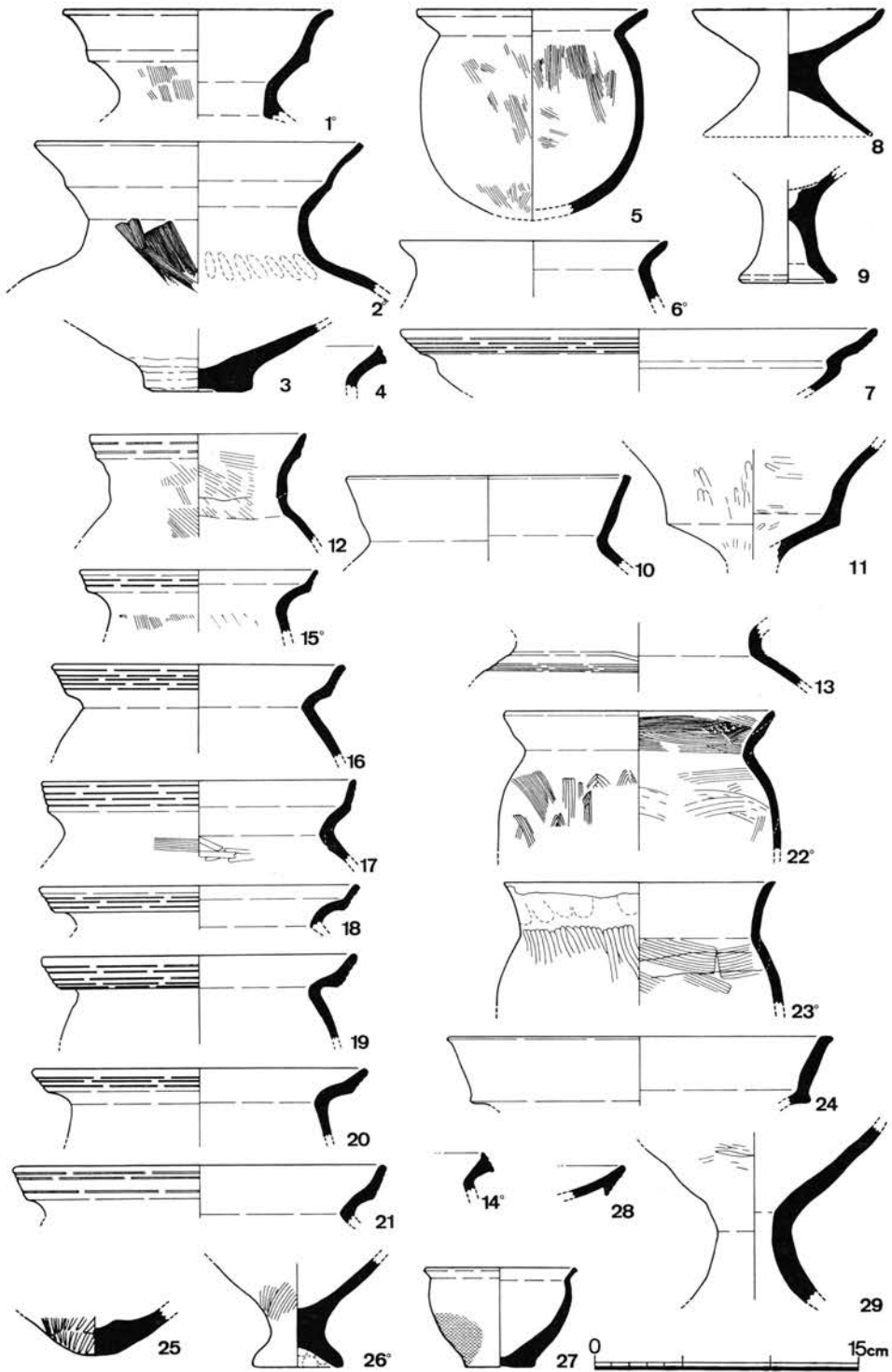
第6表 土器観察表 (6)

器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土層位
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体部内面			
					外面	内面					
甕	D <sub>1</sub>	184	14.5	—	ナデ	ナデか	ハケ	ナデか	橙褐色	やや粗	下層
蓋		185	—	—	—	—	不明	ハケ	暗赤褐色	密	上層
14号住居跡出土土器 (第35図186~191)											
壺	A <sub>2</sub>	186	8.8	—	ナデ	ナデ	—	—	赤褐色	やや密	上層
甕	A <sub>2</sub>	187	13.6	—	ナデ	ナデ	—	ナデか	淡橙褐色	やや粗	下層
	A <sub>2</sub>	188	13.4	—	ナデ	ナデ	—	—	淡橙褐色	やや密	下層
鉢	B <sub>1</sub>	189	—	5.7	—	—	ナデか	ミガキか	淡橙褐色	やや粗	床面
	D <sub>2</sub>	☆190	13.5	3.2	ナデ	ナデ	ハケ 底部ハケ	ハケ	黄褐色	密	床面
器台	B	191	—	—	—	—	不明	ナデ	明橙褐色	密	上層
15号住居跡出土土器 (第36図192~209)											
甕	A <sub>2</sub>	192	14.0	—	ナデ	不明	ハケか	ヘラケズリ	橙褐色	やや密	下層
	A <sub>2</sub>	193	17.4	—	ナデ	ナデ	不明	ヘラケズリ	淡橙褐色	やや密	中層
	B <sub>1</sub>	194	16.5	—	ナデ	ナデ	—	—	淡灰褐色	粗	上層
	B <sub>1</sub>	195	21.8	—	不明	不明	不明	不明	暗橙褐色	密	中層
	D <sub>1</sub>	196	11.8	—	ナデ	ナデ	不明	ケズリか	暗赤褐色	やや粗	中層
	D <sub>1</sub>	197	17.8	—	不明	不明	不明	ケズリか	橙褐色	やや粗	下層
	D <sub>1</sub>	198	27.6	—	ナデ	ナデ	ハケ	ヘラケズリ	黄褐色	密・堅緻	下層
	D <sub>2</sub>	199	16.4	—	ナデ	ナデ	—	—	橙褐色	密	上層
	D <sub>2</sub>	200	17.2	—	ナデ	ナデ	タタキ, 中位ハケ	横ヘラケズリ	黄褐色	やや粗	中層
	D <sub>3</sub>	201	18.5	—	ナデ	ナデ	ハケ	横ヘラケズリ	淡赤褐色	やや粗	中層
	E	202	19.6	—	ナデ	ナデ	—	—	灰褐色	粗	中層
	底部	203	—	3.8	—	—	ハケ	ナデか	橙褐色	密	中層
	底部	204	—	3.2	—	—	ハケか	不明	淡赤褐色	粗	上層
鉢	C <sub>1</sub>	205	13.7	—	ナデ	ナデ	ナデか	ケズリか	橙褐色	やや粗	中層
高杯	A <sub>1</sub>	206	22.9	—	ナデ	ナデ	ナデか	ナデか	淡橙褐色	やや粗	中層
	脚部	207	—	15.0	—	—	ハケ	—	橙褐色	やや粗	中層
器台	A <sub>2</sub>	208	14.4	—	不明	不明	不明	不明	赤褐色	やや粗	中層
	E	209	—	10.7	—	—	不明	不明	明赤褐色	粗	上層
土城2出土土器 (第35図210)											
手焙り形	☆210	19.0	3.8	ナデ	ナデ	ハケか	ハケ	暗褐色	やや粗	埋置	
土城5出土土器 (第35図211)											
高杯	F	☆211	22.6	—	ナデ	ナデ	ヘラミガキか	ヘラミガキか	淡赤褐色	やや密	底
土城6出土土器 (第36図212~第37図244)											
壺	A <sub>2</sub>	212	13.0	—	不明	不明	—	—	橙褐色	やや密	埋土

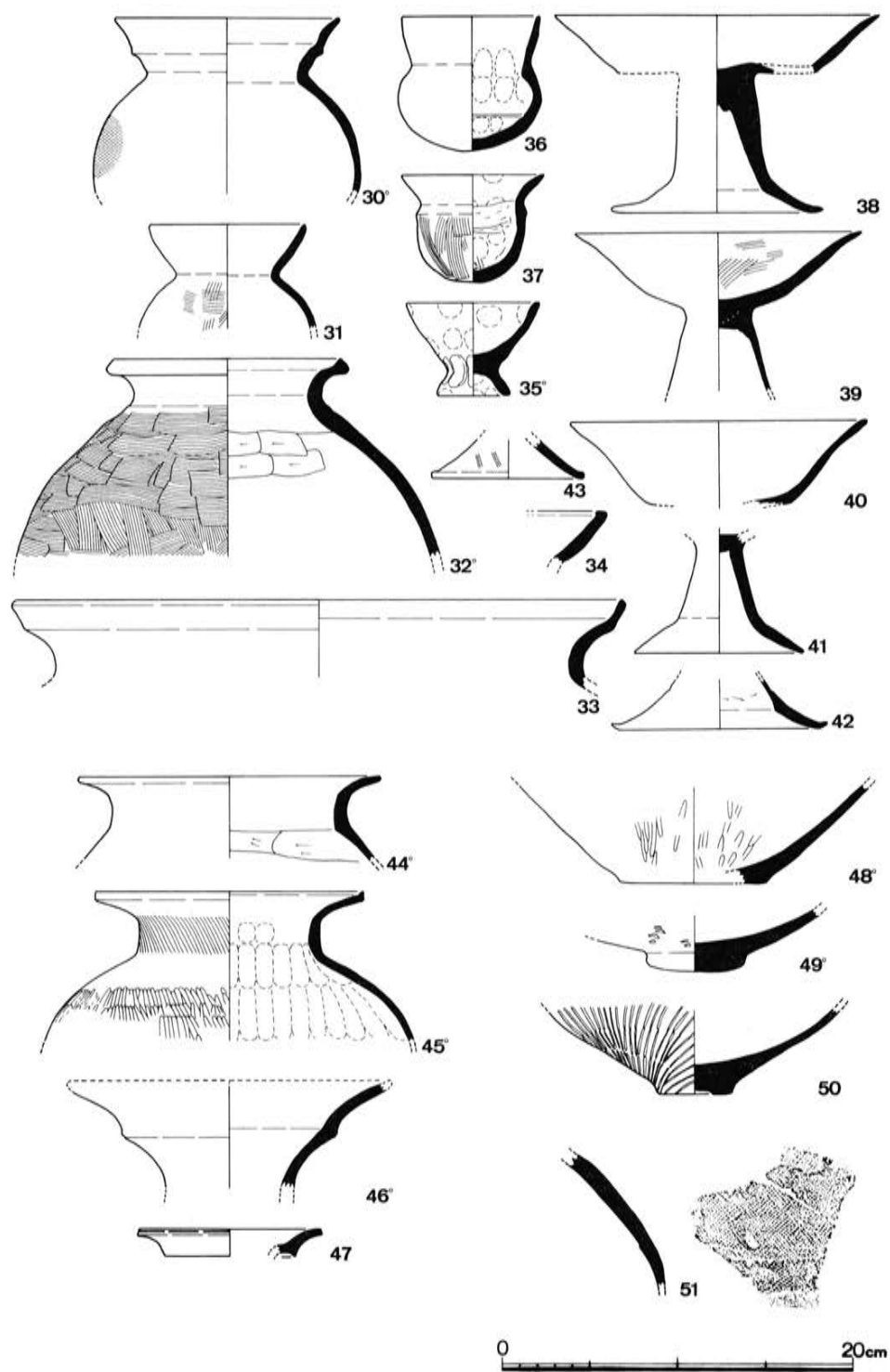
第7表 土器観察表 (7)

器種	型式	遺物番号	法量 (cm)		手 法				色 調	胎土・他	出土位置
			口径	底径	口 縁 部		体 部 外 面	体 部 内 面			
					外面	内面					
壺	B <sub>2</sub>	213	11.2	—	ナデ	ナデ	頸部ハケ	頸部ケズリか	淡褐色	密	中央
	B <sub>2</sub>	214	11.6	—	ナデ	ナデ	—	—	赤褐色	密	中央
	D <sub>2</sub> ?	215	—	—	—	—	肩部沈線8条	接合部ハケ	淡橙褐色	やや密	東西
	底部	216	—	4.0	—	—	ナデか	ナデか	橙褐色	やや密	中央
甕	A <sub>1</sub>	217	18.6	—	不明	不明	—	—	淡赤褐色	粗	埋土
	A <sub>2</sub>	218	17.0	—	不明	不明	—	—	茶褐色	やや密	東
	A <sub>3</sub>	219	16.4	—	不明	不明	—	ケズリ	橙褐色	やや密	西
	A <sub>3</sub>	220	17.4	—	不明	不明	ハケ・列点文	ケズリか	淡橙褐色	やや粗	中央
	A <sub>3</sub>	221	19.9	—	不明	不明	不明	不明	淡橙褐色	やや密	中央
	A <sub>3</sub>	222	19.8	—	ナデ	ナデ	ハケ	ケズリ	暗橙褐色	やや粗	東
	B <sub>1</sub>	223	18.4	—	不明	不明	ハケ	ケズリか	橙褐色	やや密	西
	B <sub>1</sub>	224	22.8	—	ナデ	ナデ	ハケ	ケズリ	淡橙褐色	やや密	西
	B <sub>2</sub>	225	19.8	—	ナデ	ナデ	不明	不明	淡橙褐色	やや粗	中央
	D <sub>1</sub>	226	13.4	—	ナデ	ナデ	不明	ナデか	淡橙褐色	やや粗	埋土
	D <sub>1</sub>	227	16.5	—	ナデ	ナデ	—	—	茶褐色	やや密	西
	底部	228	—	3.9	—	—	不明	ケズリか	赤褐色	密	中央
	底部	229	—	5.4	—	—	縦ハケ	ヘラケズリ	暗赤褐色	密	中央
	底部	230	—	5.4	—	—	縦ハケ	ヘラケズリ	暗赤褐色	密	東
底部	231	—	5.6	—	—	縦ハケ	不明	赤褐色	密	中央	
底部	232	—	4.8	—	—	ハケ	不明	淡褐色	密	中央	
高杯	A <sub>1</sub>	233	20.8	—	ミガキ	ミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡褐色	密・堅緻	東
	C	234	13.2	—	ナデ	ナデ	指押さえ未調整	ナデ	赤褐色	密	中央
	C	235	15.0	—	不明	不明	不明	不明	淡橙褐色	やや密	埋土
	C	236	—	—	—	—	不明	不明	淡橙褐色	やや密	中央
	C	237	—	20.2	—	—	脚部ミガキ	ナデか	淡黄褐色	やや密	東
	脚部	238	—	—	—	—	不明	不明	淡橙褐色	密	西
器台	A <sub>2</sub>	239	13.4	—	ナデ	ナデ	ハケか	ハケ	淡橙褐色	密	東
	Bか	240	16.0	—	ナデ	ナデ	ハケ後ミガキか	ヘラミガキ	赤褐色	密	中央
	B	☆241	14.0	16.8*	ナデ	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ 脚部不明	淡赤褐色	密	東
蓋		242	—	—	—	不明	不明	赤褐色	密	中央	
		243	—	—	—	ハケ	ハケ	暗褐色	密	埋土	
ミニチュア		244	—	1.4	—	—	ナデ	ナデ	淡灰色	密	中央

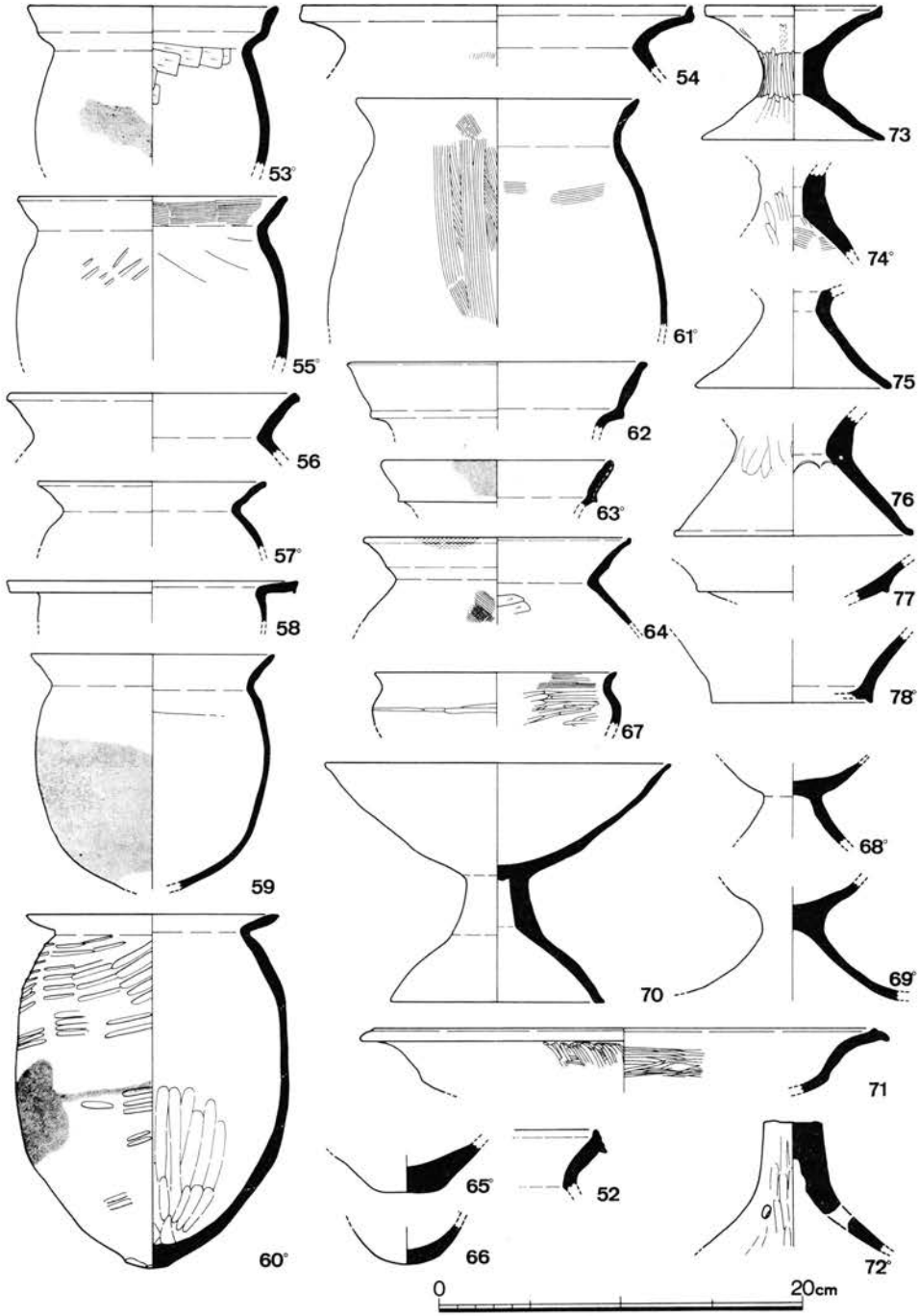
第8表 土器観察表 (8)



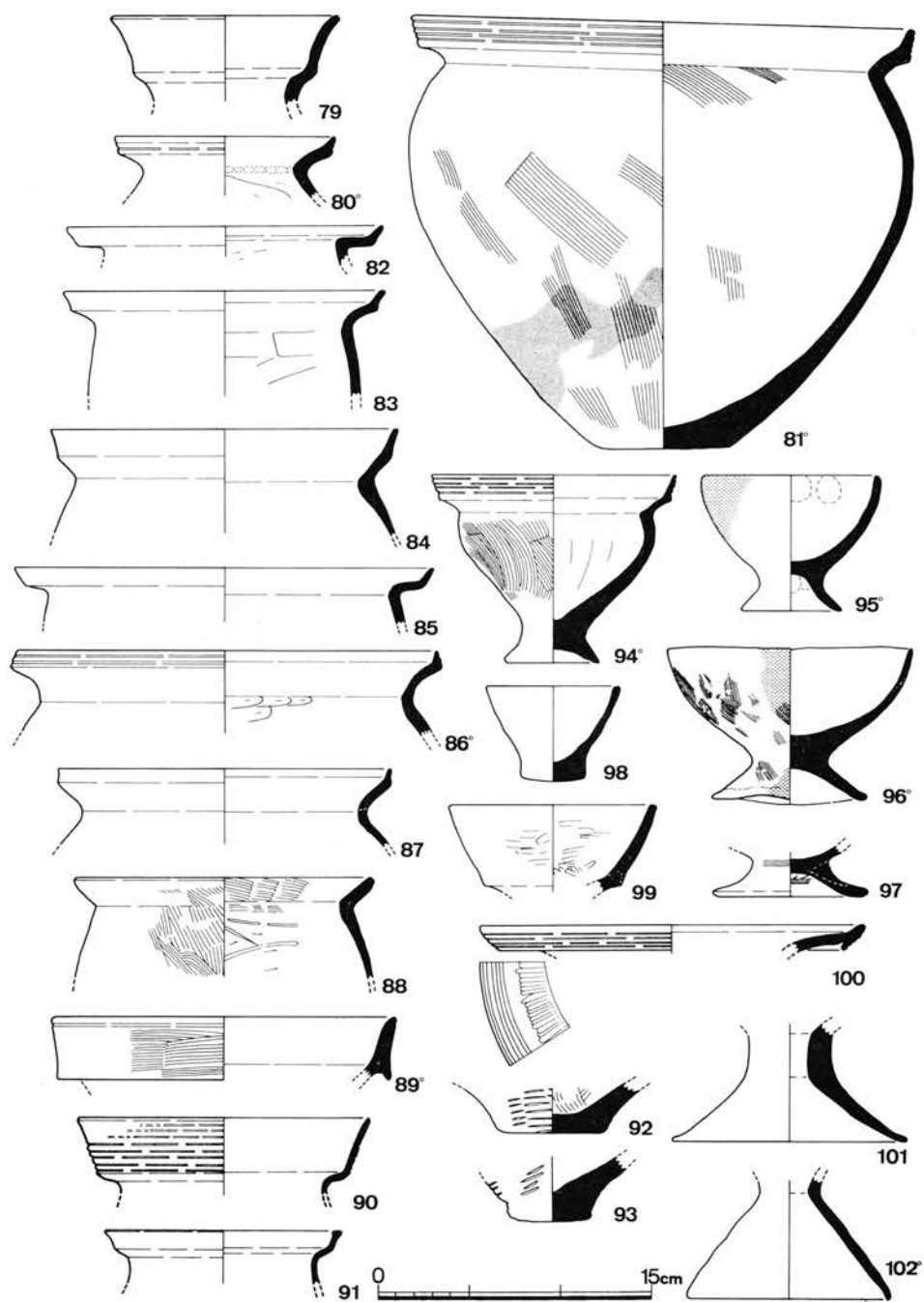
第28図 土器実測図(1)：1号(1~9)・2号(10~11)・3号(12~29) 住居跡



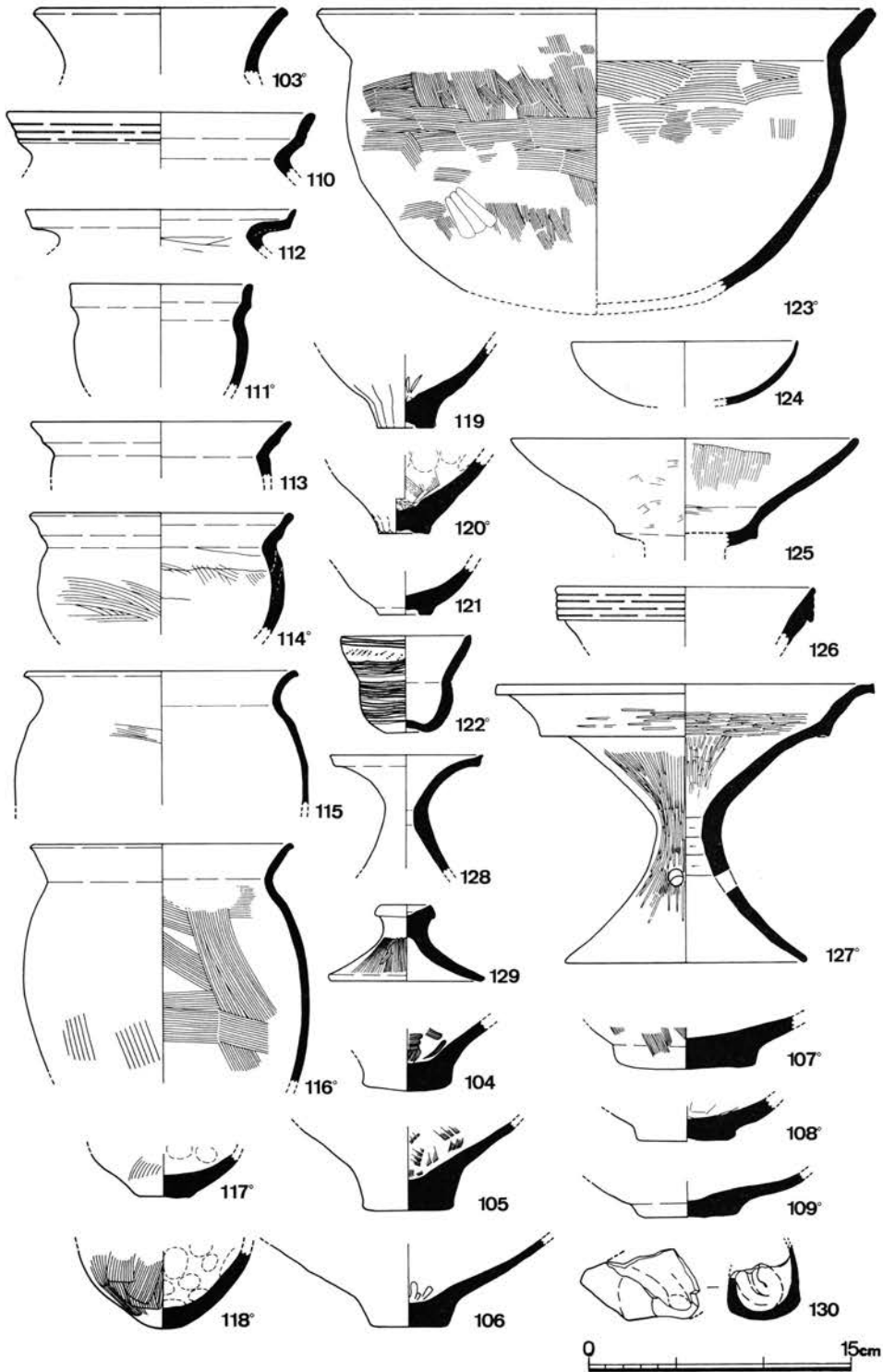
第29図 土器実測図(2)：4号(30~43)・5号(その1：44~51)住居跡



第30図 土器実測図(3)：5号住居跡(その2)

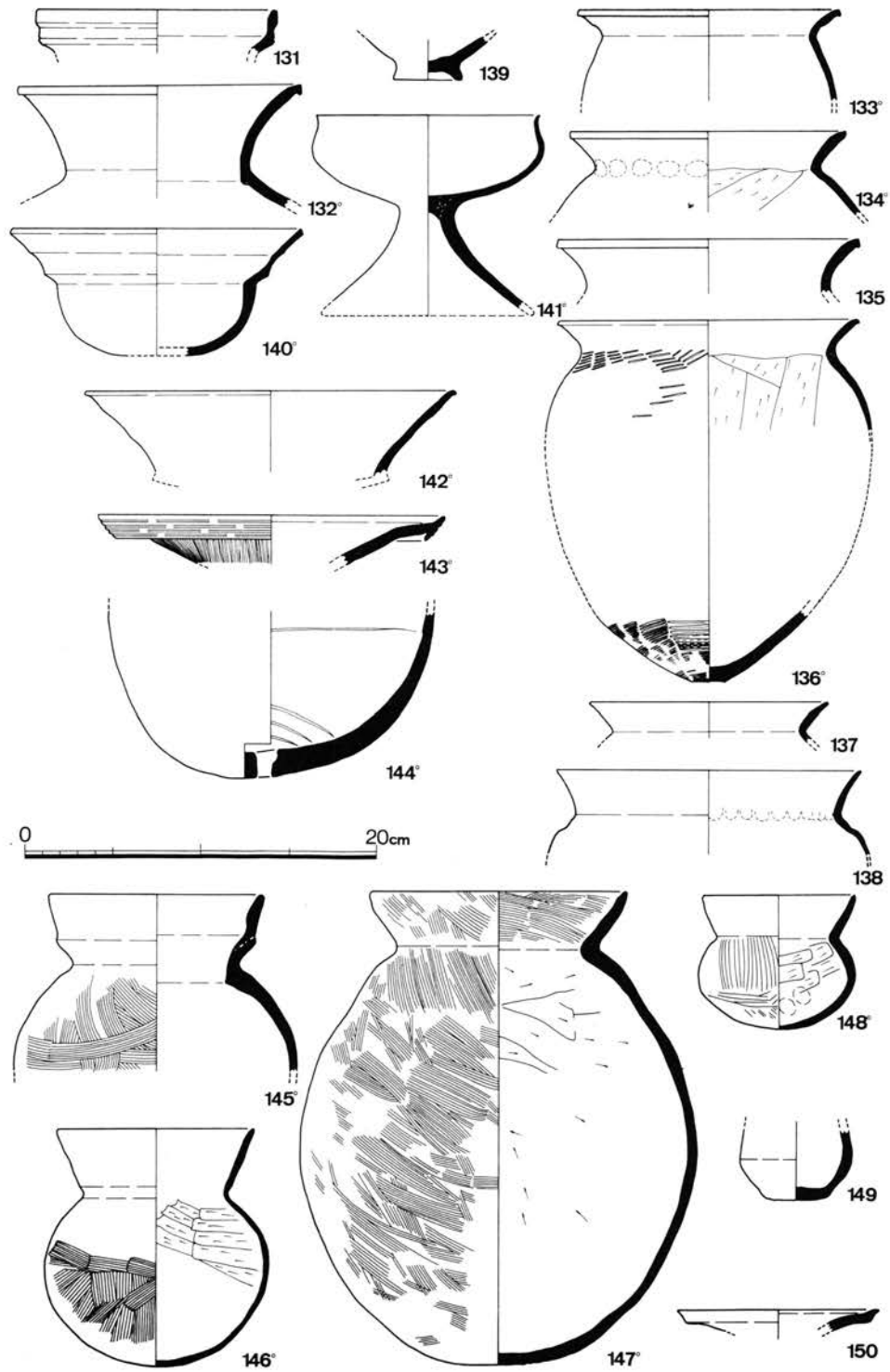


第31图 土器実測図(4)：6号住居跡

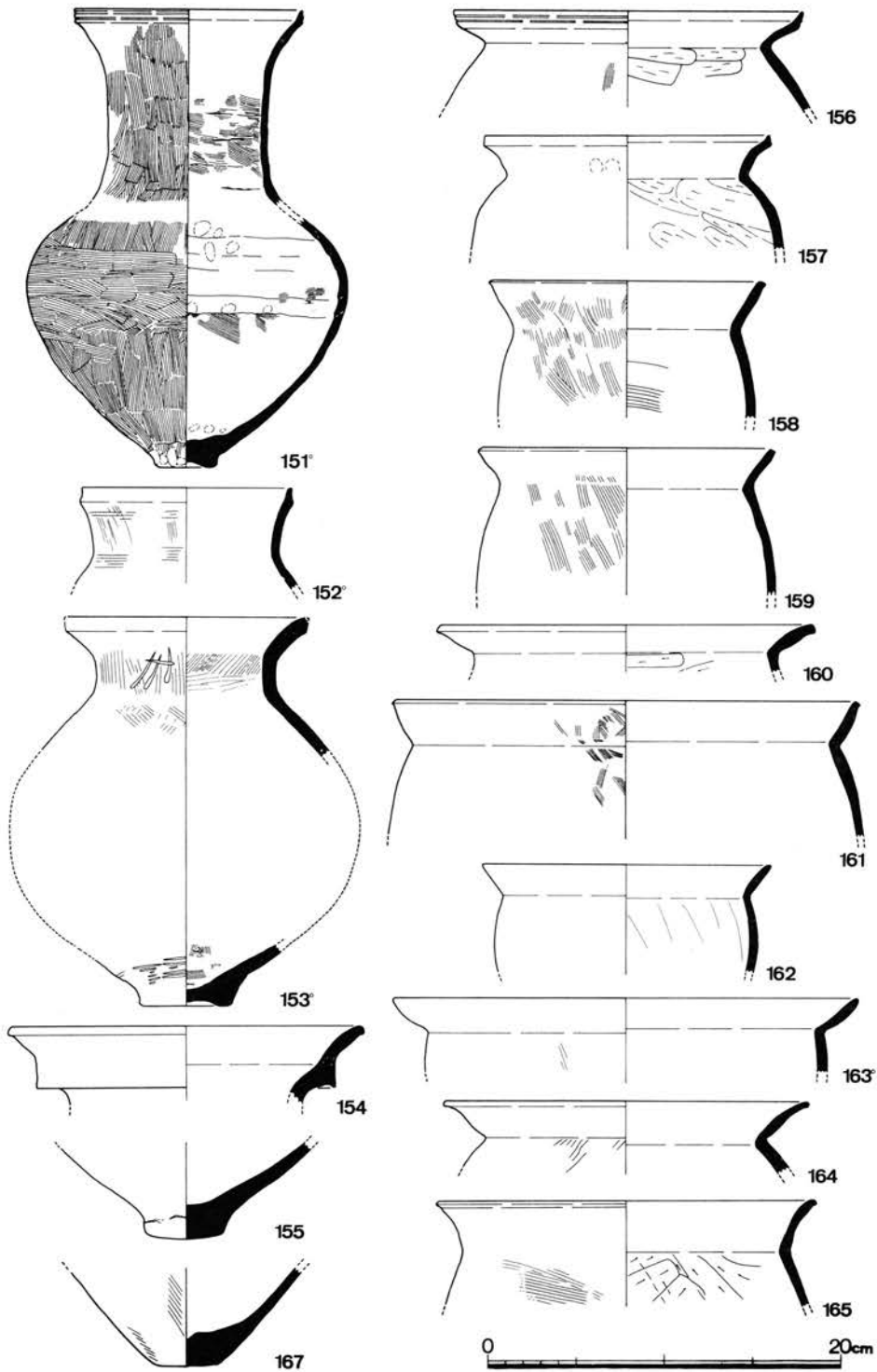


第32图 土器实测图(5): 7号住居跡

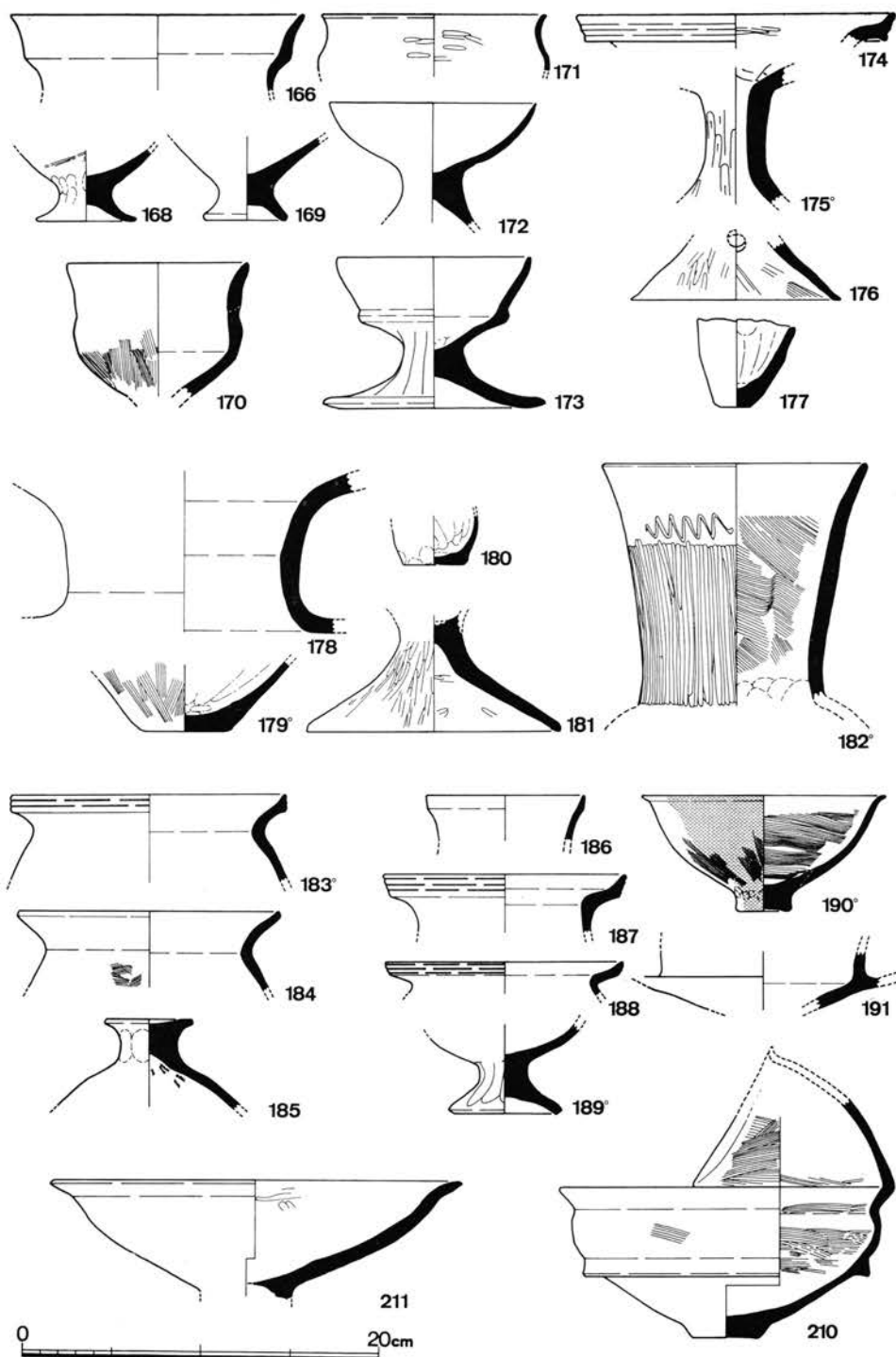




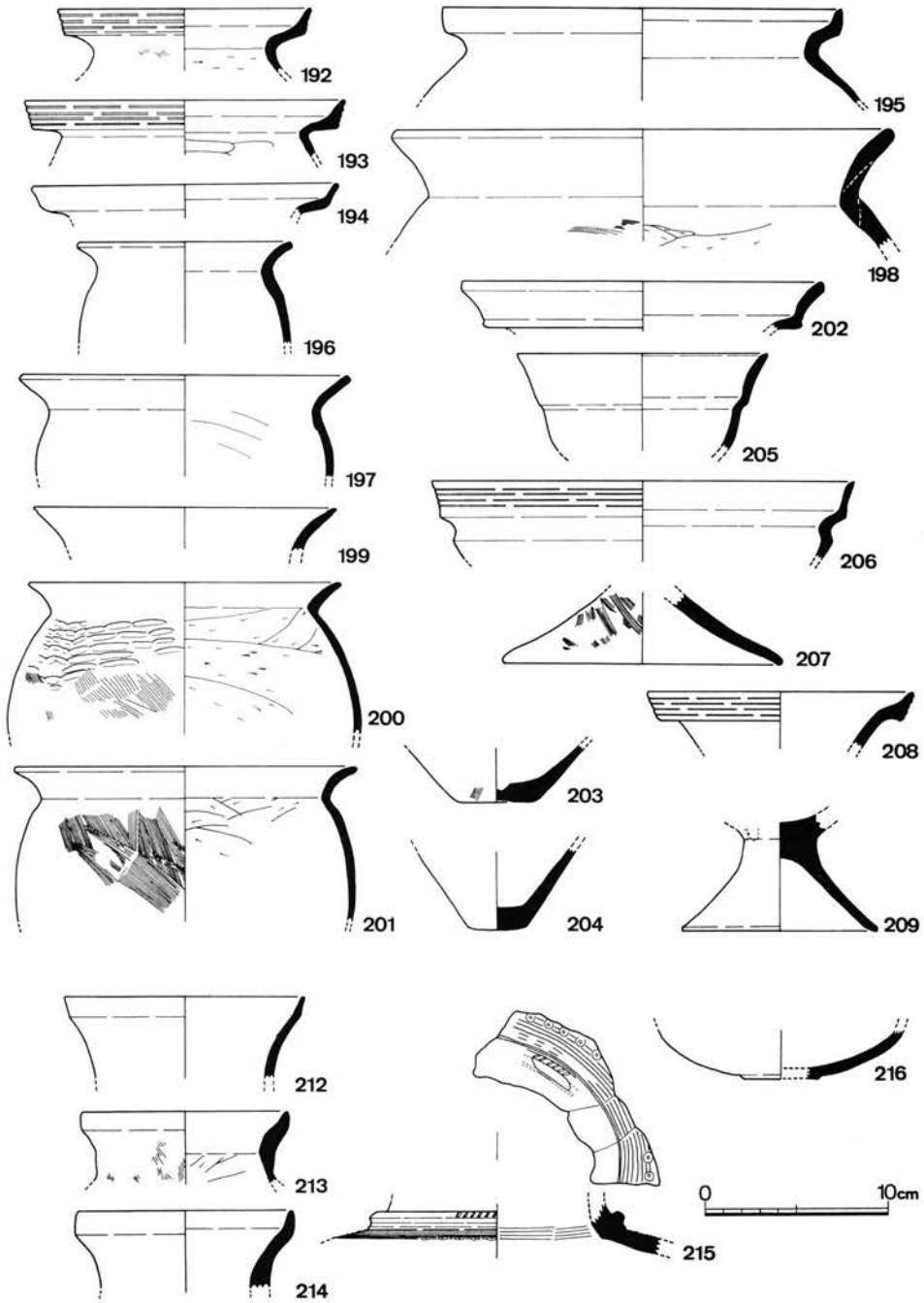
第33図 土器実測図(6)：8号(131~144)・9号(145~150)住居跡



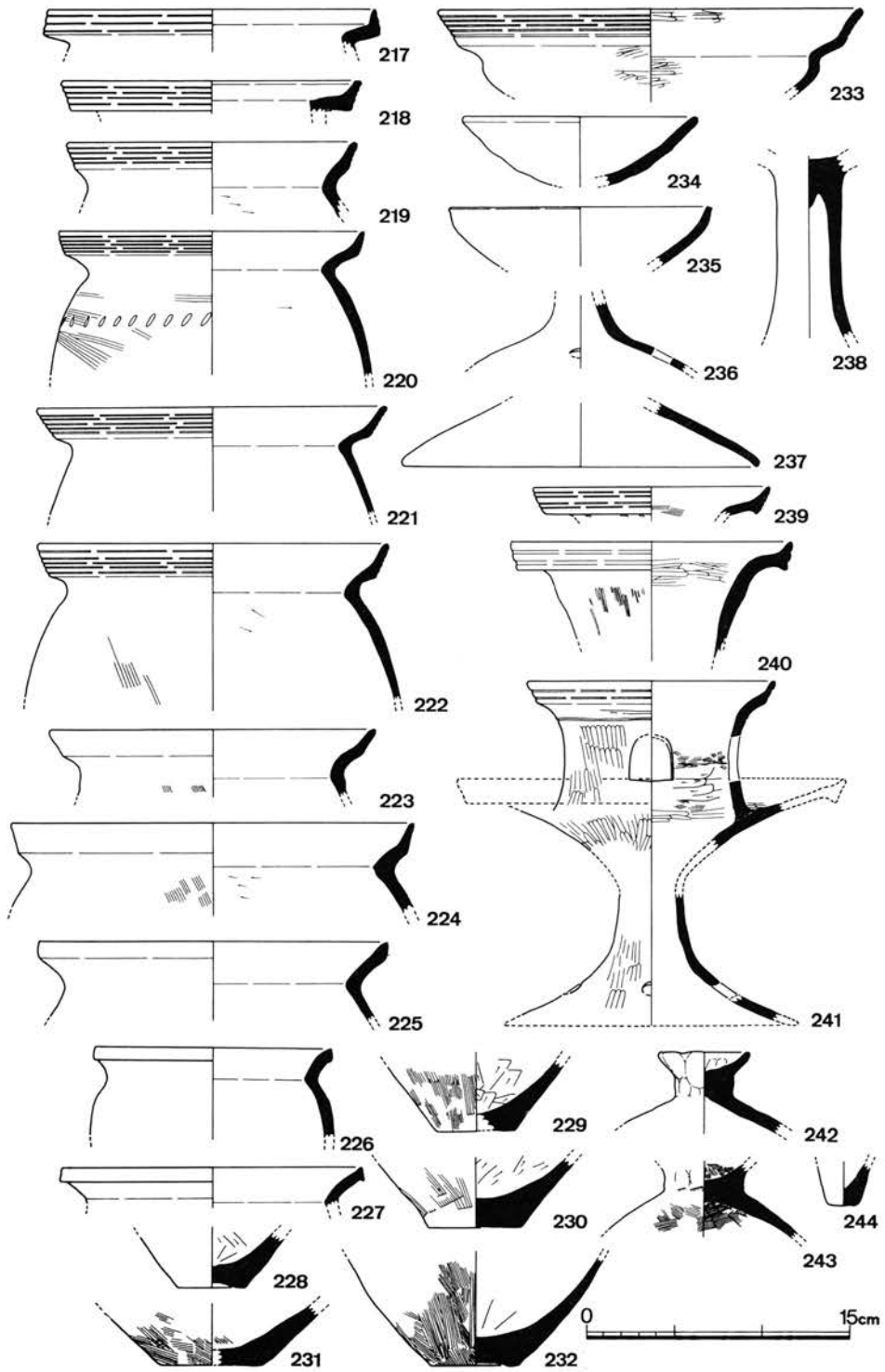
第34図 土器実測図(7)：10号住居跡(その1)



第35図 土器実測図(8) : 10号(166~177)・11号(178~181)・12号(182)・13号(183~185)  
 ・14号(186~191)各住居跡, 土壇2(210)・土壇5(211)



第36図 土器実測図(9)：15号住居跡(192～209)・土塚6(その1：211～216)



第37図 土器実測図(10)：土塚6（その2）

4. 土錘

今回の調査で、土錘は23点出土した。中でも6号住居跡床面の1か所に10個の土錘が集中していた(第9表 a~k, 図版第26, 1)。ほかの地点・層位からの出土例もあわせると、この住居跡から出土した土錘は15点にのぼる。ほかに、1号・3号・5号・10号・15号住居跡からも土錘が出土しているが、各々1点ないし3点程度の出土数である。

土錘は、形態から見て3型式に分類した。

A類は、長軸断面が長い楕円形を呈する形態のものである。太短型。

B類は、長軸断面が細く長い葉巻型を呈する形態のものであるが、壊れやすく、完形例は少ない。細長型。

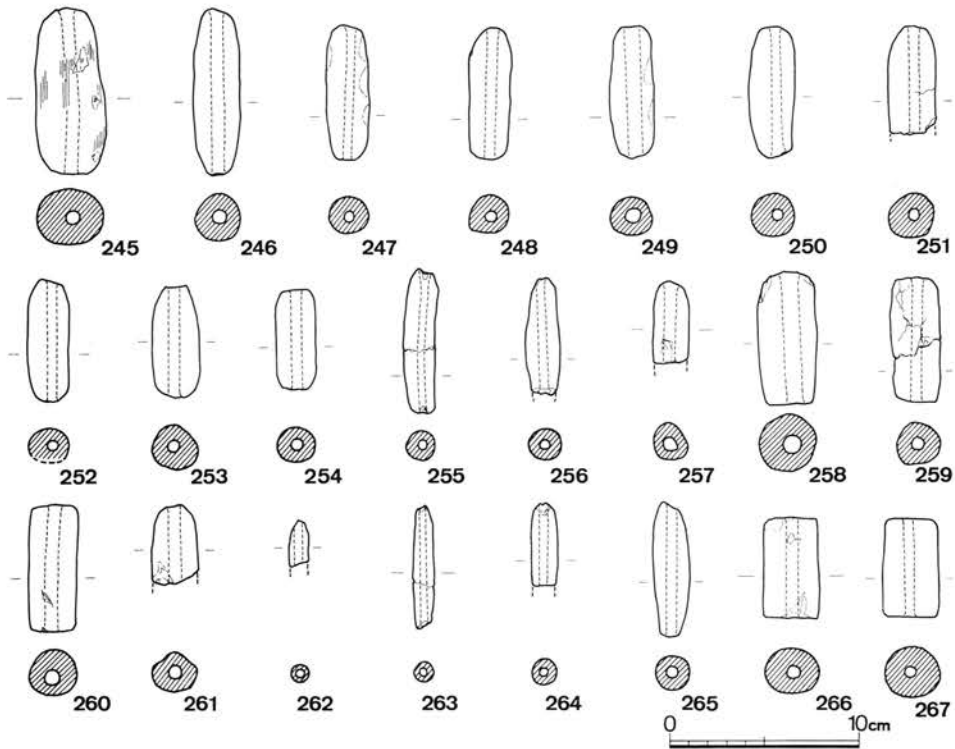
C類は、長軸断面が長方形で、円柱状の形態のものである。

更に、重さによって1~3類に分けた。1類が51g以上で最も重く、以下2類(50~21g)、3類(20g以下)と軽くなる。第9表の観察表には型式の欄にA<sub>1</sub>~C<sub>2</sub>のように記した。破損しているものについては、復原した数値で分類した。

全体として見ると、形態ではA類が多く(11点)、重さは2類が多い(16点)。6号住居跡に限って見れば、A<sub>2</sub>が最多(8点)で、A<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>(各2点)がそれに次ぐ。5号住居跡の3点の土錘は、いずれもB<sub>3</sub>で、胎土はいずれも粗、色調は赤~橙褐色系という共通点が見られる。

番号	出土地	型式	長さ	最大径	重さ	色調	胎土	番号	出土地	型式	長さ	最大径	重さ	色調	胎土
245	6号住居床面 a	A <sub>1</sub>	8.8	3.8	11.2	淡褐色	密	258	床面 d	C <sub>1</sub>	7.1	3.1	175.6	淡灰褐色	密
246	下層	A <sub>1</sub>	8.9	2.4	54.8	黒褐色	密	259	〃 l	C <sub>2</sub>	6.6	2.6	44.6	暗赤褐色	密
247	床面 f	A <sub>2</sub>	7.2	2.3	37.4	淡褐色	密	260	1号住埋土	C <sub>1</sub>	6.8	2.6	55.3	暗灰褐色	密
248	〃 g	A <sub>2</sub>	7.0	2.2	39.8	灰褐色	密	261	3号住中層	A <sub>2</sub>	—	2.4	20.7	淡茶褐色	密
249	〃 i	A <sub>2</sub>	7.0	2.4	40.3	淡褐色	密	262	5号住下層	B <sub>3</sub>	—	1.1	1.6	赤褐色	粗
250	〃 j	A <sub>2</sub>	7.0	2.4	43.8	淡褐色	密	263	〃 中層	B <sub>3</sub>	6.6	1.2	7.4	淡橙褐色	粗
251	上層	A <sub>2</sub>	—	2.5	38.4	暗赤褐色	密	264	〃 上層	B <sub>3</sub>	—	1.4	7.9	淡橙褐色	粗
252	床面 e	A <sub>2</sub>	6.5	2.2	27.8	淡灰褐色	密	265	10号住上層	B <sub>2</sub>	7.2	1.8	23.4	赤褐色	粗
253	〃 b	A <sub>2</sub>	5.9	2.5	32.3	淡褐色	粗	266	〃 下層	C <sub>2</sub>	5.3	3.0	51.8	淡橙褐色	密
254	〃 c	A <sub>2</sub>	5.8	2.1	23.8	淡褐色	密	267	15号住床面	C <sub>2</sub>	5.2	3.0	57.4	淡橙褐色	密
255	〃 h	B <sub>2</sub>	7.7	1.6	22.0	橙灰褐色	密		平均値		6.9				
256	〃 k	B <sub>3</sub>	—	1.8	18.3	淡橙褐色	密								
257	下層	B <sub>2</sub>	—	1.9	16.0	淡褐色	密								

第9表 土錘観察表(単位:長さ・径は cm, 重さは g)



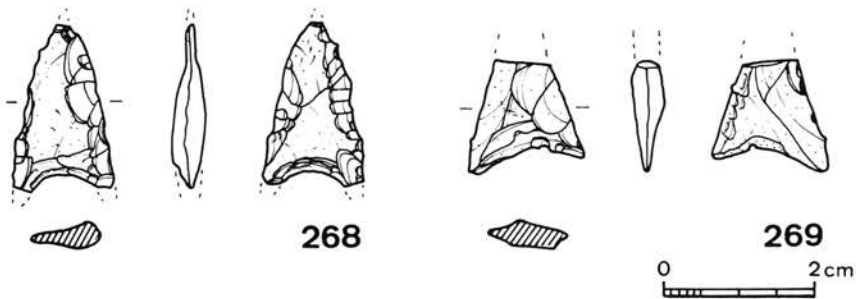
第38図 土錘実測図

### 5. 石器

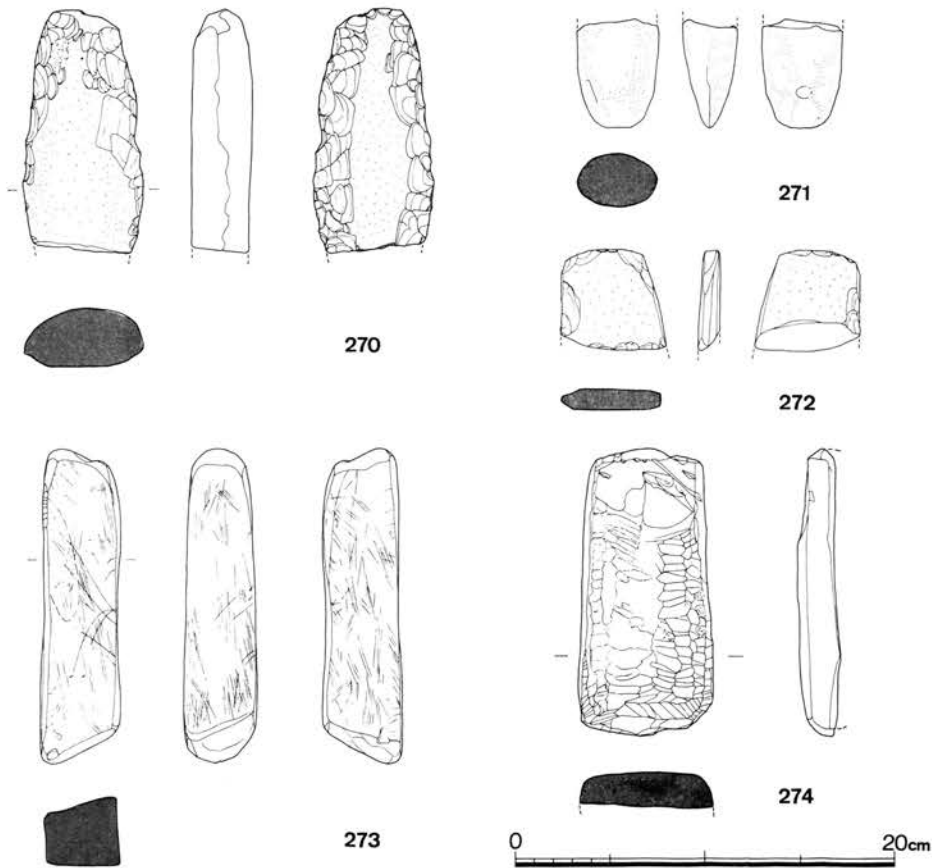
青野西遺跡から出土した石器は5点である。内訳は、石鏃2点、大型蛤刃石斧2点、扁平片刃石斧1点である。

石鏃(268)は、6号住居跡埋土上層から出土した凹基無茎鏃である。現存最大長2.2cm・幅1.4cm・長さ0.5mmを測る。材質はいわゆるサヌキトイドである。

石鏃(269)は、7号住居跡東区床面から出土した凹基無茎鏃である。現存長1.5cm・幅



第39図 石鏃実測図



第40図 石斧・砥石実測図

1. 6cm・厚さ0.4cmを測る。材質はこれもサヌキトイドである。

石斧(270)は、3号住居跡中層から出土したもので、淡褐色の砂岩製である。やや扁平な棒状の川原石を利用し、周縁部に荒い剥離を加えている。表面の大半は自然石と考えられるが、打製か半磨製か判断できない。あるいは、未成の破損品かも知れない。

石斧(271)は、5号住居跡の特殊ピット近くの床面から出土したもので、やや小型の太型蛤刃石斧の刃部片と判断した。淡褐色の粒子の粗い砂岩製である。残存長5.5cm。

石斧(272)は、5号住居跡東南柱穴掘形から出土した扁平片刃石斧である。材質は泥質砂岩で、表裏及び側面の全面が、入念に磨かれている。下半が損失しているが、その割れ口を利用して二次使用したらしい。残存長5.3cm・幅5.5cm・厚さ1.1cmを測る。

## 6. 砥石

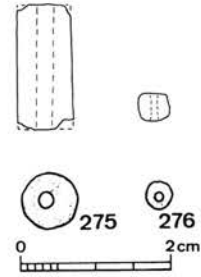
砥石と考えられる石製品が2点出土している。

砥石(273)は、6号住居跡南西の周溝から出土したもので、四角柱を呈する。4面とも砥



石として利用され、各所に見られる痕跡から、鉄器等の金属器を磨いたと思われる。材質は珪質頁(泥)岩で、緻密・硬質である。全長16.4cm・厚さ3.8cm。

274は、5号住居跡の埋土上層から出土したもので、砥石と考えられる。材質は、これも珪質頁(泥)岩である。若干風化し、節理面及び葉理面に沿って割れたものを利用している。正面全体に金属器らしい切削痕<sup>(注10)</sup>が残っている。



第41図 玉類実測図

## 7. 玉類

玉類は2点出土した。

碧玉管玉(275)は、5号住居跡の埋土上層から出土したもので、硬質である。長1.63cm・<sup>(注11)</sup>径0.77cmを測り、寺村氏分類のIIIb型に相当する。表面は風化し、淡緑色を呈するが、断面は濃い緑色である。

ガラス小玉(276)は、12号住居跡の埋土上層から出土したもので、半透明でコバルトブルーの色彩を呈する。中に0.7mm程度の小気泡が見える。孔の長さ0.27cm・径0.43mm max. ×0.41mm min. を測る。

## 第2節 奈良・平安時代の遺物

### 1. 須恵器

自然流路1の河底と溝3から須恵器が出土している。

自然流路1出土の須恵器には277～282があるが、7世紀中頃の蓋(281)を除けば、いずれも奈良時代から平安時代初頭の杯B(277～279)・壺(?280)・皿A(282)である。

溝3出土の須恵器には、杯A(284)・椀A(289)・椀B(285・288)・壺(290)等がある。ほとんどが10世紀に編年される土器である。<sup>(注12)</sup>

### 2. 土師器

自然流路1・溝3・土塚1から土師器が出土している。

自然流路1出土の283は、青野南遺跡で甕Fに分類されている器種である。

溝3出土の土師器(291～299)はいずれも須恵器の椀Aに通ずる形態をもつ椀である。底部はいずれも糸切り痕を明瞭に残している。

皿(302)は、土塚1から出土した唯一の土器である。

### 3. 黒色土器

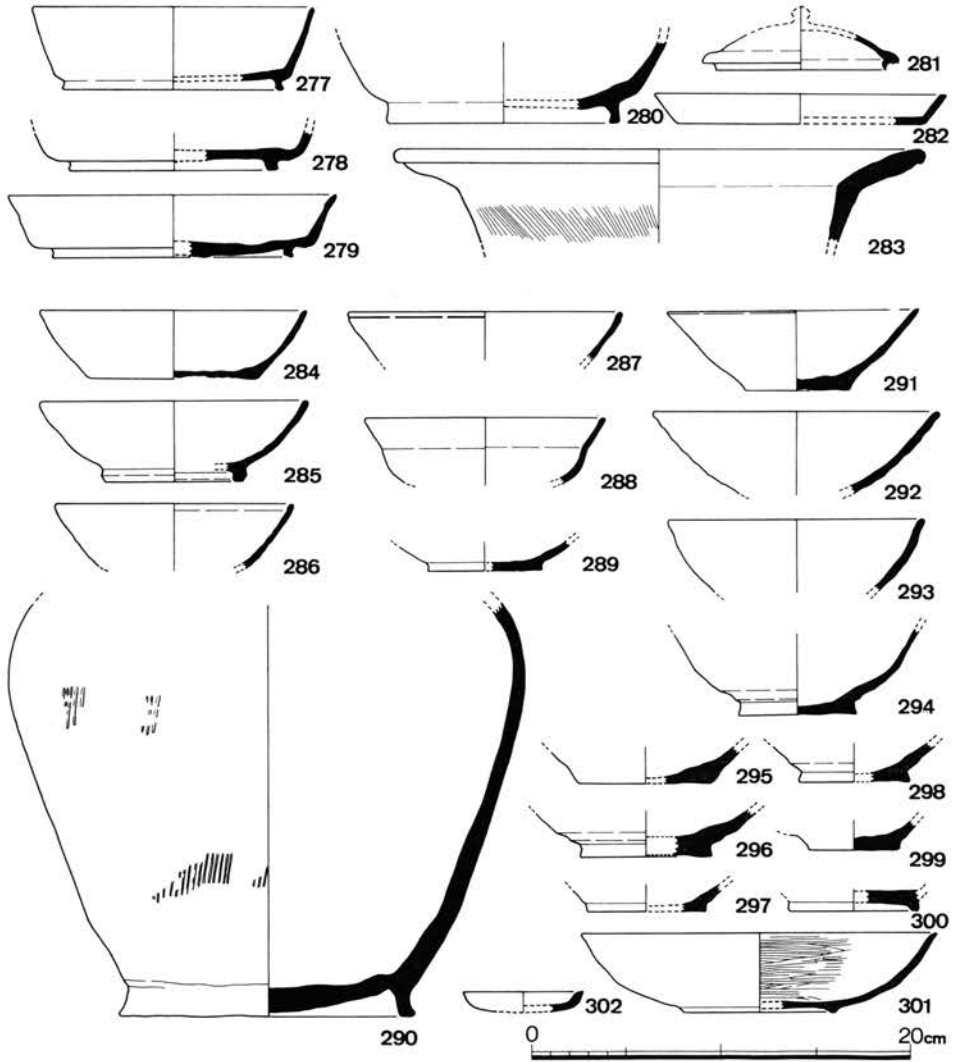
溝3から1点であるが黒色土器が出土している。黒色部は内面から口縁部外面に及びBタイプである。高台は貼り付けである。

器種	遺物番号	法量 (cm)			調整の特徴	胎土	色調	焼成	出土層位	
		口径	底径	器高						
自然流路1出土土器 (第42図277~283)										
須恵器	杯B	277	14.8	11.6	4.4	内外面共横ナデ, 貼付高台	やや粗	淡灰色	良	9トレ43層上面
	B	278		10.8		貼付高台	やや粗	淡灰色	良	9トレ43層上面
	B	279	17.4	12.6	2.4	内外面共横ナデ, 貼付高台	やや粗	淡灰色	良	9トレ43層上面
	壺?	280		12.2		器面ナデ調整, 貼付高台。	やや粗	淡灰色	やや軟	9トレ43層上面
	蓋	281	10.2			横ナデ, 返りオリコミ。	やや粗	淡灰色	良	9トレ43層上面
	皿A	282	15.4	12.8	1.6	横ナデ。	密	淡灰色	良	9トレ43層上面
土師甕	283	27.6			体部外面ハケ, 他はナデ。	粗	淡赤褐色	良	9トレ43層上面	
溝3出土土器 (第42図284~301)										
須恵器	杯A	284	14.2	9.0	3.6	水ビキ, 底部ヘラ切り。	やや密	乳灰色	普通	溝3a ⑦層
	椀B	☆285	14.2	7.4	4.3	水ビキ, 外面ヘラケズリ。	密	乳灰色	軟	溝3a ⑦層
	椀A	286	12.4			水ビキ。	密	乳灰色	軟	溝3a ⑦層
	椀A	287	14.4			水ビキ。	密	淡青灰色	良	溝3a ⑦層
	椀B	288	12.6			水ビキ。	密	乳灰色	やや軟	溝3埋土
	椀A	289		6.0		底部回転糸切り	密	淡青灰色	良	溝3b ③層
土師器	壺	290		15.6		タタキ後ケズリ, 内面ナデ	密	暗青灰色	良	溝3a ⑦層
	椀	☆291	13.1	5.5	3.6	内外面横ナデ, 底部糸切り	粗	橙褐色	やや軟	溝3a ⑦層
	椀	292	15.0				密	橙褐色	普通	溝3a ⑦層
	椀	293	13.4				密	淡茶褐色	普通	溝3a ⑦層
	椀	294		6.2		底部糸切り	密	淡橙褐色	良	溝3a ⑦層
	椀	295		7.0		底部糸切り	密	淡橙褐色	普通	溝3b ③層
	椀	296		7.0		底部糸切り	密	淡橙褐色	良	溝3埋土
	椀	297		6.2		底部糸切り	密	淡橙褐色	普通	溝3埋土
	椀	298		5.9		底部糸切り	密	橙褐色	普通	溝3a ⑦層
	椀	299		4.9		底部糸切り	密	橙褐色	普通	溝3a ⑦層
緑釉椀	300		6.8			密	暗黄緑色	軟質	溝3a ⑦層	
黒色椀	301	18.8	8.0		内面ミガキ, 外面ナデ。	密	内面黒, 外面茶褐色	普通	溝3a ⑦層	
土塚1出土土器 (第42図302)										
土師皿	302	6.4		1.2	ナデ調整	密	淡褐色	良好	土塚1北西下層	

第10表 奈良・平安時代の土器観察表

4. 緑釉陶器

溝3から唯一点出土した底部片(300)である。精良な胎土の軟質の焼成である。



第42図 土器実測図(1) 自然流路1 (277~283)・溝3 (284~301)・土塚1 (302)

## 第4章 考察

### 第1節 青野西遺跡の古式土師器

#### 1. 編年の前に

青野西遺跡から出土した土器は、奈良時代以降の少数の土器を別にすれば、弥生時代後期から古墳時代前期の土器で占められる。本遺跡で、編年作業の対象となるに足る質と量の土器が出土した遺構は、遺物の少ない数棟を除く各住居跡と土塚6である。編年に際しては、各住居跡の床面及び最下層から出土した土器と、土塚6のように単一層から出土した土器を資料とする。なお、本遺跡では、各時期の遺構が同一面で検出されており、また、埋土の層位別の土器の差が質的・量的に検証できる遺構もないので、層位学的新古関係は、遺構の切り合い関係がこれに相当する。

#### 2. 弥生時代後期の土器

12号住居跡から出土した唯一の土器、長頸壺(182)は、畿内第5様式前半に特徴的な土器である。また、この遺跡で数点出土した甕A<sub>1</sub>(220)や高杯H(70)は、丹後を中心とする編年で後期前半から中頃に位置づけられており、5号や15号住居での細片の存在は混入と見なすことができる。従って、12号住居は、弥生時代後期の遅くとも中頃には位置づけられ、この遺跡の今回調査の最古相と出来よう。

#### 3. 布留式土器

4号及び9号住居跡の土器は、いずれも布留式(須恵器出現以前の謂)の中相に位置づけられ、切り合い関係でも両住居跡は最も新しい時期のものであり、この集落の下限と出来る。9号住居跡を切る土塚5の高杯も同時期の土器であろう。なお、いわゆる布留式甕は、青野遺跡でも少なく、本遺跡でも口縁部の細片が4号及び2号住居跡の埋土から出土しているのみである。

#### 4. 「青野西式土器」の設定

本遺跡から出土した土器の大多数は、上述した2時期の間に入り、しかも青野遺跡A地点の第16号(円形)住居跡よりも新しい。この住居跡は、甕A<sub>2</sub>・本遺跡のA<sub>1</sub>よりも古式の高杯・くびれ部のにふい長頸壺(本遺跡の186より確実に新しい)等の顕著な存在によって、弥生時代後期に位置づけられよう。従って、本遺跡の最盛期の土器こそ、当地の「布留式以前」の様相を明らかにし得る土器群と考えられるのである。そこで、青野西遺跡の1号・3号・5号・6号・7号・8号・10号・15号の各住居跡及び土塚6の土器を標式として、「青野西式土器」を設定した。土器相の変遷の流れで言えば、弥生時代後期の擬凹線に象



徴される丹後系を主体とする土器群(壺A・B, 甕A・B, 鉢A・B, 高杯A・B, 器台A・B)に、庄内式期とされる畿内系の土器(壺C・D, 甕C・D, 鉢D・E, 高杯C・D・E, 器台D・E)が加わり始めてから、次第に後者が前者を圧倒して行き、最後に布留式にとって替られる直前までの土器を「青野西式土器」と呼ぶ訳である。「古式土師器」という用語の定義には諸説があるが、筆者は上記の畿内系ないし外来系の土器を古式土師器と呼びたい。そして、共伴する丹後系ないし在地の土器は、前代の土器と区別できないのであるから、あくまで後期弥生土器であろう。いずれにしても、両者が共存する点が「青野西式土器」の様相なのである。

「青野西式土器」は、丹後系がまだ主体となっている段階と、畿内系がこれを圧倒してしまっている段階にかなり明確に分けることが出来、前者を「青野西Ⅰ式」、後者を「青野西Ⅱ式」とする。以下、各段階の土器群の様相をまとめてみたい。

## 5. 青野西Ⅰ式

3号及び6号住居跡と土塚6の土器群が標式となる。青野遺跡第4次調査のXII地点トレンチ2(35U06地点)の住居跡床面の一括資料もこの時期に位置づけられ、以下の計数に加えている。<sup>(注14)</sup>土塚6は3号住居跡の下層であり、層位的には時間差があるが、土器では識別できない。

壺では、短頸壺B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>が主体をなし、これに二重口縁のD<sub>1</sub>が加わる。

甕はⅠ式に39点を数え、うち19点(49%)が擬凹線甕A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>、9点(23%)が擬凹線を失った甕Bであり、これら丹後系の甕が72%を占めている。これに対して、畿内系の「く」の字状口縁の甕Dは7点(18%)に過ぎない。甕Dのいくつかには、タタキを残すものがある(92・93)。なお、甕の底部は10個体で確認しているが、8点までが平底で、突出平底と尖底が1点ずつある。

鉢はB<sub>1</sub>が最も多く(44%)で、これは弥生後期後半の青野A地点第16号でも4点報告されている型式でもある。ほかにA・D<sub>1</sub>が各2点ある。弥生系が圧倒的に多い。

高杯は全体に少ないが、中でも低脚高杯Cの4点が目立つ。ほかに、弥生以来の高杯A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>が各1点ある。

器台も少ない。擬凹線を施すA<sub>1</sub>が2点、装飾器台が2点あり、小型器台Dも4点を数え、在地系と外来系が拮抗しているように見えるが、在地系器台を3点出土している土塚6に小型器台が1点もないという事実も見逃ごせない。

ほかに蓋が2点、ミニチュア土器が4点ある。

このように青野西Ⅰ式の土器相は、弥生後期以来の丹後系土器を主体とし、甕D・低脚高杯C・小型器台D等の古式土師器が少数ながら共伴していると言える。畿内以外からの

外来系土器としては、6号住居跡に北陸月影式に似た甕の口縁(90)や山陰の5の字状口縁の甕がある。明らかに搬入土器と思われるものとして6号住居跡の近江産(?)の甕(91)と、これとほぼ同質の胎土をもつ青野35U06住居の鉢がある(第43図33)。

14号住居跡も資料は少ないが、ほぼ青野西I式と思われる。

## 6. 青野西II式

2期に細分出来るようである。II式古相は5号及び10号住居跡の土器群、そしてII式新相は15号・8号・7号住居跡の土器群が標式となろうが、この細分は、後述する住居跡の検討(79頁)や一括資料の統計的処理から導かれる要素が多く、土器個々の観察からは判断できない。従って、以下の記述は青野西II式全体に関するものであり、古相・新相の差は、特にそれが顕著に現われている場合にのみ触れることにする。上記の標式遺構のほかに、青野遺跡第6次SB8117出土土器も青野西II式と判断され、以下の計数に加えている。<sup>(注15)</sup>

壺は、二重口縁の壺D<sub>1</sub>が最も多く(6点)、加飾されたD<sub>2</sub>も含めると40%を越える。ほかは少数で、広口壺C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>が各2点ずつある。丹後系のB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>は稀になり、特にII式新相になると混入とも考えられる小片1点(131)のみである。

甕はII式でもI式と同じく39点を数えたが、丹後系のA・Bは両者合わせても9点で、わずか23%を占めるにすぎなくなっており、特に擬凹線を施す甕AはII式古相の3点を最後に姿を消してしまふ。これに対して、甕Dは25点を数え、64%を占める。タタキ目を外面に残す甕はI式よりも増え、特にII式古相に集中する。外面調整の最も多いのはハケであり、内面はケズリが多く、ともに甕Dの半数を占める。ほかに山陰系の口縁をもつ甕EがII式になって増えており、また胎土から明らかに河内産の庄内甕(64)が5号住居跡の埋土中層から出土している。甕の底部は10個体で確認しているが、8点までが尖底になっている。

鉢は、各型式がまばらに出土しており、傾向をつかみにくいが、弥生後期以来の鉢Aが全くなくなり、B<sub>1</sub>が激減する。しかし、これらに代る型式が見当たらない。

高杯においても擬凹線を有するものが少なくなり、代って畿内系のE<sub>1</sub>・E<sub>2</sub>がある。しかし、多数を占めるのはI式以来の低脚高杯Cと、新たに出現した高杯Bである。後者は、畿内系ではないが、何故かII式になって初めて現われる土器で、類例は丹後に多い。

器台では、I式とII式の差はほとんど表われていない。擬凹線を施す器台Aは存続し、小型器台Dと共伴する。器台Cは、高杯Bと同じくこれも畿内系ではないが、II式になって出現し、直ちに姿を消す土器である。小型器台は、II式新相になって脚部が真っ直ぐ開くE型式が現われ、布留式に受継がれて行く。

蓋はほとんどないと言ってよいが、7号住居跡の小型の蓋(129)は精製の美しい土器であ

る。また、ミニチュア土器はII式では出土例が少ない。

以上の青野西II式の土器相をまとめてみると、丹後系の土器が減少し、畿内系土器の占める比率が急増し、古式土師器が土器の主体を占めるに至ったと言えよう。

### 7. 青野西式土器の畿内との併行関係

青野西式の土器群は、庄内式期の畿内系土器の当地での出現を以ってその上限とした。青野西式の最も古相を示す土坑6の土器群の26点の中には、低脚高杯(234~237)と、キザミ目をもつ突帯や竹管文で加飾した壺(多分D<sub>2</sub>)が含まれ、これらはともに畿内では纏向1式期に出現している<sup>(注16)</sup>。また小型器台D<sub>2</sub>は6号住居跡(101・102)と青野35U06住居跡から出土しており、これも畿内では纏向1式期に突然現われる土器である<sup>(注17)</sup>。更に、6号住居跡には甕C<sub>1</sub>(86)・C<sub>2</sub>(87)があり、くの字状口縁の端部を上につまみ上げる点など、庄内式土器の影響を受けているとも見られよう。

畿内の土器との併行関係を考える際、青野西II式土器群の中で最も注目されるのは、5号住居跡出土の庄内甕(64)である。この搬入土器が出土した埋土中位は、この住居跡の埋土の大部分を占める土層に相当し、一部床面をも覆っている。また、この住居跡出土の遺物の中で明らかに混入と思われる2,3点の土器(52・71)を除けば、埋土上・中層に含まれていた土器も、床面や下層の土器との時期差は小さく、遺構埋没年代に近い時期と考えられる。この庄内甕は、南河内の胎土で作られ、細い右上がりのタタキ目をハケで消した痕跡が見られる庄内河内型であり、纏向3式古段階に相当する<sup>(注18)</sup>。従って、青野西II式古相と畿内のこの時期が併行していたものと考えたい<sup>(注19)</sup>。

青野西II式新相の7号住居跡の床面で検出した鉢F<sub>1</sub>(122)は、口縁部上方に3本の櫛描き線と列点文、下方に6本、体部に多数の櫛描きを巡らせる特異な土器であるが、肉厚で底部が凹み底であるにも拘らず、全体として布留式の小型丸底壺に通ずる形態を呈している。7号住居跡のほかの土器には布留式傾向は全くと言って良い程見られないが、時代は既に布留式期に入っていたとも考えられる。

### 8. 青野西式土器の丹後との併行関係

丹後地方で青野西式と併行すると考えられる資料は、橋爪遺跡<sup>(注20)</sup>(第1次)・林遺跡5号住居跡・同3号住居跡<sup>(注21)</sup>・古殿遺跡SE03・SD04・CトレンチIII層等の土器群である。壺B・D、甕A<sub>3</sub>・B<sub>1</sub>・D、鉢A・H、高杯A・B、器台A・D等を主体とし、いずれも丹後の後期弥生土器に畿内系古式土師器が加わった様相を呈している。丹後地方の後期弥生土器の編年は、竹野郡大山遺跡<sup>(注23)</sup>・熊野郡橋爪遺跡<sup>(注24)</sup>・中郡古殿遺跡等の好資料を主体として近年長足の進歩が見られたところであるが、編年規準の中心となっている甕で言えば、口縁に擬凹線を有する甕(本報告書の甕A)のA<sub>1</sub>→A<sub>2</sub>→A<sub>3</sub>という漸進的変化の後、A<sub>3</sub>に擬凹



線を施さない甕 B が加わり始める時期から、布留式土器が急増する古殿遺跡 D トレンチ II 層の直前までの間に、青野西式土器併行の丹後の資料を求めた訳である。

上記の土器群は、甕 A<sub>s</sub> と B の比率によって、2 時期に細分できるようにも思われるが、層位的に新旧関係が押さえられている古殿遺跡では、公表された資料による限り、これを裏切っており、また住居跡の資料も床面上の遺物と埋土中の遺物の区別が曖昧で、丹後のこの時期の資料に包含層出土例が多いことも合わせ、詳細な編年作業に支障を来たしている。一般的に丹後では、弥生の伝統が強い点を指摘できるが、古殿遺跡では中丹地域よりも、畿内と直結していたようにも思われる。これに対して、畿内の布留式古段階に併行するべき綾部地方の土器には、青野西 II 式新相の後にヒアタスがあるように見える。

最後に、丹波・丹後を中心に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての最近の代表的な編年案との対比を第12表に示す。共通の時期区分として I～VI 期を設定し、更に小区分として a, b を付した。もとより試案の域を越えるものではないが、青野西遺跡の土器の整理と考察の副産物として、ここに掲げ、先学諸氏の叱正を請う次第である。

時期 区分	北部 九州	山 陽	山 陰	北 陸	丹 後 (丹後半島)			中 丹 (由良川中・下流域)		畿内
					熊 野 (橋爪)	竹 野	中(古殿)	加佐・天田	何 鹿	
I	a	後 期 中 頃	プ ロ ト 上 東	青 木 II	猫 橋 I		大山 III a 期	宝蔵山 3 号墳 宝蔵山 2 号墳		V-1
	SD 21 III					大山 III b 期	水無月山土塚 2 水無月山土塚 1		V-2	
II	a	後 期 後 半	上 東	青 木 III 古	法 仏 I		大山 III c 期	D トレ V 層	青野西 12 号住居	V-3
	SD 21 II									
III	a	後 期 終 末	エ ピ 上 東 酒 津	的 場 ・ 平 所	法 仏 II		大山 III d 期	狸谷 3 号墳	青野 A 地点 16 号 住居跡	V-4
						岡城山新相	SX11			V-5
IV	a	西 新 式	酒 津 エ ピ	青 木 V ・ VI	月 影 I 月 影 II		林 2 号住居 林 5 号住居	狸谷 17 号墳	青野西 I 式	庄内 I
	1 次調査 I M 区					林 3 号住居	SE03 SD04			
V	a	IIb	亀 川 上 層	青 木 VII 古	古 府 ク ル ビ		C トレ II 層 下面		?	布留 I
							D トレ II 層		青野西 4 号住居 青野西 9 号住居	布留 II

第12表 丹後・中丹の土器編年対照表

青野西 I 式	青野西 土城6 6号住 3号住	壺 A1,2 B1,2 D1,2	甕 A2,3 B1 C1,2 D1	外来系土器 搬入土器 甕E
	青野 35 U 06住居跡			G H
青野西 II 式	青野西 5号住 10号住 1号住	C1,2		甕E
	青野(AN) SB8117 青野西 8号住 7号住		B2	鉢C1
	布留式 青野西 4号住 9号住	F G	F	壺E

第43図 青野西遺跡出土古式土師器編年試案(1) 壺・甕・外来系土器

青野西	青野西 土坛6	鉢 A 26	E <sub>1</sub> 27	高杯 A <sub>1,2</sub> 233	C 235 236 237	器台 A <sub>1,2</sub> 100	B 241	D <sub>1,2</sub> 101 102	蓋 242 243 244	ミニチュア 土器 180
	6号住	B <sub>1</sub> 95	D <sub>1,2</sub> 98							
	3号住	94	96	190						
I式	青野 35 U 06 住居跡	28 25	B <sub>2</sub> 38	28 27	H 32	35		36		34 39
	青野西 5号住 10号住	168 170				7 66 67 171 172	E 70	174	73 8	177
II式	青野(AN) SB8117 青野西		E <sub>2</sub> 18 AN	17 AN						
	8号住 7号住	119 120	F <sub>1</sub> 122	G 113		141 124 142 125	D <sub>1</sub> 127	C 126	209 128	129
布留式	青野西 4号住		F <sub>2</sub> 148							
	9号住		36			F 39		38	150 43	35

第44図 青野西遺跡出土古式土師器編年試案(2) 鉢・高杯・器台他

## 第2節 竪穴式住居に関する二、三の問題

### 1. 竪穴式住居の形態と変遷

青野西遺跡で検出した竪穴式住居跡は15棟を数えるが、平面形によって分類すれば、円形が1棟(ほかに推定円形が1棟ある)、隅丸方形が5棟、方形が8棟(うち1棟は長方形)となる。床面積で規模を測って分類すれば、10~30m<sup>2</sup>の小型クラスの7棟、40m<sup>2</sup>前後の中型クラスの5棟、60m<sup>2</sup>前後以上の大型クラスの3棟の3群に分けられる(1辺の長さしか知られないものは、単純に自乗した)。また、方位も、4~5群に分けられるようである。以上の平面形・規模・方位は、後述するように住居跡の時期と密接に関連しているらしい。

前節で見たように、15棟の住居跡は土器相からは、弥生後期中頃・青野西I式・同II式・布留式の4期に分かれるが、切り合い関係によって青野西I式・II式はそれぞれ2期に分けられるはずである。

青野西I式の土器を出す遺構(3号・6号・11号・14号・土塚6)では、土塚6と3号住居跡が切り合っており、前者が古い。しかし、土器を見る限り、両者の差異はほとんどなく、わずかに土塚の甕底部5点のすべてが平底であるのに対し、3号住居跡の1点が尖底である点が挙げられるに過ぎない。青野西I式の住居跡の平面形は、円形と隅丸方形の2種類である。後述するように(83頁)特殊ピットが住居の入口にあるとすれば、3号住居跡の軸はN90°Wの方向を示す。また炉が住居の中心よりもやや奥にあると想定すれば、6号住居跡はN97°Wの方向を持ち、ほぼ一致する。11号住居跡も根拠はないが東に入口があるとすればN74°Wの方向を持つことになる。青野西I式の4棟の住居跡は、配置を見ても同時期として一応矛盾がない。土塚6の埋没後間もなく、円形住居2棟(大型と中型)と隅丸方形住居2棟(大型と中型)が住居群を成していたものと見ておく。

青野西II式の住居跡は、古相の1号・5号・10号・13号住居跡、新相の7号・8号・15号住居跡の合計7棟である。古相の4棟のうち、2棟が隅丸方形、残り2棟が方形で、前者が大・中型であり後者が小型である。軸方向は、13号がN8°Wを示すが、ほかはいずれもN6°E~N13°Eである。

青野西II式新相の住居跡はいずれも方形であり、中型の7号以外は小型である。軸方向は、N27°W~N51°Wを示している。

以上の結果から、15棟の竪穴式住居跡を古いと推定したものから順にデータを整理したのが第13表である。括弧内の数字は推定値・復原値を示す。軸方向が45°以上傾いているものには炉や特殊ピットの位置によって軸を推定したもののほかに、同時期の例によって恣意的にそうしたものがある。特殊ピットの項の◎は礎敷を示す。

時期	住居番号	平面形	規模 (m, m <sup>2</sup> )			床面 絶対 高さ (m)	壁残 存高 (m)	軸方向	周 溝	炉	特殊 ピット	土器相	
			クラ ス	東西	南北								面積
第1期	12号住居	隅丸方形	中型	6.4	6.1	39.0	35.6	0.10	N125°E	○	○	×	弥生後期中頃
第2期	6号住居	円形	大型	8.7	8.6	58.7	35.6	0.12	N97°W	○	○	○	青野西Ⅰ式
	14号住居	円形(?)	中型	(7)	(7)	(38.5)	35.5	0.10	?	×			青野西Ⅰ式か
	3号住居	隅丸方形	大型	8.4		(70.6)	35.4	0.34	N90°W	×	○	◎	青野西Ⅰ式
	11号住居	隅丸方形	中型	6.0	6.0	36.0	35.6	0.17	N74°W	×			青野西Ⅰ式か
第3期	1号住居	隅丸方形	大型	7.8		(60.8)	35.4	0.28	N13°E	○			青野西Ⅱ式
	5号住居	隅丸方形	中型	6.5	6.5	42.3	35.4	0.26	N 6°E	○	×	◎	青野西Ⅱ式古
	10号住居	方形	小型	4.9	4.5	22.1	35.4	0.30	N13°E	×		○?	青野西Ⅱ式古
	13号住居	方形	小型	3.5		(12.3)	35.4	0.20	N 8°W	○			青野西Ⅱ式
第4期	15号住居	方形	小型	3.4		(11.6)	34.9	0.70	N51°W	○			青野西Ⅱ式新
	8号住居	方形	小型	4.4	4.2	18.5	35.7	0.10	N27°W	○	○	○○	青野西Ⅱ式新
	7号住居	方形	中型	6.8	6.3	42.8	35.4	0.32	N44°W	○	×	◎	青野西Ⅱ式新
第5期	2号住居	方形	小型	4.0		(16.0)	35.6	0.11	N 1°W	×			布留式か
	9号住居	方形	小型	5.3	5.0	26.5	35.6	0.12	N 8°W	○	×	×	布留Ⅱ式
	4号住居	長方形	小型	5.3	4.4	23.3	35.5	0.12	N39°W	×	×	×	布留Ⅱ式

第13表 時期別竪穴式住居跡一覧表

先に土器に関して丹後系から畿内系への変化、すなわち弥生土器から土師器への変化の  
 画期が青野西Ⅱ式にあることを見たが、住居の変遷においてもこの時期、つまり青野西第  
 3期にあることが表から読み取れる。すなわち、大型・中型の隅丸方形の住居が混在して  
 いた第1期・第2期に対して、第3期には方形が現われ、以後方形住居に定形化する。規  
 模においても7号住居が中型であることを別にすれば、10号以下すべて小型化してしまうの  
 である。畿内では庄内式期の住居が小型化すると言われているが、本遺跡ではそれが1時  
 期遅れており、土器の畿内化とはほぼ同時期であるのも示唆的である。何か社会的背景の  
 大きな変化があったようである。なお、12号住居跡は現在のところ青野周辺で検出された最  
 古の(隅丸)方形住居である。畿内でも円形から方形への過渡期は弥生後期中頃にあり、後  
 半になって方形に定まって来るが、案外古くから当地域にも方形住居が現われたことを指  
 摘しておきたい。以上の住居形態の変化と出土土器によって、青野遺跡で過去に調査され  
 たいくつかの住居跡に時期を与えてみると、A地点の11号住居跡が青野西第3期、第2次  
 I地点のH<sub>1</sub>が同第4期に比定できよう。

## 2. 周堤について

竪穴式住居には、竪穴を掘った際の排土処理を兼ねると同時に、住居内空間を上方に拡  
 げるために竪穴の周囲に周堤が設けられていた可能性を都出比呂志氏が指摘され、様々な  
 例証がなされている。<sup>(注27)</sup> 青野西遺跡では今回2棟の住居において、周堤に関する知見が得ら

れた。

報告したように(22頁)6号住居跡は焼失したと考えられるが、周壁溝から住居内へ倒れたと思われる木炭化した板材を検出した。長さは、最大のもので1.2~1.3mを測る。これは、周堤の内壁が板壁になっていて、その羽目板が火災時に燃え、住居床面に倒れ込んだと見られるのである。ここで都出氏が示された周堤体積と堅穴部分の排土の関係式： $h\pi\{(r+w)^2-r^2\}=d\pi r^2$  (h：周堤の高さ、d：堅穴の深さ、r：円形住居の半径、w：周堤の幅)を利用して、この円形堅穴式住居の旧状を推定してみると、深さ  $d=\frac{(l-d)(2rw+w^2)}{r^2}$  であるから(lは羽目板の長さ、すなわち床面から周堤上端までの高さ)、既知のデータとともに、周堤幅を1mと仮定して代入すると、 $d=\frac{2rwl+lw^2}{2rw+w^2+r^2}\div 0.444$ の数値が得られる。つまり、幅1mの周堤を築くには、6号住居跡の場合、深さ44cmまで掘り下げたはずである。そして周堤の高さは  $h=l-d=86\text{cm}$  あったことになる。その場合、床面の絶対高は35.6mであるから、当時の生活面は約36mであり、壁の残存高が平均12cmであるから、現在に至るまでに32cmが削平されたことになる。この数字をほかの住居跡、例えば西隣の5号住居跡に適用してみると、当時の地表面からの堅穴の深さは60cmと復原され、方形住居の周堤の高さを求める式： $h=\frac{da^2}{4(aw+w^2)}$  (aは方形住居の一辺の長さ)に代入すると、周堤の高さ0.845mが得られる。そして、床面から周堤上端までは1.445mとなり、1~1.5mとされる諸遺跡の例と矛盾しない。また、周堤幅を1mと想定したが、5号と6号住居の間隔は2.8mであり、両住居の同時並存はほとんど考えられず、これら両住居の土器の分析から得られた青野西Ⅰ式(6号)と同Ⅱ式(5号)の時期差の傍証ともなる。

一方、15号住居跡は、第20図の断面図でも明らかなように、異様に深い堅穴であるが、その住居の西壁断面で、周壁に平行する約3cmの厚さの砂質土層を検出面から周壁溝の底にまで約80cmにわたって確認している。これも板材の朽ちた跡がその後入り込んだ砂質土によって残ったと考えられ、壁板ないし羽目板<sup>(注28)</sup>の存在を示唆する。

### 3. 特殊ピットについて

堅穴式住居跡の床面に掘られたピットのうち、柱穴や炉とは考えられないものを「特殊ピット」と呼んで報告したが、大きく2種類に分かれる。1つは円形住居の中央に穿たれた大略円形の深いピットであり、ほかは、隅丸方形ないし方形住居の南あるいは東辺に接して穿たれ、通例方形を呈するピットである。ここでは、本遺跡で4住居に5例検出された、壁際の特特殊ピットを中心に若干考えてみたい。

この種のピットは、青野遺跡でもさほど珍しいものではない。事実、現在まで8次にわたる青野遺跡の調査で、弥生時代後期から古墳時代中期に位置づけられる住居跡は14棟を数えるが、堅穴の特に南辺・東辺部分を含めた大半が調査された方形住居4棟すべてにこ



(注29)  
の種のピットが見られる。一方、青野西遺跡においても、特殊ピットが確認されなかった住居跡の多くは後の遺構によってその部分が消滅していたり、調査地区外に広がっていたりしており、確実に特殊ピットを持たない住居跡と言えるのは、4号・9号・12号の3棟に過ぎない。12号が弥生後期前半～中頃、4号と9号が布留式期と、いずれも本遺跡の最盛期を外れた時期の住居跡であることは興味深い。このような事実からすれば、弥生時代から古墳時代への移行期の青野周辺の隅丸方形ないし方形住居跡は、壁際に特殊ピットを持つのがむしろ常態であったと言えよう。

他の地域を見渡しても、福岡・山口・広島・島根・鳥取・兵庫・大阪・和歌山・愛知・石川・富山・新潟・長野・神奈川・東京等の都府県の諸遺跡に類例が見られ、全国的な分布を示している。そして、そのほとんどが弥生後期から古墳前期に属している。

弥生中期から奈良時代にかけての数百の竪穴式住居跡が検出された鳥取県青木遺跡では、次のような興味深い事実が報告されている。(注31)

(1) 特殊ピットは、床面中央楕円形(弥生中期～後期前半)→中央方形二段(弥生後期後半～終末)→壁際方形二段(古墳初頭・報告書のV・VI期)と変遷し、古墳時代後半頃に消滅し、奈良時代には見られない。

(2) 大・中・小の大半の竪穴式住居跡に見られる。

(3) 焼土・炭・灰等の検出は一切見られず、火所は別に焼土・炉跡として床面中央部近辺で検出されている。

(4) 二段に掘り込み、盛り上がり縁を有し、蓋の使用が考えられる。

青木遺跡での以上のような観察報告は、青野西遺跡の例とほとんど完璧に一致する。ただ、青野西遺跡で3例見られたピット周囲の礫敷は、管見では北陸に1例あるにすぎない。(注32)

次に、特殊ピットの目的・性格については定説がないが、以下の諸説がある。

(1) 貯蔵穴説 従来、報告書等で最も多く採られた説で、竪穴式住居の消費生活の自律化と生産物の蓄積を示す極めて重要な施設であるとされたこともある。(注33)

(2) 工作用ピット説 北陸の玉作関係の遺跡で検出された竪穴式住居内の壁際二重ピットにこのような性格付けが行われ、研磨工程に必要な水の使用と関連づけられている。(注34)

(3) 祭祀関係跡説 上記青木遺跡の報告書で、鏡・滑石勾玉・手づくね土器等の出土遺物から見通しとして採られた説である。(注35)

(4) 屋内幼児埋葬説 縄文時代中期に顕著な埋甕を伴う幼児埋葬の後裔とする渡辺誠氏の説である。近世の靴ぬぎ下の幼児埋葬に連続する妊娠呪術に関連するとされた。(注36)

(5) 胎盤埋納説 これも縄文時代の埋甕の後裔とするが、納められたのは胎盤で、それを戸口に埋めることによって子が丈夫に育つことを願う習俗から来しているとする木下忠

氏の説である。<sup>(注37)</sup>

(6) 梯子設置穴説 住居の入口から床面に下りるための梯子を埋めた穴と考える都出比呂志氏の説である。<sup>(注38)</sup>

そのほかに、(3)の祭祀跡説を一步進めて、(7)建物への祭祀とする説、<sup>(注39)</sup>また(8)炊事に関係した貯水穴とする説等<sup>(注40)</sup>が出されている。

ここで以上の各説について詳細な吟味をする余裕はないが、青野西遺跡例を観察した限りでは、次のことが言えよう。(1)貯蔵穴説に対しては、すでにいくつか反論があるが、床面上に占める面積の割に内部の容積が小さすぎる点は本遺跡でも言えることである。また、(2)の工作用ピット説に対しては、何ら玉作りの痕跡のない圧倒的多数の住居内での存在が難点として挙げられよう。<sup>(注41)</sup>(3)や(7)の祭祀説については、積極的な根拠がなく、反論もし難いが、建物への祭祀としては、むしろ本遺跡の6号住居跡の埋甕(23頁・柱穴の項参照)<sup>(注42)</sup>にその可能性が考えられよう。(6)梯子穴説に対しては、単に梯子を設置した跡にしては作りが丁寧すぎる点が難点である。残る(4)幼児埋納と(5)胎盤埋納の両説は、いずれも縄文時代の埋甕の後裔とする点、入口の壁際床面という位置を重要視する点等、呪術的習俗の痕跡と見る点で一致しているが、幼児を埋葬して次の子の妊娠を願う呪術と見るか、胎盤を埋納してその子の健かな成育を願う呪術と見るかの違いがある。青野西遺跡例の調査からの所見としては、(4)か(5)のいずれか決め難いが、(5)の胎盤埋納説を支持したい。この問題に関する木下氏の著書の各章に述べられた論説が極めて説得力に富んでいるからである。ただし、古墳時代後期から奈良時代にかけて、カマドの傍らに設けられたピットについては、「貯蔵穴」の可能性を残しておきたい。

以上をまとめてみると、青野西遺跡の4棟の住居跡で検出された壁際の特異ピットは、全国で普遍的に見られる住居内の施設で、その目的としては胎盤埋納が考えられる。6号住居跡の床面中央のピットは、青木遺跡例から、壁際のもの前身で、その位置は住居の平面形と関連があるらしい。ただ、同遺跡では古墳時代にも継続するのに対して、青野西遺跡で、布留式化した4号・9号のいずれにも特異ピットが認められない点の評価は、今後の当地域での布留式期の住居跡例の増加を待たねばならないであろう。



## 第5章 結 論

### 第1節 青野西遺跡——総括

#### 1. 遺跡の立地

青野西遺跡は、綾部市青野町上フケに所在する弥生時代終末ないし古墳時代初頭を盛期とする集落遺跡である。遺跡は、北と東を2本の旧河道によって限られるが、地形の観察と土器の散布状態から見て、調査地の南方へはかなり広がっているであろうことが予測される。今回の調査による限り、集落が営まれたのは弥生時代後期中頃から古墳時代前期に限られ、この地は古来、河道あるいは低湿地であった期間がほとんどであったらしいことが本遺跡周辺の土層から推測されるが、自然堤防上の遺跡と言える。

#### 2. 遺構・遺物の変遷

本遺跡の主要な遺構は15棟を数える竪穴式住居跡である。各住居跡からは、質・量の差はあるが、各遺構の時期を決定するに足る遺物が出土し、また遺構自体もその形態・規模・方位、そして切り合い関係等から新旧関係を決定する要素を提供している。以下、青野西遺跡の時期的変遷を11期に分けて追ってみたい。

**前史** 現在の綾部市青野町に人々が住みついた最古の物証は、青野遺跡A地点で出土した1片の縄文土器片であるが、遺構・遺物が顕著になるのは弥生時代中期である。この時期、住居跡こそ未検出であるが、溝や墳墓と考えられる土坑群が数多く検出されているのに対し、青野西遺跡では遺構・遺物とも皆無の状態である。可住地となる自然堤防性微高地が未発達で、青野遺跡に比して「地山」が不安定であったのであろう。

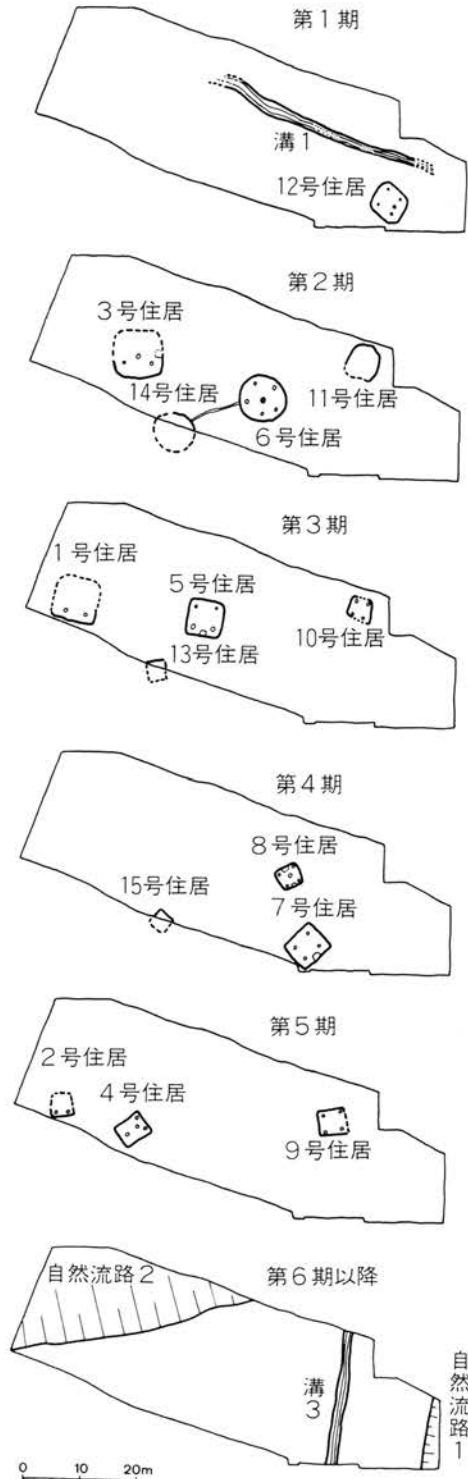
**第1期** (弥生時代後期中頃) 青野西遺跡12号住居跡の時期である。住居跡はややゆがんだ隅丸方形を呈し、器形の分かる唯1点の相伴土器は、畿内的な形態をとどめる長頸壺(182)である。この住居跡から出土したガラス小玉は、綾部市域では最古例であり、墳墓以外からの出土例は、全国的に見てもそう多くはない。<sup>(注43)</sup> 弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、ガラス文化圏のひとつが丹後を中心に認められるが、成山2号墳(4頁)のガラス小玉<sup>(注44)</sup>116個とともに、当地域もこの文化圏に入っていたことを証す資料として位置づけたい。<sup>(注45)</sup>

**第2期** (古墳時代前期前半I期) 第1期と第2期の間には、土器型式で2～3時期(青野A地点第16号住居跡前後)の隔りがある。第2期は、青野西の集落の全盛期の前半にあたり、住居跡は4棟(3号・6号・11号・14号)を数える。円形が2棟(うち1棟は多角形か?)、隅丸方形が2棟である。住居は大きく(平均51m<sup>2</sup>)、入口は東に開いていたようである(79頁)。土器は、丹後系の在地土器に、畿内の庄内式併行の外來系土器が加わり始め

る青野西Ⅰ式である(71頁)。注目される土器としては、今まで府下では丹後地方に限られていた装飾器台(191・240・241)が挙げられよう。<sup>(注46)</sup>また、爾後当地域の主体的土器になっていく畿内系土器を別にすると、外来系土器としては山陰(24・89他)・北陸(90)・近江(91)の特徴を持つ甕形土器が出土している。青野西Ⅰ式直前の土器相が明らかでないので断定は出来ないが、全国的に見られる地域間交流が、綾部でもこの時期に始まっているようである。

**第3期(古墳時代前期前半Ⅱ期)** 集落最盛期の中頃である。住居は第1期と同じく4棟(1号・5号・10号・13号)を数える。大・中型の隅丸方形と小型の方形が混在している(平均床面積34m<sup>2</sup>)。土器は、畿内系古式土器が在地系土器を圧倒する青野西Ⅱ式古段階である(72頁)。外来系土器は、前代に続いて山陰系(62・63他)があり、河内産の庄内式甕(64)が1点出土している(73頁)。

**第4期(古墳時代前期前半Ⅲ期)** 青野西集落の盛期の後半である。住居は3棟(15号・8号・7号)あり、中・小型の方形住居に統一される(平均床面積24m<sup>2</sup>)。前代に比べ、住居の方位が45°程変化し、入口はおそらく南東であろう。土器は青野西Ⅱ式新段階となり、丹後系の土器は存在するがごく少ない。第4期は、当地域での「布留式以前」の最終段階であるが、少なくとも7号住居跡に関しては、畿内で言う布留式古段階に入っていた可能性が高い



第45図 青野西遺跡の遺構の変遷

(73頁)。

**第5期**(古墳時代前期後半) 布留式併行期であり、青野西集落の最終期である。第4期との間に、少なくとも土器ではかなりの差異があり、庄内式影響下の第2～4期(青野西式)から布留式の第5期への移行がこれほどまでに急激であったのかという点については、青野遺跡にも当該期の良好な資料がほとんどなく、今後の問題として残されよう。住居は3棟(2号・4号・9号)を数え、すべて小型の方形住居である(平均床面積22m<sup>2</sup>)。

**第6期**(古墳時代中期) 青野西遺跡を残した集落が廃絶した原因を、洪水とそれによる自然流路1の発生と想定しておく。それを古墳時代中期とする積極的な根拠は全くないが、東隣の青野遺跡においても、作り付けカマドを持ち、船橋OII段階の土器を伴出する数棟の住居跡(注47)を最後に集落が廃絶したと考えられるところからの憶測である。

**第7期**(古墳時代後期～奈良時代) 第6期の後、6世紀末頃になって青野遺跡に再び集落が出現し、7世紀には官衙と寺院を中心とした一大集落に発展した青野綾中地区にあって、青野西地区に遺物の1片すら見られなかった事実は、この地区が当時の由良川(自然流路1＝旧河道C——34頁)にあまりにも近く、居住に適していなかったからと理解しておきたい。

**第8期**(平安時代前期＝9世紀) 第6期に生じたと推測した旧河道C(自然流路1)の河底から出土した土器群は、7世紀中頃から9世紀内に収まる(66頁)。従ってこの河道は9世紀末あるいは10世紀のはじめには停滞し、由良川本流は恐らく青野遺跡の北(第4図B)に移ったと思われる。自然流路2(旧河道I)は、この旧河道B(かA)の延長らしい。

**第9期**(平安時代中期＝10世紀) 青野西遺跡の溝3から出土した土器は、いずれも10世紀中頃前後のもので(66頁)、条里制地割を意識して掘られた南北溝と推定される。なお、綾部市域でのこの時期の土器資料は少なく、上記土器群は今後好資料となろう。

**第10期**(平安時代末期～鎌倉時代＝12～13世紀) 自然流路1・2の双方において、河道の上・中層を占める厚いシルトの堆積の上面、すなわち数層からなる水田耕作土の最下層から瓦器片の出土を見ている。このことから、今回の調査で検出したこれら2本の自然流路は、少なくとも鎌倉時代までには埋まっていたと考えられる。

**第11期**(中世～現代) 青野西地区及び旧河道地区の最上層を占める数層からなる水田耕作土層の時期で、現代に至る水田がいつから始まったかについては、今回の調査では明らかにし得なかった。

今回の調査地の東部、81Pライン辺りを通る農道は、近代に一度掘り込み、磁器片・ガラス瓶・下駄等の混じった土砂を入れ盛り土を行っているが、西方水田地帯に現在残る条里制地割ののっており、溝3とともに綾部条里制跡に関わる遺構として意義づけたい。

## 第2節 古墳出現期の綾部地方

### 1. 古式土師器

後期弥生土器と古式土師器との境界線をどの段階に引くかについては、いまだ学界でも結着を見ていない問題である。これには、土器の変遷そのものの中に画期を求める立場と古墳の発生という歴史的・社会的な画期にそれを見ようとする立場があるが、前者においては土器型式(様式)のどの段階に画期を認めるか、後者においてはどの古墳を最古の古墳と認めるかによって、古くは第12表の IIIa 期(エピ上東式)から新しくは Va 期(布留 I 式)までの各段階に、古墳時代の開始を認める諸説が林立している状態<sup>(注48)</sup>である。

筆者は、上述したように(71頁)、在地の弥生終末期の土器組成に加わる畿内からの外来系土器を綾部の最古の土師器と考え、ほぼ畿内の庄内式に併行する青野西 I 式・II 式の期間(およそ半世紀間であろうか)をかけて、この地方の土器は丹後系を主体とする在地土器から汎全国的に広がる畿内系土器へ変化して行ったことを見た<sup>(注49)</sup>。

### 2. 方形竪穴式住居跡

綾部地方の弥生時代竪穴式住居跡の検出例は決して多くないが、弥生後期には、円形と隅丸方形が混在していたらしいことが窺われる。ところが、青野西第3期(土器の II 式古段階)で、方形住居に変わり、以後斉一化されて布留式期につながって行くのである(80頁)。

### 3. 古墳の出現

現在のところ綾部地方の最古の古墳は、小西町の成山 2・3 号墳である(4頁)。3号墳第2主体部の土器は、丹後古殿遺跡の SE 03 に類似が認められ、「造墓活動の一時点が古墳発生期である庄内式期に求められ<sup>(注50)</sup>」たが、青野西遺跡資料と比較すれば、青野西 II 式古段階前後に比定できよう。

### 4. 綾部地方の古墳時代の開始

以上、当地方における古墳時代の開始を示唆する要素を、土器・住居・古墳の3項目についてまとめてみたが、小型方形住居への変化と古墳の出現時期はほぼ一致し、土器に関しては、古式土師器の流入は一時期先行するが、それが在地土器を凌駕する時期は、先の2要素と一致すると言えよう。やや乱暴であるが、綾部地方に古墳時代が到来したのは、青野西 II 式土器の時期であろうということを一応の結論としておきたい。

注

- 注1 辻本和美・小山雅人「青野遺跡第8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊-3 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター), 1983。
- 注2 綾部市の地理学的・地質学的特質については、『綾部市史』上巻, 1976, 1~30頁参照。
- 注3 中村孝行・田代 弘両氏の御教示による。『加古川・由良川の道』((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター第20回研修会資料), 1983。
- 注4 中村孝行氏の御教示による。『埋蔵文化財研究会第16回研究集会, 発表要旨・関連資料集1』, 1984. 8, 239~242頁。
- 注5 小山雅人「青野西遺跡の発掘調査について」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター), 1983. 9, 8~9頁。
- 注6 約 13,000 m<sup>3</sup>, 石川 昇「且波・山背の前方後円墳と体積」(『京都考古』第40号), 1985. 7。
- 注7 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集-1 綾部市教育委員会), 1982, 3~5頁。
- 注8 木炭の鑑定に関して, 発掘調査に参加された 京都工芸繊維大学学生(当時)の日榮正二氏から「青野西遺跡出土の微小木炭の走査型電子顕微鏡による観察」という原稿をいただき, 「概要」に載せるはずであったが, 当方の勝手な都合でそれが不可能になり, 本報告書においても結論だけを頂戴するような形になってしまい, 氏及び指導にあられた同大学教授黒川正隆先生には, 重ね重ねの失礼をおわびしたい。
- 注9 石野博信・関川尚功『纏向』第3版, 桜井市教育委員会, 1978, 214頁, 図66。
- 注10 石製品に関しては山城郷土資料館の橋本清一氏と当センターの黒坪一樹氏の御教示を得た。
- 注11 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』, 吉川弘文館, 1980, 177頁, 注(4)。
- 注12 平安時代の須恵器に関しては, 当センターの水谷寿克・引原茂治両氏の御教示を得た。
- 注13 石井清司・黒田恭正他「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会), 1981, 35・51~54頁。
- 注14 中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集-1 綾部市教育委員会), 1981, 11~23頁。
- 注15 辻本和美・増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター), 1983, 74~75頁。
- 注16 石野・関川 上掲書(注9), 435~438頁。
- 注17 同上書, 438~439頁。
- 注18 この点に関しても, 上記(注8)の日榮正二氏に胎土分析を行っていただき, この庄内甕の胎土が大阪府八尾市の東山遺跡の出土土器のそれに酷似するという結果をいただいた。
- 注19 調査中の当遺跡に足を運ばれた森岡秀人氏にも確認していただいた。
- 注20 黒田恭正・杉本 宏「京都府久美浜町橋爪遺跡出土の土器について」『古代文化』第33巻第3号, 1983. 3, 46~190頁。
- 注21 高橋美久二他『林遺跡発掘調査報告書』(『網野町文化財調査報告』第1集 網野町教育委員会), 1977。
- 注22 平良泰久「中郡峰山町古殿遺跡」(埋蔵文化財研究会第12回研究集会資料・発表要旨)
- 注23 平良泰久・黒田恭正・常盤井智行他『丹後大山墳墓群』(『京都府丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会), 1983。
- 注24 石井・黒田他, 上掲書(注12)。
- 注25 [織内] 森田克行「第V様式土器の型式細分について」(『安満遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書 第10冊 高槻市教育委員会) 1977による; 寺沢 薫「大和におけるいわゆる第五様式の細別と二, 三の問題」(『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書 第34集 奈良

- 県立榎原考古学研究所), 1980; 井藤暁子「弥生土器——近畿5——」『考古学ジャーナル』No. 219, 1983.6。
- 〔中丹〕奥村清一郎他『半田遺跡発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会, 1975, 23~28頁。
- 〔丹後〕注13・20・23文獻。
- 〔北陸〕谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」(『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌 第26号 石川考古学研究会), 1983による; 橋本澄夫「弥生土器——中部・北陸4——」『考古学ジャーナル』No. 111, 1975.7。
- 〔山陰・山陽〕藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号, 1979による; 高橋 護「弥生土器——山陽4——」『考古学ジャーナル』181号, 1980; 間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号, 1978。
- 〔北部九州〕柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念文化論集』1982による。
- 注26 当遺跡出土土器の編年作業に関しては, 当センター理事原口正三氏の貴重な御助言を得た。
- 注27 都出比呂志「竇穴式住居の周堤と壁体」『考古学研究』第22巻第2号, 1975.10, 63~68頁。
- 注28 同上論文, 64~66頁。
- 注29 釋 龍雄・山下潔巳・川端二三三郎・鈴木忠司・中村孝行『青野遺跡A地点発掘調査報告書』(『綾部市文化財調査報告』第2集 綾部市教育委員会), 1976, (第1・第10・第11号住居跡); 増田信武・中谷雅治・南谷一寿・浪江庸二・藤本昌平・中村孝行『青野遺跡第2次発掘調査概報』(『綾部市文化財調査報告書』第3集 綾部市教育委員会), 1977, (I地点H1)。
- 注30 当初, 地名表を作成するつもりであったが, 各地の報告書を調べるうちに, 分布が余りにも広範囲に拡がり, また遺跡数も膨大な量にのぼることが判明し, 今回は断念した。Cf. 市堀元一「特殊ピットを伴う集落遺跡について」『北陸の考古学』(石川考古学研究会々誌第26号) 1983 365~379頁; 後出の木下氏著書(注37), 10~17・41~52頁等。
- 注31 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育委員会, 1978, 本文編, 330~331頁。
- 注32 市堀氏上掲論文(注30), 370~371頁, 第6図(石川県加賀市小菅波遺跡1号住居跡)。
- 注33 Cf. 木下氏後出書(注37), 41~43頁。
- 注34 寺村光晴『古代玉作の研究』吉川弘文館, 1966, 102~134頁; 河村好光「古墳社会成立期における玉生産の展開」『考古学研究』第23巻第3号, 1976.12, 24~25頁。
- 注35 注31に同じ。
- 注36 渡辺 誠「埋甕考(続)」『古代文化』第20巻第7号, 1969, 155~156頁。
- 注37 木下 忠『埋甕——古代の出産習俗』, 雄山閣, 1981, 特に37~52頁; 桐原 健「縄文中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』第18巻第3号, 1967。
- 注38 都出氏上掲論文(注27), 67頁。
- 注39 注31文献 331頁に引用された福市遺跡例。
- 注40 木下氏上掲書(注36), 47頁による。
- 注41 河村好光氏は上掲論文(注34)で, 「これは, いかなる理由によるものか。……〔塚崎〕3号址の二重ピットは, 粘土の貼床の下から発見されている。したがって, いずれも途中で工作施設が放棄されているのである」(25頁)とされているが, むしろ「二重ピット」が本来工作施設ではなかった可能性も考えるべきであろう。Cf. 寺村氏上掲書(注11), 84~85頁注51。
- 注42 奈良県下で類例(弥生中期)があると聞いているが, 報告書未刊の由。
- 注43 藤田 等「弥生時代のガラス」『考古論集(慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集)』, 1977, 155~158頁。

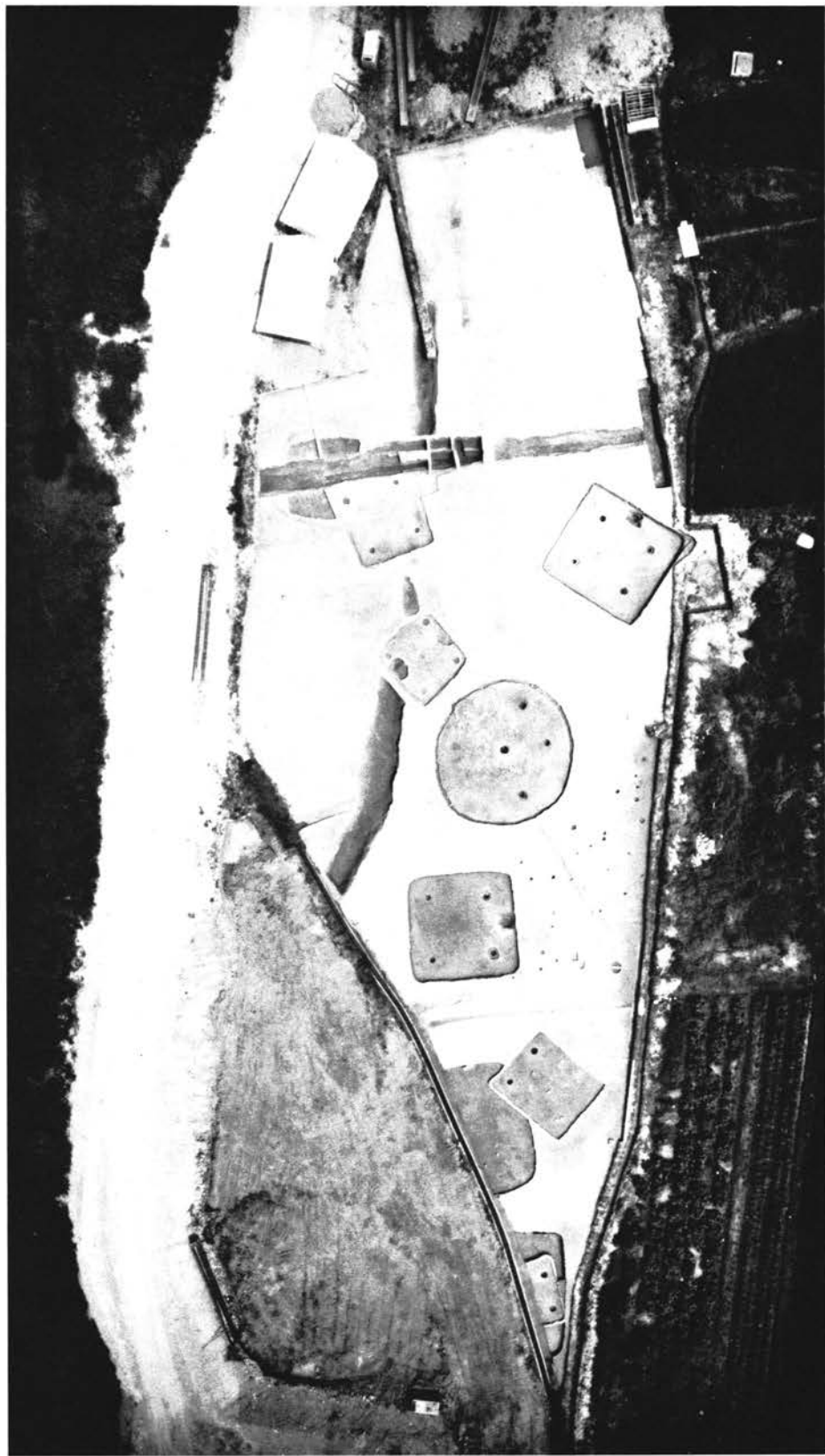
- 注44 黒田恭正「ガラスの玉」『歴史公論』第9巻第3号 (No. 88), 118~119頁。
- 注45 堤 圭三郎「成山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1966)』京都府教育委員会), 1966, 40~45頁, 図版第16~19; 『丹後郷土資料館資料目録』第1集 京都府立丹後郷土資料館, 1980, 78~80頁。
- 注46 最近, 南丹の亀岡市でも出土例が見られた: 水谷寿克・田代 弘・石井清司「国道9号バイパス関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター), 1984, 42頁, 第23図22。
- 注47 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会), 1982, 43頁
- 注48 寺沢 上掲書 (注25), 189~192頁参照。
- 注49 柳田康雄氏が, 上掲論文 (注25), 879~881頁, 及び「シンポジウム 三世紀の九州と近畿」(1983年11月6日 於橿原考古学研究所附属博物館)における発言に述べられた在地の西新式土器の段階に畿内庄内式土器を含む外来系土器が伴い始め, 西新式は布留式古段階まで併存するという北部九州の例が大いに参考となった。一方, 全国各地に拡がる「古式土師器化現象」の震源地と目される畿内中心部自体において, 最古の土師器をどの段階と見るかという点については, 本節の冒頭に引いた諸説のうち, 庄内式の成立にその画期を認めたい。
- 注50 杉本 宏「成山古墳群」『丹波の古墳 I ——由良川流域の古墳——』山城考古学研究会, 1983, 64頁。

# 圖 版





青野西遺跡周辺航空写真（上が東）



青野西遺跡調査地航空写真（上が北）



(1) 青野西遺跡全景（東から）



(2) 青野西遺跡全景（西から）

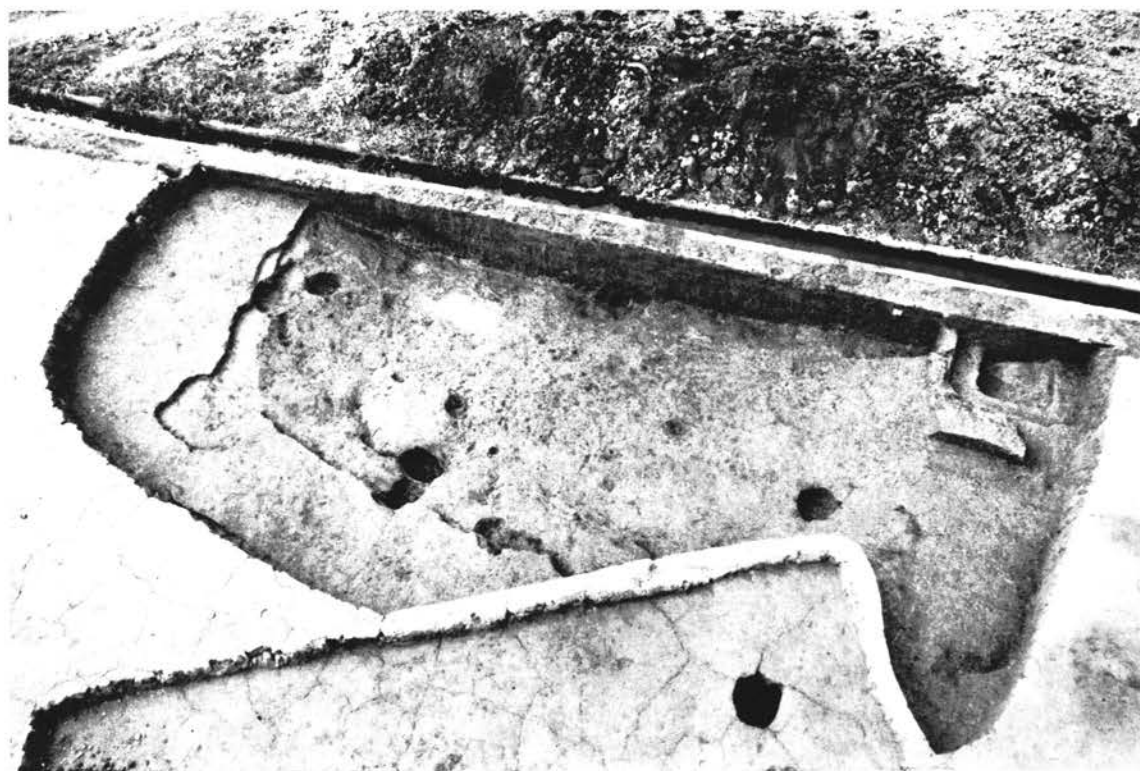


(1) 1号住居跡（北西から）

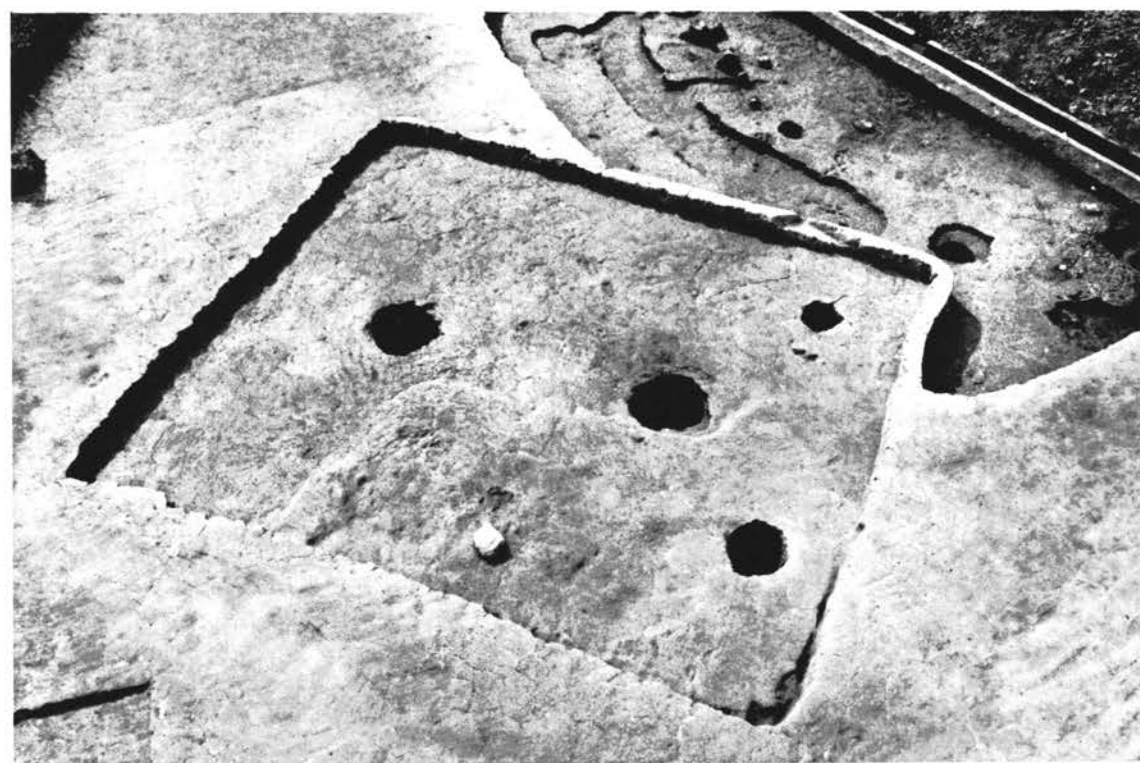


(2) 2号住居跡（北東から）

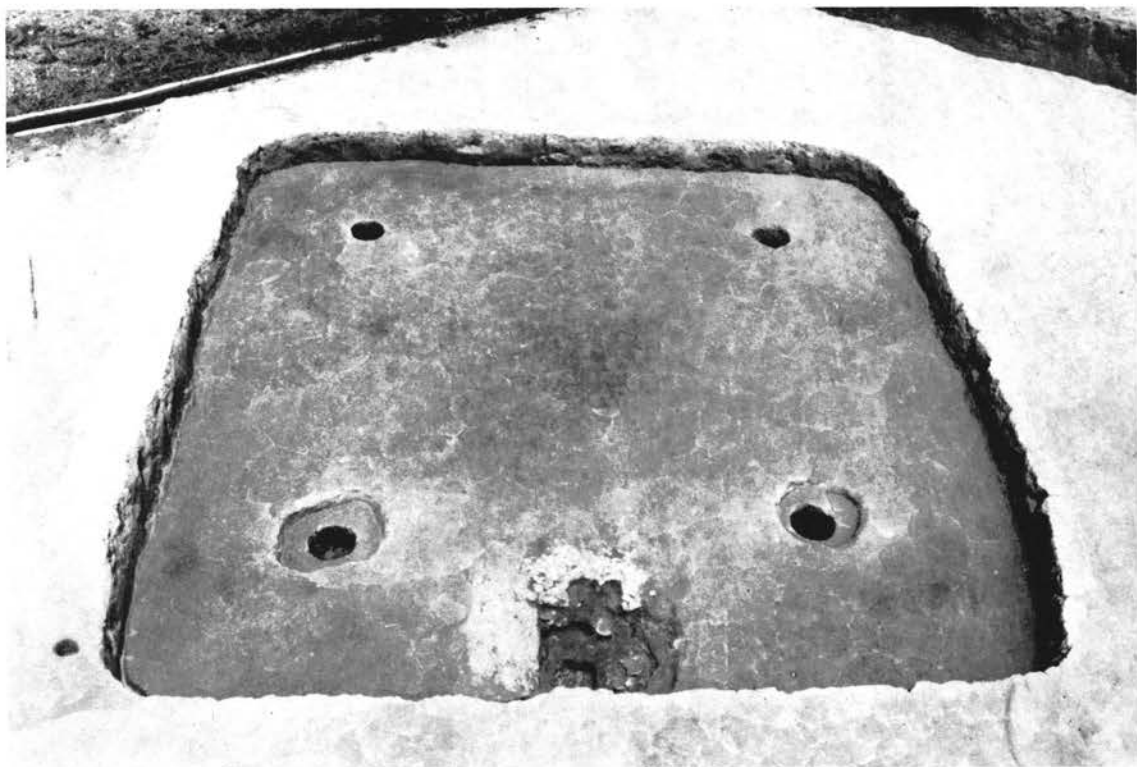




(1) 3号住居跡 (南東から)



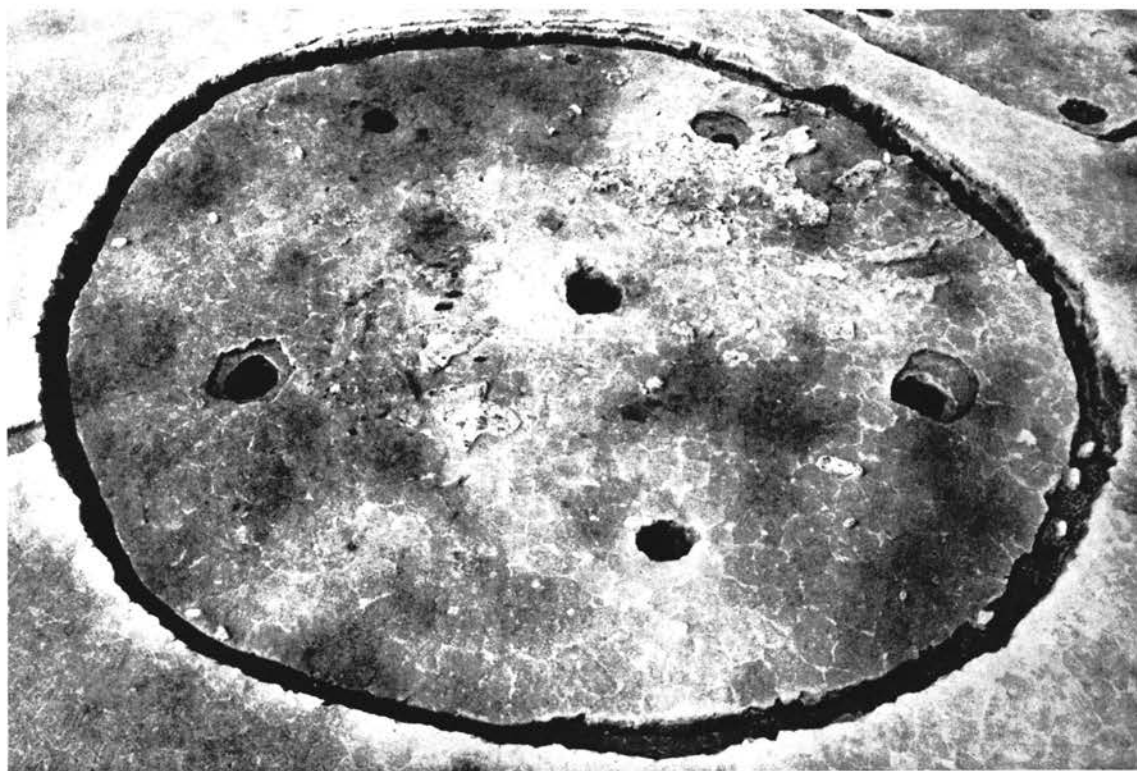
(2) 4号住居跡 (南東から)



(1) 5号住居跡（南から）



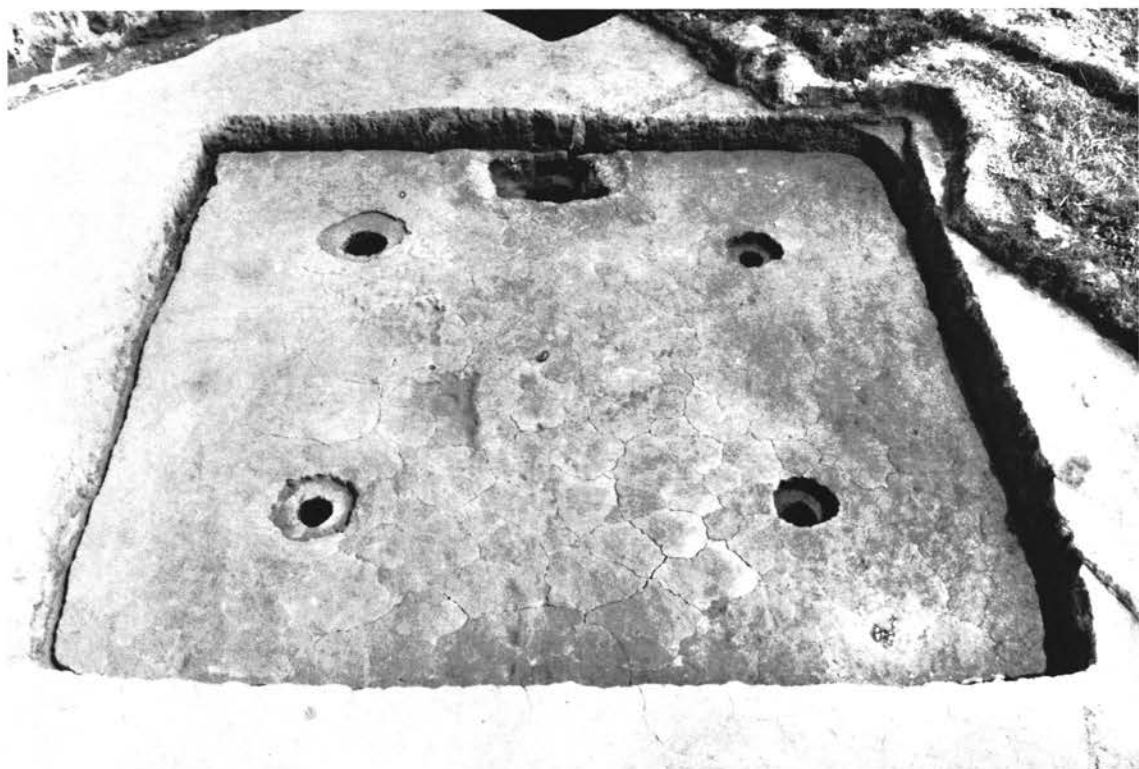
(2) 同、特殊ピット（上が北）



(1) 6号住居跡 (南から)



(2) 同、北東柱穴附近 甕(81)・土錘出土状態 (東から)

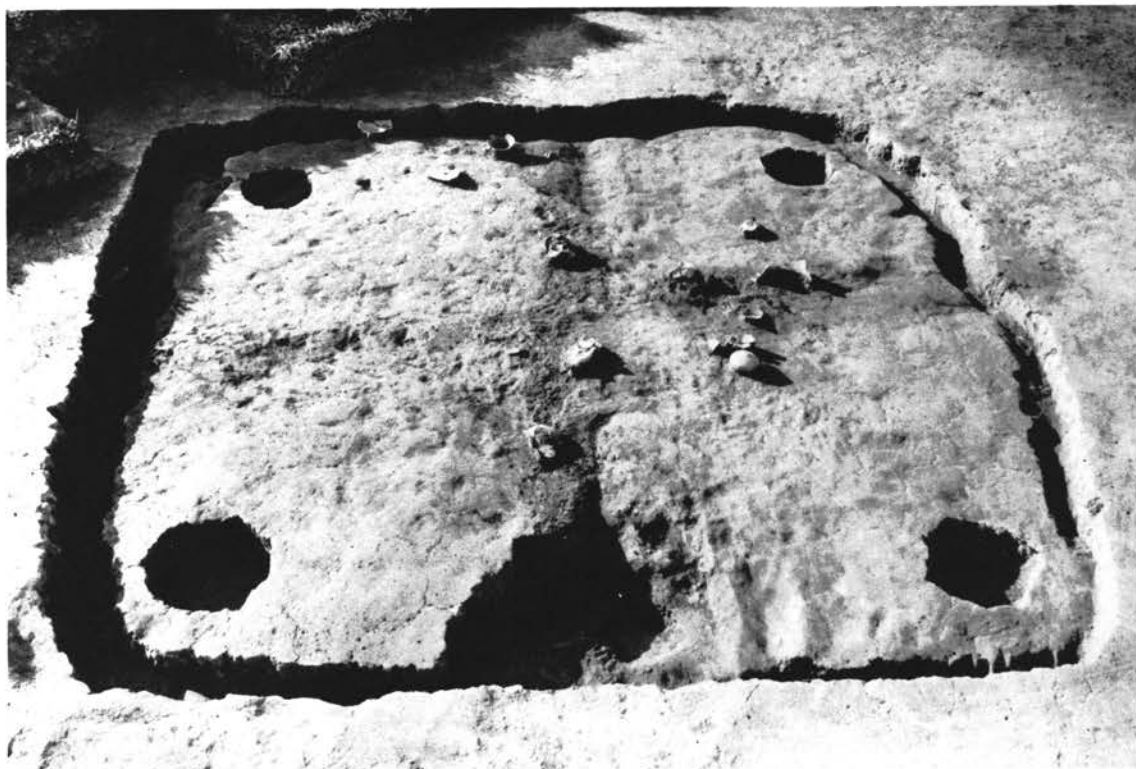


(1) 7号住居跡（北西から）



(2) 同、特殊ピット（南東から）

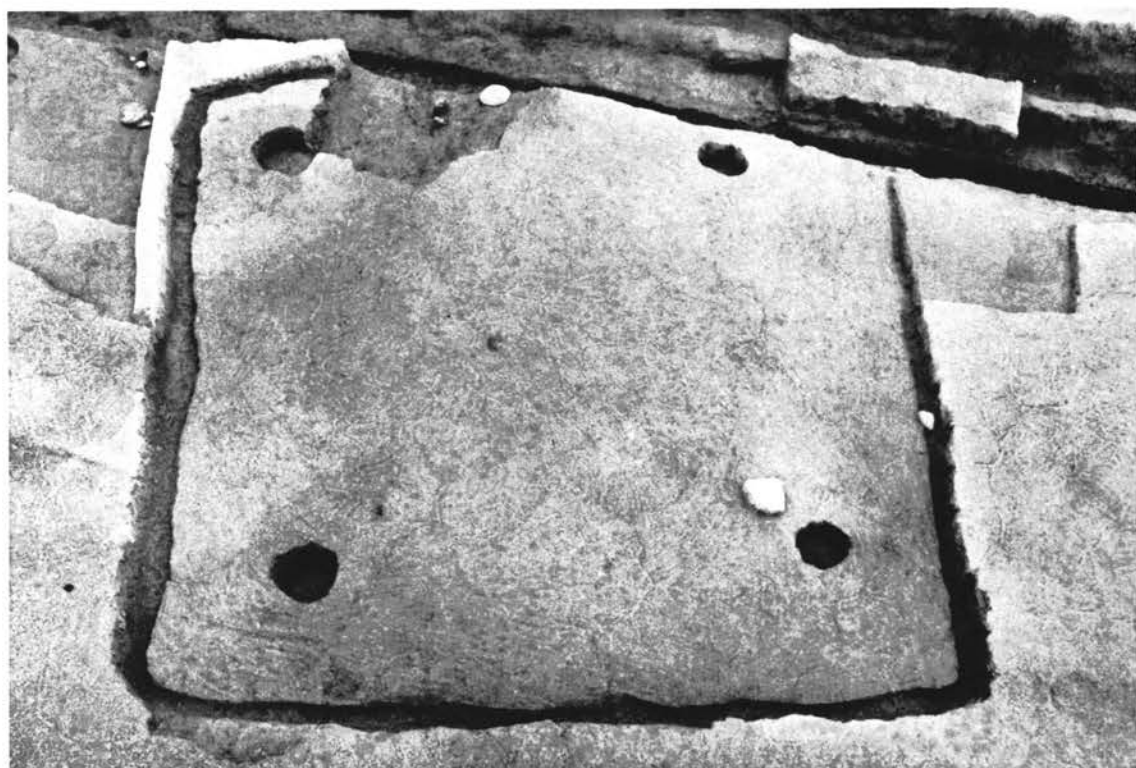




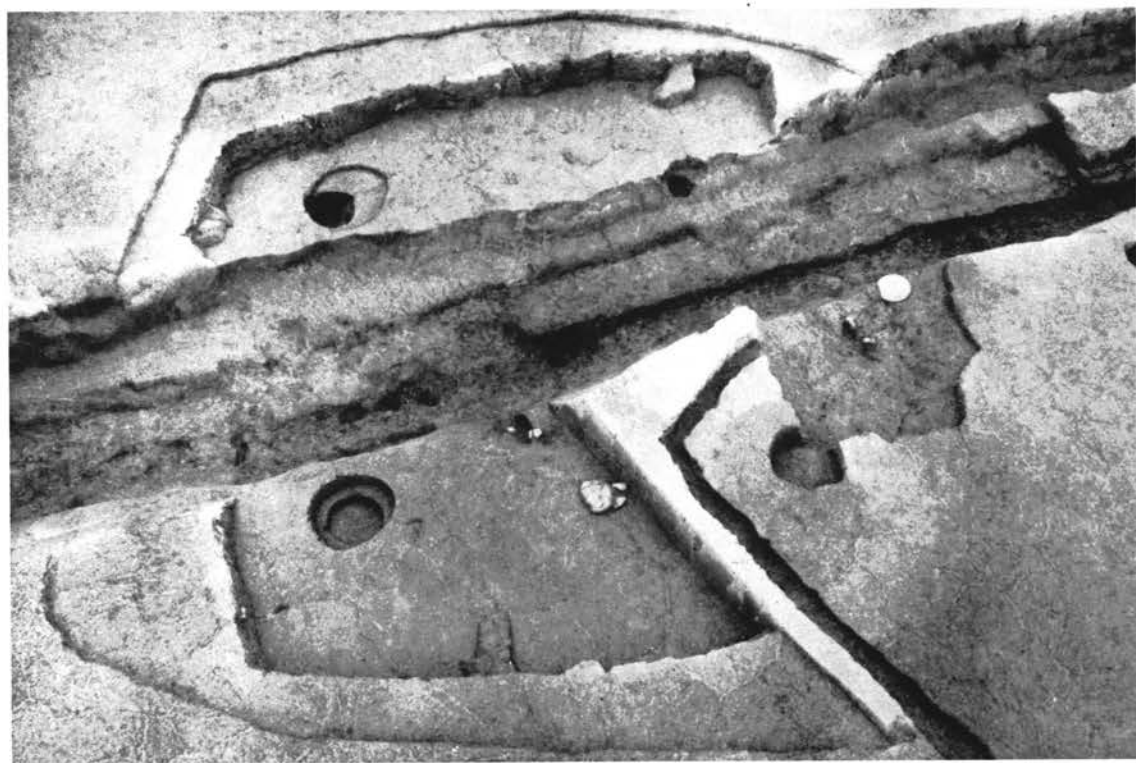
(1) 8号住居跡床面遺物出土状態 (南東から)



(2) 8号住居跡、左手に土塙1、後方に7号住居跡 (北から)



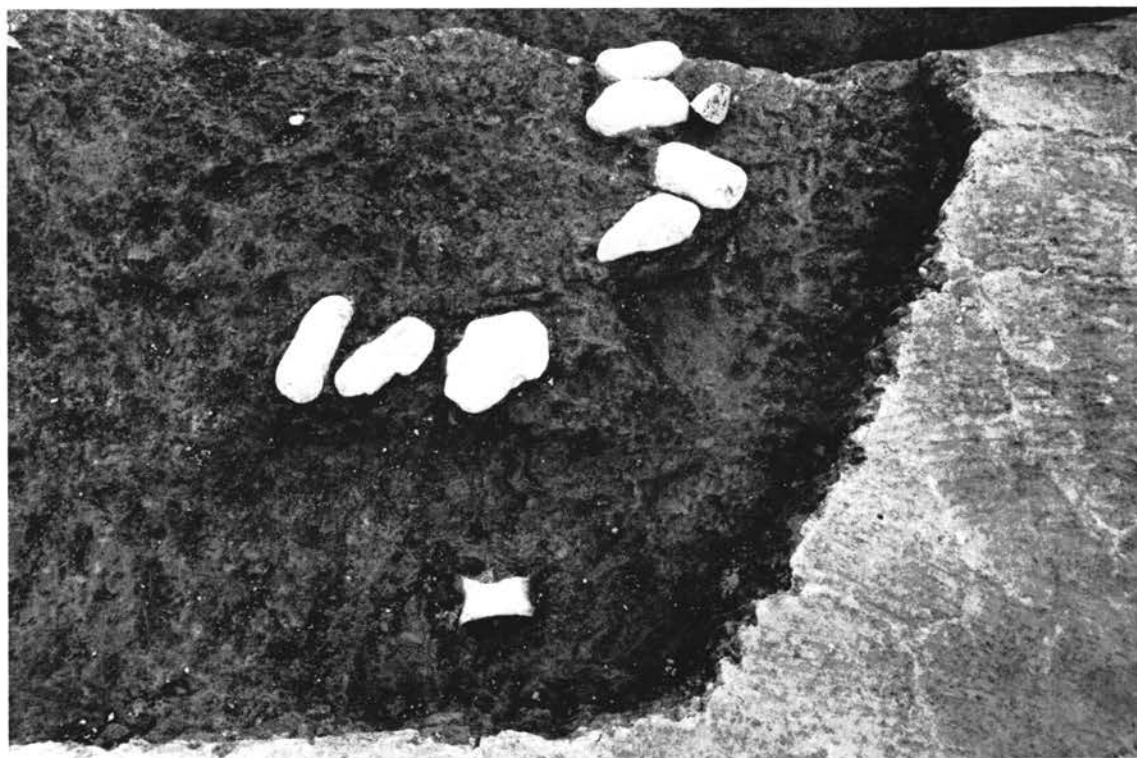
(1) 9号住居跡 (南西から)



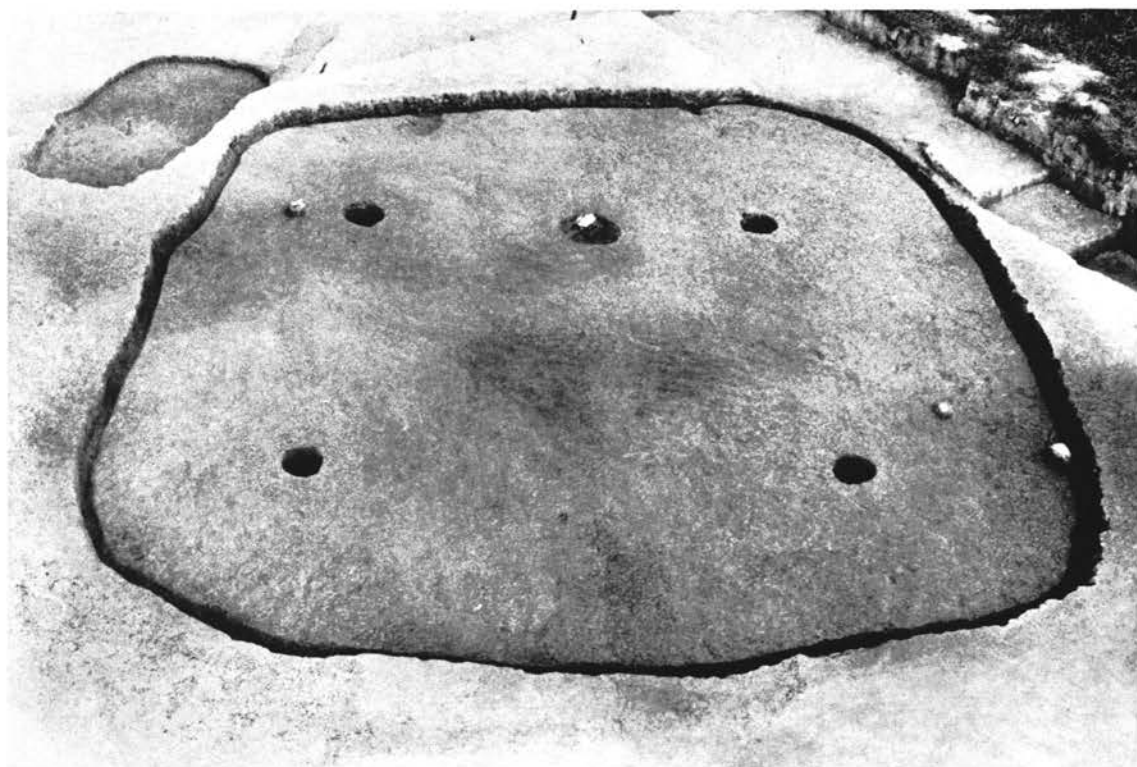
(2) 10号・11号住居跡、右手に9号住居跡と土壇5 (西から)



(1) 10号住居跡上層・中央に溝3 (北から)



(2) 10号住居跡上層配石 (東から)

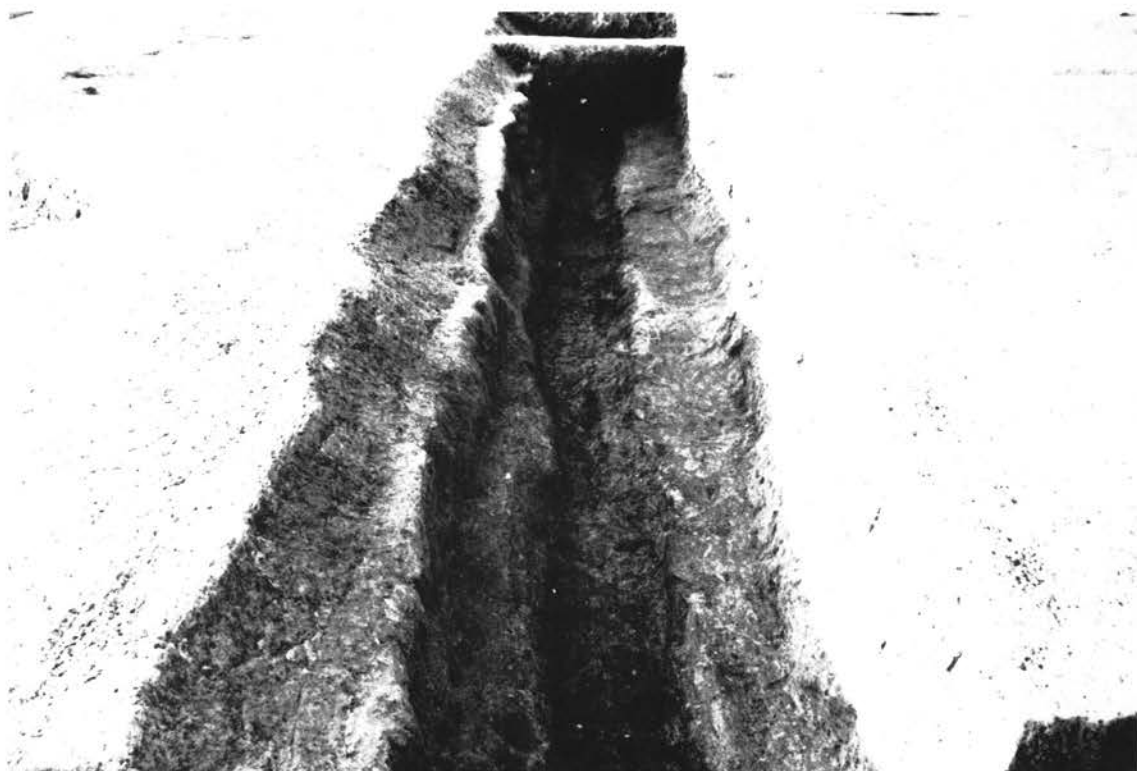


(1) 12号住居跡（北西から）



(2) 13号(左)・14号(右)・15号(中央)各住居跡（北西から）





(1) 溝3南半部 (南から)



(2) 溝3断面 [09ライン] (北から)



(1) 試掘第7トレンチ、自然流跡1東岸部断面（北西から）



(2) 試掘第9トレンチ東から6m・自然流路1（土器出土地点）



182



182(記号文)



151



45



132

壺形土器：H(182)，A<sub>1</sub>(151)，C<sub>1</sub>(132)，C<sub>2</sub>(45)



81



60



5

甕形土器：A<sub>2</sub>(81)、D<sub>2</sub>(60)、D<sub>1</sub>(5)





64



94



91



90



95



94(底部)



96



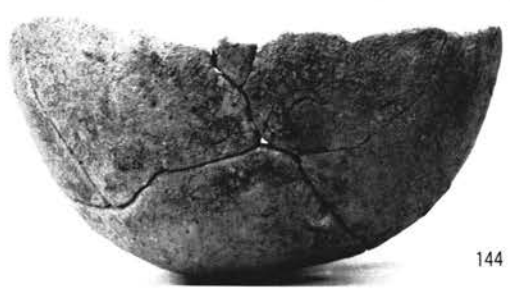
190

甕形土器：I (64)、H(91)、G(90)

鉢形土器：A(94)、B<sub>1</sub>(95.96)、D<sub>2</sub>(190)



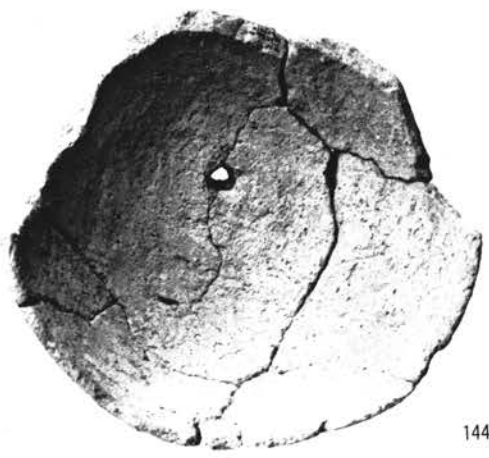
27



144



122



144



123

鉢形土器：E<sub>1</sub>(27)、F<sub>1</sub>(122)、H(144)、G(123)



70



141



125



173

高杯形土器：E(70)、B(141)、D<sub>2</sub>(125)、G(173)



241



127

器台形土器：B(241)、C(127)



73



9

器台形土器：D<sub>1</sub>(73)、不明(9)



210



129



130

手焙り形土器(210)、蓋(129)、異形土器(130)



30



32



145



146



39



211

布留式土器：壺E (30.145)、壺G (32)、壺F (146)、高杯F (39.211)



35



36



37

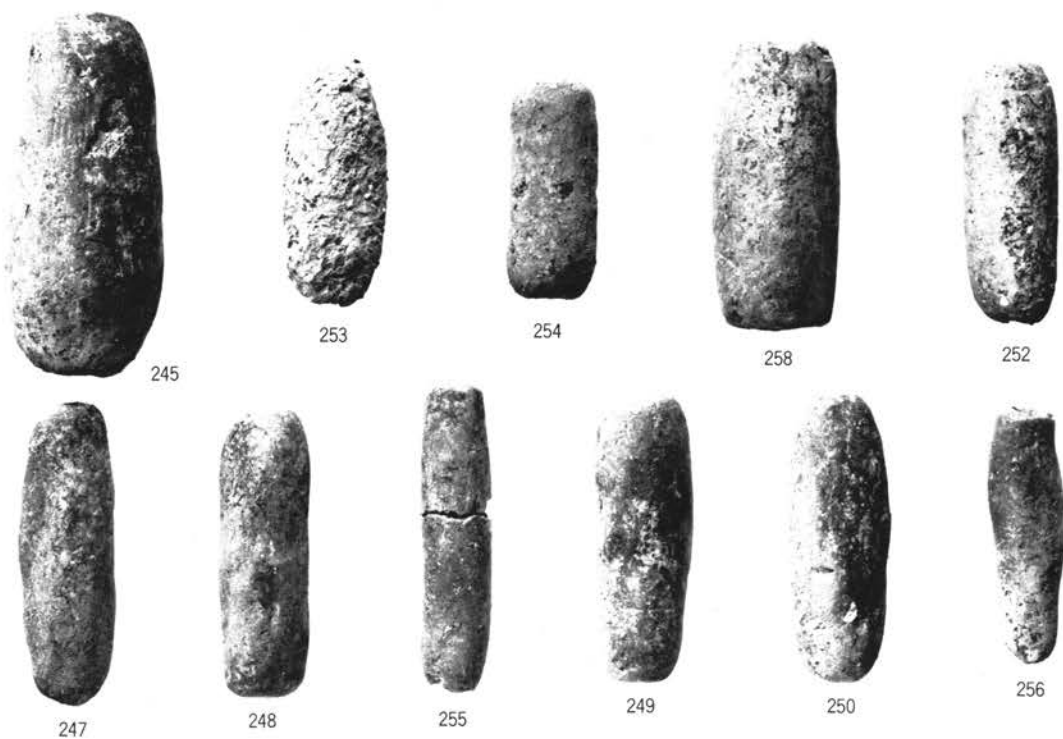


148

布留式土器：鉢B<sub>1</sub> (35)、F<sub>2</sub> (36.37.148)



青野西遺跡出土主要土器



土錘(1)：6号住居跡出土



土錘(2)：その他の遺構出土

須恵器杯(285)と土師器杯(291)





270



271



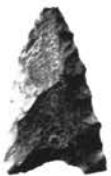
272



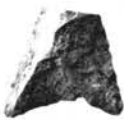
273



a



268



269



275



276



274

石器・砥石・玉類：aは土壙5出土の礫片

## 京都府遺跡調査報告書 第4冊

昭和60年12月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社  
代表者 中西 亮

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL (075)441-3155 (代)

『京都府遺跡調査報告書』第4冊 正誤表

頁	行	誤	正
1	下から12	第98条	第57条
28	下から6	えぐり	掘り
34	下から15	第41図	第42図
34	下から13	第2層	第Ⅱ層
39	下から12	第25・27図	第26・27図
49	表最終行	床面	中層
61	下から1	その1:211~216	その1:212~216
87	下から9	土器は	土器(第3図参照)
88	下から4	(注12)。	(注13)。